口寄せ特化一族の末裔ちゃん

深蒼鉄鋼

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

口寄せの術を主軸に戦う、ちょっと変わった秘伝忍術をもつ少女。

そんな彼女が忍界を渡り歩く物語。

ただひたすら死の恐怖から逃れるために、暴力を以て誰にも害されない様に。

目次

少女編
死がやって来た日 1
残った家族 5
逃げた先に 9
痛み堪えて 13
夢現獣の術 17
火に背を向けて 21
芸術家との出会い 25
それが欲しい 29
新たな知見 33
幸せのために 37
罪も厭わない 40
血と禁をその手に 44
国家S級犯罪者 48
出会いあれば 52
幼気な犯罪者編
海を渡るは難しい 56
簡単なお仕事 60
鬼人と白雪 63
運命の軋み 67
想定外は世の常 70
子供たちの戦い 74
その慟哭は 79
感情の制御 83

橋の上の戦い 88
故に開錠血 93
幸せの手掛かり 97
素直だからこそ 101
血を巡る少女編
過激な情報収集 105
古き血の跡 109
最後の寄木 113
汝ら鵺の背に集え 116
飼い犬に手を噛ませる 121
幼い月との邂逅 126
もう怖くないよ 130
月は一人じゃ輝けない 134
幸せにする才能 138
鬼の居ぬ間に 141
鬼と月、あるいは流々 145
親愛なる天秤 149
肉噛みの竜 153
もういい、もういいよ 157
その鎖は 161
悦楽を覚えた日 165

少女編
死がやって来た日

口寄せの術。

それはある程度の実力を持つ忍者ならば、それこそ下忍ですら行使可能な術だ。

そんな誰にでも扱える初歩の時空間忍術であり、さらにその使い方は多岐に及ぶ。故に愛用する忍者は殊の外多い。下忍から影クラスまで、最早使ったことのない忍者はいやしないだろう。

愛用者の多い術と言えば凄そうに聞こえるが、しかしてその扱われ方は所謂クナイや兵糧丸などの忍具に近い。

だがそれは仕方のないことでもある。結局口寄せの術というのは、武器の取り出しや偵察用の獣を呼び出す術なのだ。大型の獣や戦闘特化の口寄せする者もいないではないが、そのチャクラ消費量や契約機会の少なさでは厳しいと言える。

確かに決定力になり得る巨躯や特殊な忍術を持つ忍獣は、とても強力だ。場合によっては一騎当千の働きをしてくれるはずだ。とある仙境に住むと言う蝦蟇や蟒蛇が目の前に立ち塞がったなら、その絶望はひとしおだろう。

そんな大物を呼び出せるチャクラがあるなら、という点に目を瞑れば――――――。

どの国にも属していない、隙間の様な山間にある小さな住処。近くの川と開墾した畑、そして月に一度街に行くというこじんまりとした生活を送っている一家がいた。

いや……正しくは一家ではなく、その三人だけの一族がいた。

寄木一族。

それが彼らの血の名前だった。

遠く戦国時代からある古き血ではあるが、戦乱の中に消えた……消えたとされていた一族の終着点。

彼らは誰にも知られず、血と術を守っていた。
そう、守っていた。今日までは。
「やっぱり大したことないわね。所詮は口寄せの術しか使えない劣等一族だわ」
「カフッ……！　鵺……逃げろ……！」
病的なまでに白い肌と蛇の様な目をした人間が、血の海の中悠々と立っていた。そしてその手には、つい先ほど男を切り裂いた草薙の剣が握られている。
倒れ伏して己の血の中に沈んでいる男は、家の奥壁で震えている一人娘に逃げろと叫んだ。彼の横には既にこと切れた妻がいた。
自分の娘もこうなると恐怖し、必死に叫んでいた。
「ヒッ……！」
ギョロリと蛇男の眼が突き刺さる。大凡経験したことのない寒気に襲われ、少女は震えることしかできない。
「ふん、寄木一族には秘伝の術があると聞いたから来たのに……死に掛けても使いやしないなんて。とんだガセネタだったようね。期待外れだわ」
蛇男は失望したように吐き捨て、倒れている男の背中にもう一度刃を突き立てた。それで男はこと切れた。
今ここにあるのは蛇に睨まれた、憐れな雛鳥のみ。
そして今、その雛鳥さえも毒牙に掛けられようとしていた。
「まぁいいわ。子供の死体は不足していたし、実験体くらいにはなるでしょう。安心して逝きなさい」
「い、いやぁ！」
眼前に迫った刃を、転がる様に避ける。無様だが、生きている。
少女は今際にて、古い忍者としての血を活性化させた。何としても、生き延びるために。死にたくないと叫んで！
「く……口寄せの術！」
父と母に教えてもらった、たった二つだけの術……その片割れ。恐怖で歯の根が合わない中、必死に食い千切った親指から血が垂れる。
そして勢い良く地面に叩きつけ、その存在を呼び出した。

「増えろ！」
　そしてもう一つの術も、発動する。
「な、何よこれ！」
　驚愕の声が白い壁の向こう側から聞こえる。そしてそれに構っている暇は、少女……寄木　鵺にはなかった。
「口寄せの術！」
　連続してもう一つの存在を呼び出す。それは丸々と育った熊だった。
「家を壊していい！　行って！」
　熊は鵺の言葉を聞くや否や、彼女を背負い壁に突進する。頑丈な造りではない家の壁はすぐさま砕け、彼らは勢いよく外へ逃げ出した。
「クソ！　小賢しい真似を……！」
　蛇男は手に収まった白い鳥を地面に叩きつけ、ギリギリと歯を鳴らした。彼はまさかあそこから反攻するとは想像だにしておらず、その動揺が彼女の逃走を赦してしまった。
（妙な術を使ったわね……！　もしかしてあれが秘伝の術……？）
　彼女がやったことは至極単純だった。
　白い鳥が口寄せされると同時に、一つ命令を出した。『増えろ』と。
　それが白い鳥に仕込まれた術のトリガーになっており、一瞬にして白い壁が出来たのかと錯覚するほど増殖したのだ。しかもそれは幻術などではなく実体で、その質量に圧倒された。
　そしてその隙を突いて、口寄せされた熊が少女を担いで家を脱出した。その際も熊は号令と共に、いくら脆そうとは言え三人の人間が暮らしていた家を一撃で粉砕したのだ。明らかにその膂力は増強されていた。
「今なら……いや、少し時間を掛け過ぎたわね」
　口寄せされた鳥とは言え、増える以外大した技能は無かったため一蹴するのは容易い。しかし初動の遅れと風遁による破壊の残滓が収まるまで、あの少女が逃げる時間は稼がれたと言えるだろう。
　さらに言えば、あの分だと逃走用の口寄せも用意してあるに違いないと、蛇男は推測した。

「まぁいいわ。次見つけた時は……容赦しない」
不機嫌そうに鼻を鳴らし、最早廃墟となった家を去る。
その場にあった生命の吐息は、消え去っていた。

残った家族

「う……ん……」

暗闇の中、鵺は目を覚ました。その彼女に侍る様に、そして寝具の様に丸まるモグラも彼女に合わせて起床する。

ここはモグラが作った穴倉の中だった。あの恐ろしい蛇男から逃げて数時間。幻術で周囲のモノの姿を隠せる蛤まで使って、チャクラも体力も限界だった鵺はモグラを口寄せし、寝床を作ったのだ。

「そっか……夢じゃなかったのか……」

微睡みの中にいた少女は、覚醒と共にあの惨劇を思い出した。目の前で父が、母が、無慈悲に葬られる過程を。彼らとて抵抗しなかった訳ではない。ただ、あの男の力の前では無意味だっただけ。戦国時代の一族ならともかく、今や隠れ住むだけの忍びですらない者達だ。勝てる道理はない。

そう、彼らは少し変わった口寄せの術が使えるだけで、本人の能力は決して高くないのだ。

キュールル……

モグラが鳴く。不安定に揺れる少女の心を慮って。

鳥も、熊も、蛤も、そしてモグラも、彼らにとって少女は親であり友人であり、家族だった。

そしてそれは一族の秘伝忍術によるものだった。

秘伝・夢現獣（ゆめうつつけもの）の術。

彼らは夢の中で創り出した口寄せ獣の子供を育て、成長したそれらを現実に口寄せする。そして、育てられた獣たちは主の代わりにそれぞれ一つの術を持つのだ。

白い鳥……ハクリンならば影分身の術を。

熊……茶鬼丸ならば怪力の術を。

大蛤……幻来ならば幻術・蜃気楼の術を。

モグラ……ドリュウならば土遁・土中遊泳の術を。

他にも幾匹かいるが、この四体が彼女の逃走を助けた口寄せ獣たちだった。

「これからどうしよう……」
ひどく細い声が暗闇に広がる。ドリュウの体温だけが、今の鵺にとって唯一の寄る辺だった。
「どうすればいいと思う？　ドリュウさん……」
毛皮に埋まる様に凭れかかり、鵺はドリュウに助言を求めた。何もこれは犬や猫に独り言を聞かせる様なモノではない。彼らは会話できるのだ。声ではなく、心で。
『鵺……まずは生きることを優先すべきだ』
「うん……とっても悲しくて、ずっと眠っていたいけど……死ぬのはもっと怖いよ……」
『私とて、鵺を失いたくない。我々はもはや唯一の家族なのだ』
「……うん」
大らかで温かな声が鵺の心に沁みる。それと同時に、あの無慈悲な死そのものへの恐怖が蘇る。
再び震えだした鵺を、身体を起こしたドリュウが包んだ。
『あれには勝てない。少なくとも、今の我々では』
それが鵺含め口寄せ獣一同が出した答えだった。寄木一族の術は確かに強力だが、弱点の方が多い場面がある。
そもそも創り出せる口寄せ獣の数は、無制限ではなくその者の才能によって決まっている。尚且つ、一度創り出した獣は消せないのだ。彼らの本体は夢の中にあるので、現実で死んでも本当に死んだことにもならない。
体感では、今使役している口寄せ獣七体の他にあと五体。それが鵺の限界だった。
もう一つの弱点は、一体完成するまでにはそれなりの時間と準備がいるという点だ。
容姿を決定し、幼体から育て上げ、術を与える。夢の中で育てるが故に現実ほど時間は掛からないが、それでも決して少なくない時間を要する。
そしてこの与える術は、鵺本人が使えなくともよいが、印と術の仕組みを正しく知っていなければならない。自然と子供の鵺に用意で

きる術は簡単なモノばかりになり、高等忍術などは与えようがない。術を知る機会が無ければ。

今使役している口寄せ獣が持っている術も、一族で集め継承してきた有用な術を参考にしたモノが多い。

有用な口寄せ獣を纏めている書もあった。幻術を使う大蛤もそこに記されていた。

しかしそれもあの急襲で失われた。燃えたり持ち出されたりしていなければまだあるだろうが、鵺にあの家へ戻るだけの勇気は無かった。

そして最後の弱点。それはチャクラの消費量だ。

彼らの術のベースはやはり、どこまでいっても口寄せの術でしかないので、呼び出す獣が大きかったり強力な術を持つ程消費が多い。

三体までならば一度に出現させられ、かつ持続的にチャクラを消費することは無いが、そもそも呼び出せなければ意味がない。

そんな意味の無い口寄せ獣……言い換えれば大きくて強い口寄せ獣は鵺の中にいない。故にこそ、あの時は逃げの一手だったのだ。

夢現獣の術に頼らず既存の口寄せと契約することも可能だが、その伝手がない。昔の寄木一族ならいざ知らず、今の彼女に契約巻物等は用意できない。

彼女自ら探さなければならないのだ。

『今いる家族は、悪く言えば小手先の者が多い。手札が多いとも言えるが、やはり戦闘力が不足しているのは否めない。十把一絡げの敵ならば問題は無いがな』

「新しい子……育てる？」

『いや、家にいた頃ならばともかく……今は強力な術を用意できない』

身体の大きく、力が強い口寄せ獣は創れるだろうが、そこに強力な術や有用な術が付属していなければやはり心許ない。よほど特殊な術でない限り付与出来るのが、夢現獣の術の最たる長所だ。だがやはり肝心の術を知らなければ、無為に育成可能ストックを減らすことになるだろう。

夢現獣の術にて生み出される口寄せ獣は、一体一体が鵺にとっての

切り札であり、武器の全てだ。何せ寄木一族は口寄せの術と夢現獣の術しか扱えない。それが長き血の中で定められた彼らの特性であり弱点でもあった。

『ひとまず、隠れながらも人の間で生きていくしかあるまい。どこかの里に忍び込めれば、術の収集も可能のはずだ』

「そうだね、まずは生きなきゃ……ずっとこの穴倉で隠れているわけにもいかないし……」

第一目標、生存。そして……

「あの蛇男……絶対許さない……」

叶うならば、弔いを。

逃げた先に

森の中に影一つ。その少女は立派な角を生やした鹿に跨り、真っ直ぐと森の中を進んでいた。

大柄の鹿と比べ、少女の体躯はかなり小さい。何せまだ九つであり、発育も良いとは言えない。成人男性の腰に頭上が来るほどの背丈だ。

なぜ森の中にいると言うと、鵺はひとまず生きるための場所を探して彷徨っていたのだ。そこで父からの聞きかじりを思い出し、火の国があるらしい方向へ進んでいると広大な森にぶつかったと言う訳だ。

「鹿尊（ろくそん）、人里見つかるかなぁ」

『火の国とやらの方向へは向かっている。あるいは既にこの森が国の一部やもしれぬ。故に心配することはなく、いずれ人の営みが見えてこよう』

鵺の心の中に、芯のある老人の様な声が沁みる。彼ら口寄せ獣たちはそれぞれの意識と個性を持っているのだ。それは今、両親を失った彼女にとって何よりも温かい人間性だった。

鹿尊の角が淡い緑に光る。

感知の術に反応があったらしい。

『ふむ、何やら大勢のチャクラを感じる……これはかなり大きい集落と感じるのお』

「えっ！　鹿尊行こう！」

少女はしばらくぶりの笑顔を浮かべた。家族たちと協力すれば森での野宿はそう難しいことではないが、やはり幼い彼女にとっては多大な負担になる。

故にこそ、彼女のみならず口寄せ獣たちも人里を強く望んでいたのだ。

しばし歩く。少女は一歩ごとに期待感を膨らませていた。

が、その期待は最悪の形で裏切られることになる。

『っ！　鵺！　幻来と茶鬼丸を！』

「え?!」
鹿尊の強い警告により、咄嗟に口寄せの術を行う。行ってしまう。それほどに、鵺の家族に対する信頼は厚かったから。
大蛤の幻来と熊の茶鬼丸が口寄せされた瞬間、幻来が幻術の媒体である無色の霧を放出し、彼らを隠す。
するとそのすぐ近くに、男女二人の忍者と一匹の中型犬が降り立った。
彼らは話し始める。
「……何もいないぞ」
「いえ、ここに強い匂いが残ってる。ほんの数秒前までは確かに、誰かいたはずよ」
獣の様なくノ一が鼻をヒクヒクと動かし、周囲に注意を向ける。彼女の足元にいる犬も同様だ。何かを探っている。
「一瞬で感知範囲外までいなくなるとは……瞬身の術だとすればかなりの使い手だぞ」
「ええ、それこそ四代目様に勝るとも劣らないほどのね」
警戒を強める彼らが探しているのは、まさに目と鼻の先にいる鵺だ。幻来の幻術は強力で姿だけでなく気配やチャクラ、匂いや音まで隠してくれるが、その範囲は狭い。
故に動けない。もし何らかの方法で見つかれば、捕縛は免れないだろう。
そしてもう一つ、彼女にとって絶対に見つかれない理由があった。
(忍者……! あの蛇男みたいに殺されちゃう……!)
鵺にとって、忍者とは恐ろしい者だった。
隠れて、細々と暮らしていた自分達を暴いて惨殺した……あの蛇男と同類という認識だ。
もし木ノ葉の忍びは温厚で、事情を話せば受け入れられるかもしれないと知っていたならば鵺は迷わず姿を現しただろう。
そうでなくとも、ただ一方的に見つかったならば……鵺は幼い少女だ。保護されるという未来もあっただろう。
だが姿を隠して恐怖に竦み、目の前の忍者たちが去るのを待つしか

ない。それが今の彼女だった。
『鵺、奴らの警戒心がかなり高まっている。危険じゃ』
チャクラだけでなく、そこに含まれた感情も少しは読み取れる鹿尊が心中にて語り掛ける。
それに頷きで返そうとした瞬間、状況が動いた。
「ふむ、足取りだけでも追うか。土遁・足跡浮かべの術」
大柄な男が印を結び、先ほどまで鵺が立っていた場所にチャクラを流す。すると、淡い光が浮かび上がる。
鵺が動いた分だけ……その足跡が。
「これは……そこね！」
くノ一がクナイを投げる。それは姿を隠していた幻来の生身に刺さる。
「幻来ちゃん！」
鵺は叫ぶ。幻来は術こそ強力だが、明確な弱点があった。それは見た目は消えても肉体は残ることと、殻は硬くともその中身は弱いということ。
少なくないダメージを負った幻来の口寄せが解かれる。二人の忍者の前に、鵺は無防備にも姿を現した。
「子供?!」
『茶鬼丸！』
鵺の姿を見てくノ一が驚いている隙に、鹿尊が強く呼びかける。すると茶鬼丸はすぐさま動き出し、男の方へその太い腕を素早く振り下ろした。
その余りの事態に中忍だった男が反応出来るわけもなく、茶鬼丸の術により相当な膂力を孕んだ一撃が直撃する。
「ドビダ！」
「ぐ……大丈夫だ……」
吹っ飛び、木に叩きつけられたドビダは目を白黒させつつも起き上がる。不意打ちを喰らったが、想定以上のダメージは与えられていないと茶鬼丸は判断した。

『鹿尊！　鵺を逃がせ！　最悪片方だけでも食い止める！』
『了解じゃ！』
鹿尊は角を器用に使い、敵意に当てられ震えている鵺を背中に乗せ直す。
「待て！」
そしてそのまま、制止の声を振り切って走り出した。
それと同時に、茶鬼丸の重撃が炸裂した音が響く。ドビダと茶鬼丸の力比べが始まった。
「ぐぅ！　コイツかなりの膂力だ……！　ヒノメ！　お前はあの少女を追え！」
「分かった！　行くぞモモ！」
「ワンッ」
犬を連れたくノ一……犬塚ヒノメが、鵺を追うべく駆ける。
匂いの追跡はまだまだ、容易な距離だった。

痛み堪えて

鹿尊の背に乗り、うねる様にして森を駆ける。
鵺の家族の中では鹿尊は最上位の脚力を持つが、現役の忍者相手には分が悪い。
現に、ヒノメと鵺の距離は徐々に縮まり始めていた。
「待ちなさい！」
しかし鵺たちは止まらない。
落ち着きを取り戻してきた彼女は、さりとて依然として強い恐怖を感じていた。
時に彼女の不幸は二つある。
それは犬塚ヒノメの人相が獣染みていて恐ろしかったこと、そして目の前で幻来を消されたことだ。
彼女は既に彼らを、完全に敵と見なしていたのだ。ここから保護されたとしても彼女の恐怖は一生消えないし、暴れて逃げ出すだろう。
『不味いのぉ……鵺、かなり距離が縮まってきている』
鹿尊の角がひっきりなしに光る。彼は後ろを見ずとも、どれ程ヒノメが迫ってきているか感知により把握していた。
このままでは追いつかれる……彼らがそう判断を下すのは早かった。
『鵺……合図をしたら儂を消して、ハクリンとドリュウに切り替えるのじゃ』
「うん……分かったよ鹿尊……」
誰に代わるかを指定すれば、鵺ならばその意図が分かる。鹿尊のクリクリとした眼球と目を合わせ、鵺は力強く頷いた。
しかし彼らが想定していたよりも早く、ヒノメが動いた。
『行くぞ鵺！』
「モモ！　通牙！」
「きゃあ！」
『鵺！』
通牙……犬塚家に伝わる秘伝忍術の一つ。彼らのパートナーであ

る忍犬が、チャクラで身体能力を超向上させ、回転を加えた突進を放つ技である。
効果は単純だが威力が高く、一流の犬塚家忍犬が放つ通牙は掠っただけでも身が引き裂かれると言う。
そしてヒノメのパートナーであるモモは、紛れもなく一流の忍犬であった。
回転エネルギーにより一回りも二回りも接触範囲が増えた通牙は、鹿尊を掠めて鵺を地面に叩き落とした。
直撃させなかったのは、偏に彼らの優しさか。幼い少女の保護……あるいは捕縛を優先したために、怪我は最小限に抑えて動きを止めようとしたのだ。
しかし、それにしては噛み合いが悪過ぎたと言える。
本来ならば当てずに衝撃波だけで止めようとしたのだが、鹿尊が急な動きを見せたために目算がズレたのだ。
結果として合図と供に……そして鵺が口寄せに移行する前に通牙は炸裂した。
「カッハ……ろく……そ」
人生で感じたことのない痛みが鵺を襲う。出血こそほぼないが打ち身が酷く、呼吸も満足に行えなかった。
「ちょっと、大丈……」
流石は木ノ葉の忍者。想定以上のダメージを負った少女を心配し、ヒノメが駆け寄ろうとする。
しかし……
「くちよ……せ……」
流れた血を使って、地面に倒れながらも術を使う。既に鹿尊は通牙のダメージにより消えていた。気付けば茶鬼丸の声も無い。
独りだ、独りは怖い。逃げなければ。どこか遠くへ。
朦朧とする意識の中で、ただ恐怖に突き動かされて家族を呼び出した。
どれだけ意識レベルが不安定でも、チャクラをろくに練られなくとも……必要なモノさえあれば彼女の血と才能が己が半身の術を成功

させるのだ。
『ハクリン！　近づけさせるな！』
『分かった！』
術者(鵺)が指示を出せなくとも、彼らは自己判断で動き術を使う。
白い鳥のハクリンは特殊な影分身により爆発的に増殖し、ヒノメの前に白い壁を叩きつける。狙っての事ではないが、これには鼻を誤魔化す効果もあった。
その隙を突いて、ドリュウが鵺を抱えて地中に逃げ込む。あっという間だった。ヒノメから見れば、一瞬にして消えたかのように。
結果としてドビダが彼女の元に合流するまで、ハクリンの処理に手間取らせられることになる。

『大丈夫か、鵺』
「いたい……」
地中を経由し、かなり移動した先の洞窟。そこに彼らは逃げ込んでいた。
そしてドリュウは心配の声を掛けつつも心中にて、焦りの感情を自覚していた。
鵺の負傷、そして人里への危機感。
(知らなかった……火の国があの様な危険な国だったとは……)
ドリュウは歯噛みする。もう少し戦える力があれば、自分も強者に立ち向かえると言うのに。
あるいは……
『鵺、海月(ウミツキ)は出せるか？』
「無理……チャクラが足りない……。せめて一回寝ないと……」
彼らの中で唯一医療忍術が使えるクラゲの海月、そして堅牢な殻と鋏……そして汎用性の高い水遁を扱える巨大蟹のクリスタは口寄せの際の消費チャクラが多い。
それこそ、おいそれと呼び出せない程度には。
今の鵺に、そして遭遇時の鵺にそのレベルのチャクラを捻出する余裕は無かった。ただでさえ慣れぬ逃亡の旅で消耗しており、その上手

酷い怪我までしたのだ。万全な状態に戻るには時間がかかる。
『鵺……確かに前途多難だが、我々が付いている』
「うん……ありがと、ドリュウさん……」
慰めることしかできない。だがせめてこの、それなりに大きな身体で温めてやる。
鵺はドリュウに包まれると、幾ばくか和らいだ表情を浮かべた。
「おやすみドリュウさん、また夢の中でね」
『あぁ……』
そうして彼らは眠る。
火に追われ、土に塗れながら。

夢現獣の術

揺蕩う様な、脳が浮くような感覚の中鵺は目を開ける。
そこは彼女の夢の中。今となっては唯一の、心の底から安心できる家だった。
ゆるりと周囲に視線を沿わせると、彼女を囲む様に彼らはいた。
茶の毛皮に包まれた大熊の茶鬼丸。
鵺の上腕ほどの体長を持つ白い鳥のハクリン。
それぞれ二又に枝分かれした、二対の立派な角を持つ牡鹿の鹿尊。
両手いっぱいで抱き締めれば持ち上げられる大きさの蛤である幻来。
現実世界では現在、鵺の寝床となっている逞しい体躯のモグラであるドリュウ。
ドリュウ以外の彼らは、あの二人の忍者との戦いにより倒されているので回復のため寝ていた。
そこにもう二体、しばらく口寄せはされていない家族がいる。
人の頭部二つ分ほどの大きさの傘と無数の触腕を持つクラゲの海月。
限界まで両腕を伸ばせば十メートルにも及ぶ、巨大な蟹のクリスタ。
彼女らはそれぞれ強力な術や強靭な肉体を持つが、口寄せの際に鵺にとっては多大なチャクラを消費してしまう為中々呼ばれない。
故に彼女たち二体は、力になれないことに対し非常に口惜しい思いをしていたのだ。
『鵺、怪我の調子は？』
周囲を取り囲む七体の家族の内、海月が尋ねる。その身の様に柔らかく、安心感を想起させる声だ。鵺は海月の方に身体を向け、そっと触腕に腕を絡ませて抱き締めながら答え始める。
「身体は痛くて青タンいっぱいだけど、血はそんなに出てないよ」
『そう……でも起きたら私を呼んでね。骨折してるかもしれないし……』

「うん、分かった。起きたらお願いね、海月」
ぶにぶにと、海生生物特有の柔らかさを感じつつ彼女らは身を離した。この夢の中で行う、もう一つの大事な用があったからだ。
ふーっと細く息を吐き、鵺は印を結び始める。それは彼女の人生の中で、七度だけ結んだことのあるものだった。
「口寄せ創造・夢現獣の術」
鵺が思い描く、新たな家族。それは黒い毛皮を持つ狼だった。
彼女が求めたのは、決して多くないチャクラ量で最大限の戦闘力を有する口寄せ獣。そしてその発想は奇しくも、彼女に手痛いダメージを与えたモノから得られていた。
クゥンと、夢の中に新たに創り出された雄の狼の幼体が鳴いた。ここから彼は夢の中で彼女に育てられ、立派な口寄せ獣となるのだ。
その期間は育てる口寄せ獣の最終的な大きさにもよるが、彼女の想定ならば狼の成熟まで一か月と言ったところだった。
『術はもう決まっているの？』
同じ戦闘役の口寄せ獣として気になるのだろう。そう訊ねたクリスタに、鵺は胸に抱いて撫でている狼の名前を考えながらもしっかりと肯定した。
「うん、あの忍犬が使ってた……確か通牙っていう術。詳しいことは鹿尊が起きなきゃ分からないけど、忍犬が使う術だから印とかはないはず」
『そう、なら良いわ』
鵺が口寄せ獣に術を与える際、必要なのは詳しい術の仕組みと印だ。そしてその仕組みは逐一考察し把握しないと、術の威力は十全に確保されないのだ。
彼女は小さな頃から、両親に忍術というものの仕組みやその考察の仕方は教えてもらっているが、やはり九つの少女では満足な成果を得られないだろう。
そこでそれを補うのが、高いチャクラへの感応性と観察眼……そして感知の術を持つ鹿尊だ。かの牡鹿はそういう用途の為に、数代前の寄木一族が考案したタイプである口寄せ獣なのだ。

「んー……この子の名前は何が良いかなぁ」
狼を高く持ち上げ、目と目を合わせる。まだまだ未成熟な狼だが、本能的に鵺が親であり家族であると分かっているの暴れることはない。むしろ楽しそうに身を捩っている。
鵺は考える。黒い毛皮、夜の闇の様な漆黒の瞳、そして額に浮かぶようにある三日月型の模様。徐々に彼女の中に何かが浮かんでくるようだった。
「黒……夜……月……そうだね。この子の名前は夜月（よづき）にしよう」
少々安直だが、それでいい。名に込めた願いと役割は、分かりやすい方がいいのだ。
鵺はよろしくね、夜月と言いながらそっと抱き締める。願わくば、この子が私たちの夜を照らす月になってくれますようにと。
『歓迎する。よろしくな、夜月』
『ええ、立派に育つのよ』
『私と同じ月の名前を持つのね。どうか、鵺の力になってあげてね』
ドリュウを始めとし、起きている他二体の口寄せ獣からも歓迎の言葉が投げかけられる。夜月はまだよく分かっていないのか首を傾げたが、鵺の匂いを一つ嗅ぎ、元気にワウッと吠えた。
ただ無邪気に一声上げただけかもしれないが、それはまるで任せろと言っているようで微笑ましかった。
未だ彼らの未来は暗中模索のように不安だらけだが、新たな家族と共に頑張っていこうと鵺は決意を新たにする。
『鵺、もうすぐ夜明けだ』
ドリュウが優しく語り掛ける。それと同時に、鵺とドリュウの身体の輪郭がぼやけ始めた。
それは現実への帰還……目覚めの合図だった。
「夜月、また今夜ね」
これから一か月ほど。鵺は旅をしつつ、夜は夢の中で夜月を育てる日々が始まる。
怪我もしたし住む場所も無いけれど、それは確かに彼女の心の支えとなるだろうとドリュウは思った。

鵺はそれだけ言うと、完全に姿が消えた。
また一日が、始まる。

火に背を向けて

火の国へ行くのは諦めた鵺は、無意識にか逃げる様に来た道とは反対方向へ向かっていた。

一度ドリュウの土中遊泳にて逃走してしまったので、正確な現在地は分かっていない。ただ太陽を基準にして歩いているだけだった。

途中何度か小さな街を数か所通ったが、街中で口寄せ獣を出した状態にするのは非常に目立つと気付いた。しかし鵺単体で動くのは、それはそれで不安を感じたのでそれからは街に寄るのは最小限にすることになった。

当初は安寧を求めて人里を探していたはずが、気付けば家族の誰かが傍にいない状態というのが非常に怖くなってしまったのである。

それは偏に鵺本人が口寄せしか自衛手段が無いが故の、安定と恐怖のジレンマだったのだ。

九歳と言えば、五大忍び里ならば大凡アカデミー生……簡単な忍術とチャクラによる身体強化を覚えている歳である。しかし忍びとしての教育を殆ど受けていない鵺は、チャクラコントロールの術はもちろん体術すら会得していない。

本当に出来ることが口寄せの術と夢現獣の術しかないのだ。しかもそれらの行使も血と才能によって支えられており、上忍クラスから見ればお粗末なものだった。

現状において彼女の持つ長所は、口寄せ獣のレパートリーと持続時間程度だろう。

それに加え、何と彼女には基本性質変化の才能が全く無い。火・水・土・雷・風……さらに幻術等の隠遁、他の時空空間忍術とどの術も使えないのだ。今は、ではなくこれからも。彼女が出来るのは今までもこれからも、チャクラコントロールに類する技術と口寄せ系統の術のみ。

それが寄木一族という口寄せに全てを委ねた結果戦乱に消え、戦いを忘れた一族の末裔だった。

だが、その上で鵺は自己強化の方法を模索していた。

それはあの蛇男を打倒し、己の恐怖を克服するために。そして力があれば安寧を脅かされないと信じて。
(そもそも父さんや母さん……ううん、鵺が強かったらあの蛇男を倒せたの。全部めちゃくちゃにならなかったの……!)
彼女の世界はまさしく、あの家だけだった。その世界が壊された今、自分は一体どこへ行けばいいのか。
迷子だ。なまじ中途半端な力があったが故に、彼女は彷徨い歩くことを選んでしまった。フラフラと、足取りもおぼつかぬゴールの見えない旅へ。
既にヒノメに襲われ負傷した日から、一か月は経っていた。その間彼女は一所に留まることはあまりせず、当てもなく火の国から土の国へかけて歩んでいた。目的も目標も不明瞭だが、人と関わることを避けた結果だった。
街に寄るのだって、食料が尽きた時くらいだろう。なお、お金など持っていないので店の物を盗んだりして食い繋いだ。
両親が生きていた頃は、時たま一緒に街へ出ていたので人の営みの常識は知っている。だがそうしないと生きられないのだから、仕方なかった。あるいは、まだ幼いが故の罪悪感の低さの結果か。
盗みに協力した幻来も、状況が状況と思い特に口出しはしなかった。実のところ、彼ら口寄せ獣は鵺さえ生きていれば他者などどうでも良いと無意識下で思っているのだ。
『草木が減り始めたな』
二日ほど前に物資補給のために寄った街を出てからしばらく、野道を歩いていると共をしていた茶鬼丸が呟いた。彼はベースが熊という森の生き物が故に、そう言った自然の変化に目聡い。
「狩りも、難しくなりそう?」
『その可能性はあるな。全体的に石や岩が増えてきた。このままそればかりになったら、野生動物は見つけ辛くなる。その上、水にも気を遣わなくちゃいけなさそうだ』
茶鬼丸の大らかで親しみやすい声が鵺の中に響く。彼の声は老獪な鹿尊のモノとも威厳のあるドリュウのモノとも違い、彼らには無い

特有の温かさがあった。
　そんな彼の言葉を鵺は素直に受け入れ、今まで以上に水分には気を付けようとしっかり頭に刻んだ。
『最悪の場合、ハクリンに上空から食べ物や水は見つけてもらえるが……危険を考えるとあまりやりたくはないな』
「そう、だねぇ……」
　鵺と茶鬼丸は数週間前の苦い思い出を頭に浮かべ、少し顔を顰めさせた。
　何があったかと言うと、野宿の際にて食料を探そうと思った彼らはハクリンに協力してもらった。その手段は単純で、数十匹に増えたハクリンによるローラー作戦のようなものだった。
　彼は賢く……また少女の上腕ほどの図体を持つので、発見した木の実や小動物をすぐに持って来てくれた。そして、彼が連れて来てしまったのは食料だけではなかった。
　見つけたぞ！　――――――――。
　何とあの犬を連れたくノ一……と同じ額当てをした忍者がやって来たのだ。当然のことながらその森にハクリンと同じ姿をした鳥はおらず、その上あの一回の撤退戦にてハクリンと鵺の容貌を記録されていたのだろう。
　ハクリンはまんまと尾行されたのだ。
　尾行していた者は一人であり、尚且つ中忍クラスだったため結局捕まりはしなかったが、それ以来ハクリンによる範囲探索を行うのはそれなりにリスクがあると学んだのだ。
『まぁ、何はともあれ今日過ごす拠点を探さなければ……ん？』
「どうしたの？　茶鬼丸？」
　言葉を半端なところで切った茶鬼丸を不思議に思い、彼の向く方向を見てみる。道なき道の切れ目にあるそこには、古ぼけた仏堂があった。
　どうやら自分たちが歩いていた林は、整備外の横道だったらしい。
「結構ボロボロだね、誰もいないのかな」
『匂いはしないがなぁ……鹿尊にも見てもらうか』

「そうだね、口寄せの術！」
もし誰もいないなら、今夜の寝床どころかしばらく拠点に出来そうだと考える。何だかんだで、九歳の彼女には野宿は厳しいのだ。
『ふむ……感知範囲にはいないのぉ』
呼び出された鹿尊は早速自分の役割を果たす。淡く光った彼の角には、反応するモノはなかった。
どうやら既に放棄された仏堂だったようだ。
「やったね。今日はここで寝よう！」
中に入ると、外見とは違いあまり汚れていなかった。捨てられて日が浅いのかどうかは分からないが、寝床は綺麗な方が望ましいので深くは考えなかった。
そんな久しぶりの朗報に、彼女は心を浮つかせた。ここ最近は逃れて流れて隠れてと心休まる場所など夢の中しかなかったが、ようやく腰を落ち付かせられそうだった。
「ふわ……ぁ……」
安心感からか、一つ欠伸が零れる。
中にあった直立不動の仏像が幾つかあって少々不気味だが、本当に怖いのは厳つい顔の仏像ではなく人間……あるいは忍者だと認識している鵺にとってはどうでもよいものだった。
「ちょっと早いけど、寝ちゃうか……」
数日野宿が続いたため、それなりに疲労が溜まっていた。日が沈み切っていない赤い空を一つ眺めてから、茶鬼丸に寝床になってもらう。寝ている時は一体しか維持できないので、鹿尊は一足先に夢へ帰っていた。
『おやすみ、鵺。俺はもうしばし起きているぞ』
「うん、ありがと。おやすみ茶鬼丸」
そう言って茶鬼丸の温かい身体に沈み込む鵺。彼からすれば彼女の身体など、あまりにも……いっそ心配になるほど軽かった。
そしてそんな彼女の寝息が聞こえ始めたのは、その数秒後だった。

芸術家との出会い

それは鵺にとってある種の天恵であり、道行く先を一変させた大きな出会いであった。

仏堂を寝床にした翌日、彼は現れた。そしてそんな、彼女の前に立つ長い金髪で左目を隠した少年が口を開く。

「誰だオメーは、うん？　ここはオイラの拠点だぜ？　うん」

少年は少し特徴的な語尾で話しつつ、鵺を探るような目で見ている。その自信ありげな雰囲気と、自分が強者だと信じて疑わない姿勢に圧倒される。鵺は蛇男とはまた違う威圧感により、動けなかった。

それは茶鬼丸も同様で、獣としての勘が彼の持つ強さに怯えていた。一応相手方が何か動きを見せるのであれば、すぐに鵺を庇える姿勢は取ってはいる。だが、その反面少年からは威圧感しか……言うなれば殺気の様なものは感じられないため、過度な危機感は覚えていなかった。

「私は……鵺。寝る場所を探してて、ここを見つけたから寝てたの……」

「ふ～ん？」

言葉を真偽を確かめる様に、少年はじっと鵺の眼を観察した。彼から見るに、少女のその眼は大半が怯えに染まっており、ともすれば数秒後には泣いてしまいそうな色だった。

（岩隠れからの追い忍って訳じゃなさそうだな……うん。そもそもどっかの忍者でもなさそうだな……そばにいるのは口寄せか忍獣だろうけど）

少年はそんな鵺のちぐはぐさに、どうにも対応を決めかねていた。

確かに鵺やそばにいる熊からはチャクラを感じるが、肝心の彼女の立ち振る舞いや身のこなしに鍛えられたモノは見られなかった。

忍者っぽいが忍者ではなさそうな、妙なガキ……それが彼の鵺に対する印象だった。

追い出すことは簡単だ。

だがどうにも、そうする気になれない。里から禁術を盗み、爆破テ

ロで生計を立てているという極悪犯罪者である彼だが、十にも満たなそうな女児に非道になろうとは思わなかったのだ。
年齢こそ違えど、故郷に妹分を置いてきた身だ。
妹分と同じ髪の色をした鵺を見て、そっと里に居た頃はちょこちょこと自分に付いてきていた少女を思い出す。
（ひとまず、話くらい聞くか。うん）
仮に何かしら反攻してきたとしても、対処可能だろう。そう判断した彼は鵺に、座るように言った。
怯えや警戒心を隠そうともしない彼女だったが、大人しく従い座った。そばにいる熊も彼女の背もたれになる様に屈む。
「まぁ何か訳ありそうだな。オイラもしばらく仕事はねーし、とりあえず何があったか話してみろよ」
「う、うん……あ、えーっと、お兄ちゃんの名前は……？」
少し親しみやすい声色で話しかけた途端、鵺の怯えや警戒心が半分ほど揺らいで消えた。そんな彼女のチョロさ……というか世間知らずそうな様子に、彼は一抹の不安を感じる。
そして彼は一つ溜息を吐き、答えた。
「オイラはデイダラ。粘土造形師のデイダラだ！」
里を出奔して以来使っている名乗りを上げる。そう名乗るのは忍者である前に、自分は芸術家なのだと強く信じているからだ。そしてそれは、自分の芸術を『粘土遊び』などと宣った土影に対する反抗心でもあったのだ。
「粘土造形師……忍者じゃない……？」
鵺はポツリと独り言を漏らした。そして、彼女の警戒心は崩壊する。即ち――――。
（デイダラお兄ちゃんは忍者（怖い人）じゃない……！）
鵺は正しく、世間知らずであった。だがそれは仕方ないことでもある。
何せ彼女の人付き合い、あるいは信頼関係というのは、『家族』という括りしか知らないのだから。
故に警戒を解いた相手を無意識に、家族という枠組みに入れてしま

うのは仕方ないのだ。
デイダラを『兄』としても……仕方ないのだ。
「あのね……」
そうして彼女は話し始める。デイダラが少し驚く位、先程までしどろもどろだった口調が饒舌になって。

◇

「そうか……」
鵺は話した。この一か月間の旅路を。
両親を失い、残った家族と共に火の国から歩いてきたこと、いずれ打倒せねばならぬ敵のことを。
そしてその中には彼女の口寄せの術――――夢現獣の術のことを話すのは茶鬼丸に止められたが――――についても含まれていた。
現状の鵺は孤児と言えるだろう。
そしてそれは、忍界において然程珍しいものでもない。むしろ今でこそ大戦の傷が癒えてきているが、少し前まではそれこそ孤児など掃いて捨てるほどいたのだ。
だが、ありふれているからと言って不幸だと言うことに違いはない。
デイダラの見立てでは、このまま行くと彼女は近い内にどこかの忍びに捕まる。
確かに鵺の口寄せ獣は、話を聞く限り隠れることや逃げることは得意な様だ。だが、それが通用するのは精々中忍クラスまで。
このまま盗みや国への不法侵入を続けていれば、あるいは中忍を退け続ければ、いずれ上忍が出張って来る。そしてあっと言う間に捕まるだろう。
人相書きも低位犯罪者として回り始めている可能性もある。
デイダラは瞑目する。自分はそれなりに経験を積んだ忍者でもある。故に先ほど想定した彼女の末路は、そう的外れでもない。むしろ高い可能性でそうなるだろう。

チラリと片目を開けて鵺を窺う。警戒心などすでに消し飛んでいたが、今度は不安が滲んでいた。
彼女は素直過ぎるくらいにはデイダラを信用してしまっているが、だからと言ってこのまま見捨てられないとは考えていない。
そんな目に、デイダラは溜息を吐かざるを得なかった。
自分は思った以上に厄介な拾い物をしてしまった、と。

それが欲しい

鵺がデイダラと出会ってから、三か月ほど時間が経っていた。そしてその間の生活は、今まで隠れ逃げていた彼女からすれば、随分と久しぶりに感じる落ち着きがあった。

時折デイダラは仕事に出るが、帰ってくれば食料なども分け与えられるという雛さながらの生活だ。

「よし鵺、今日もやるぞ。うん」

「うん！」

そしてもう一つ、彼女にとって大きな恩恵があった。それはデイダラに体術やチャクラコントロールの修行をつけてもらったことだ。

何だかんだ言ってデイダラは優秀な忍者である。元岩隠れの忍びだと明かした後も鵺はデイダラに懐いていたので、彼女の目的達成と自衛のために教え始めたのだ。

正直なことを言えば、デイダラから見た鵺は忍者としての才能が乏しい。

もちろん口寄せの術に関する才能には目を見張るどころじゃないものがあるが、その他の体術や忍術……何なら素のチャクラコントロールはまだまだ覚束ない。

九歳だからと言えばそれまでではあるが、それでも自分や妹分はその頃にはもう少し出来ていたなとデイダラは思っていた。

特に忍術はてんでダメだった。

基本の分身の術や変わり身の術、変化の術すらまともに使えない。ギリギリ形になったのは、チャクラコントロールを使った基本の術。ちょっとした身体強化の術くらいだ。

この分では他の忍術を修めるのも、ましてや性質変化の術など以ての外だろう。

一方で体術はそれなりに出来ることが分かった。生まれてこの方山暮らしだったのが影響しているのか、小柄ではあるが体力や筋力は付いていたのだ。

身体裁きも教えれば、メキメキとは行かぬものの忍術なんかよりも

よっぽど成長している様に見える。
まぁそれでもデイダラに言わせれば、必要最低限よりちょっと上くらいなのだが。
（コイツが強くなるには……やっぱり口寄せの契約を今以上に増やすしかないな、うん）
これから成長度にもよるだろうが、おそらく鵺のチャクラ量はそこまで多くはならないだろう。そうデイダラは見ていた。故に一騎当千の大型獣は望めない。手札を増やして工夫するしかないのだ。
しかし口寄せの新規契約というのは、術の難易度とは関係ない難しさがある。武器などの無機物ならば別として、生物型との契約はまず出会わないと始まらない。そしてその後に何らかの方法で従ってもらわなければならないのだ。
そこらにいる小動物と一方的に契約し、囮や肉壁として使う者は多いが……主戦力として使用する者が少ないのはその辺の事情が深く絡んでいる。
（どうしたもんかな、うん）
一筋縄ではいかない。彼女の行く先も、自分で身を守らせることも。
それがこの三か月で彼が感じていた苦悩でもあった。
そしてそれは、デイダラが出会った当初よりも鵺に対し情を覚えているからでもあったのだ。
それを初めて見せたのは、ちょっとした気まぐれからだった。
彼が里から盗み、新たに手に入れた術。それを使って完成した一大作品――――――。
名を『？2ドラゴン』
彼の渾身の造形力を込め、儚く美しい芸術を大量に仕込んだ傑作だ。
その洗練されたポップアートと戦闘力を併せ持った、今の彼のお気に入り作品だった。
それが形になった高揚感で鵺に見せたところ、彼女はかなり気に入ったのだ。案外彼女はポップアートに対する適性があったようで、

それ以来デイダラの作品をよく見たがるようになった。
自分の高く掲げる芸術性を無邪気に評価され、彼は満更でも無かった。確かに九歳の彼女には詳しい芸術の何たるかなど、そこに込められた意味や造形の深さなど分かろうはずも無い。しかし、だからこそ本能で粘土作品を気に入った鵺の眼をデイダラは見込みありとしたのだ。
そう、自分の作品を褒められて嬉しくないものなどいないのだ。

とデイダラが思考している間に鵺もまた、とあることを考えていた。
体術の修行のためにデイダラと組手を行っている最中であるが、その彼女の意識は少し別のところにあったのだ。
『鵺、ようやくだ』
組手を見守る鹿尊からの知らせ。それは一つ、彼にお願いしていたことが完了した合図だった。
『結論から言えば、推測通り……いや、推測以上かもしれんのう』
(じゃあ……?)
心の中で会話する。こんなことが出来るのはデイダラにも言っていない。彼らだけの秘密だった。
そして、今秘密裏に行っていることも。
これを行い始めたのは、まさしく初めて彼の作品を見た時からだった。
鵺は彼の作品……いや確かにそのポップな造形には心奪われたが、それ以上に作品に込められたあるものに強く惹かれた。
物質に練り込まれたチャクラ。
最初は起爆札などの、チャクラを流すことで起動する仕組みか何かだと思った。しかしそれは鹿尊の観察により、本質的に違うと分かった。術が仕込まれていると言う次元ではない。チャクラそのものと同一化しているのだと。
そこに鵺は、とんでもない天恵を得ることになる。
そして数週間に渡る鹿尊の調査により、実際にそれが高い確率で可

能だろうと結論づけられた。
それ即ち――――――。
自らの血にチャクラを練り込むこと。
術を手に入れ、それを与える口寄せ獣を創り――――――血の吸出しとそのタンクにすることを考えれば『大型の蚊』が望ましいだろう――――――鵺が本来抱えきれないレベルのチャクラを溜め込んだ血を作れたとしたら。
そしてそれが口寄せの代価として機能するならば。
理論上、限界は無くなる。
屋敷を容易く叩き潰せる巨獣でも、国と国の境をひとっ飛び出来る体躯の鳥でも……あるいは凶悪な術をこさえた獣を呼びだすことも。
夢が広がる。
ずっとネックだったチャクラ量の問題が解決するのだ。
準備こそ必要だが、用意さえしてしまえば……彼女の術が持つ本来の凶悪さが花開くだろう。
それこそ……あの蛇男を殺し、二度と家族が失われないそんな未来が――――――。
（欲しい……）
――――――それが欲しいよ、デイダラお兄ちゃん。
そんな誰も知覚せぬどす黒さが……無自覚に自分を蝕むのを、鵺は知らない。
彼女の瞳は……昏く深く、底知らぬ黒を孕んでいた。

新たな知見

デイダラの術を手に入れると決意した鵺。しかし素直に聞いたとて、その情報を彼が開示するとも思わなかった。

故に彼女は鹿尊の助言により、彼の経緯からその術の出元を探ろうとしたのだ。

秘伝忍術という概念は知っていたので、その可能性も考えていたが問題はない。術の仕組みと発動方法さえ知ってしまえば、鵺が術を使えなくとも関係ないのだ。

日が沈んで眠りに入る前、今日は外での仕事が無かったデイダラと互いに暖をとる様に寄り添って寝そべる。そこで鵺は、彼に寝物語を強請った。主に、過去の話を。

自分も話したのだからデイダラお兄ちゃんのも聞きたいと言うと、案外彼は渋らずに話し始めた。あるいは、誰かに聞いてもらいたかったのかもしれない。

そして彼は語る。

両親が先の大戦で殉職したこと。六歳の頃にはずっと家に一人で、手慰みに始めた粘土細工に嵌った事。

里のアカデミーに入ったこと。卒業間近に土影の孫娘と出会い、忙しい祖父や父に代わりに兄貴分になってやったこと。

そして……尊敬していた土影に自らの造形作品を『粘土遊び』と吐き捨てられたこと。爆破部隊に入り、『爆発』に魅了されたこと。そこに芸術性を見出したこと。

そこから先の話をする直前、彼は一瞬口を噤んだ。言おうか言わまいか、悩む様に己の掌を眺める。だがそれもすぐに止め、もう一度口を開いた。

本来、己の切り札の情報をバラすなど忍者として有り得ない。しかし彼は忍者である前に芸術家だ。

己の芸術の根底にあるものを、鵺に知ってもらいたかったのかもしれない。

里を飛び出して以来、まともな人付き合いが出来なかった彼の、

ちょっとした安寧が彼女だったから。
「オイラは里から古い禁術を盗んだ。それでオイラの芸術はやっと、一流の作品になったんだ……うん」
「その術って……？」
「……正式名称は無い。オイラも詳しい術の仕組みは分からねぇ、でもその正体は知ってる」
ついに鵺の本命の情報が出た。それも予想以上の量と質だ。
幼い彼女は比較的に早く眠たくなってしまう気はあるが、今回ばかりはそんな眠気など早々に吹き飛ぶ。
今日の鵺の枕兼、夜の警備役になっている鹿尊も注意深く聞いている。
デイダラはそっと掌を鵺に向けた。そこにあるのは、通常の人体には無い手の口。彼は鵺にこれを見せたことは無いが、術の説明をするのには欠かせないのだ。
「この口は口寄せの術の一種だ。随分と古くて特殊な口寄せだがよ、うん」
相互契約・寄生口寄せの術。
その名の通り、契約を交わした口寄せ獣を身体に寄生させる術。
とうの昔に失われた古い口寄せ形式らしく、そしてデイダラが盗んだ禁術はこの特殊な寄生口寄せを媒介にした術であるらしい。
（寄生口寄せ……！　そんなのがあるんだ……！）
チャクラを物質に練り込む術はもちろんだが、それに加え鵺は寄生口寄せの術に興味を示した。
普通の術ならば鵺に扱えないので、口寄せ獣に与えればどう使えるかに思考が寄るがこれは違う。
（私にも使えるかも……！）
具体的にどう活用するかはともかく、手札が増えるならそれに越したことはない。
口寄せ系統の術ならば鵺にも扱える可能性がある為、そんな存在があると知れただけでもかなり嬉しいことだった。
『なるほど、口寄せ契約が必要なのか、ふむ』

逆にそれさえ出来れば術として完成する。実はデイダラが粘土にチャクラを込めている場面をコッソリと目撃出来た鹿尊は、そのチャクラの動きと印を見切っていたのだ。
鵺がその術を欲しがったから、術の考察を主な役割として創り出された自分が頑張った結果である。
そんな、鹿尊が頷いているような姿を幻視する。無論、そんなことをしたらあまりに不自然なため実体の彼は微動だにしていないが。
「ねぇデイダラお兄ちゃん……」
「何だ？」
「それ、私にも契約できるかなぁ……？」
デイダラは思わず閉口する。
出来るか出来ないかで言えば、確かに鵺ならば契約できるだろう。だが、その契約巻物は今岩隠れの里にある。
巻物を廃棄したとしても、相互契約という口寄せ獣側からの契約があるため関係は破棄されない。そのため、既に契約機会が失われていることはないだろう。
それに、あの土影のことだ。そんな無駄なことはせず、いずれ戦力として使う為にも禁術は保管されているだろう。
故に鵺が契約したいのであれば、岩隠れの里へ行き……禁術を保管している土影邸へ行かなくてはならない。デイダラとて、相当な危険を冒して土影邸の禁書庫に忍び込んだのだ。
もう一度同じことをやれと言われて、素直に首を縦に振りたくないほどには緊迫した瞬間だった。
「出来るだろうが……契約しただけじゃ意味ねーぞ、うん」
そう、あくまでこの口の形をした口寄せ獣は禁術の媒介でしかないのだ。
確かに鵺にとって、寄生口寄せの術は新たなる知見になっただろう。何処かには単体で自己完結する寄生口寄せ獣もいるかもしれないだろう。
だがデイダラの持つコレは、禁術とセットでなければただの口である。

口寄せ以外の術を使えない彼女では、契約したところで仕方がない。

「そ……っか。分かったよ」

デイダラがそう諭せば、鵺はしょんぼりしながらも了承した。その後彼女は、話してくれてありがとうと言って、一足先に目を瞑る。寝息は次の瞬間には聞こえて来ていた。

（流石に起こし過ぎたか、うん）

そうしてデイダラも、子供特有の高い体温を感じながら眠った。

こちらをじっと見つめる鹿尊など、気にもせずに。

幸せのために

夜明け前、デイダラが寝入った後に鵺は起き上がった。そして彼に教えてもらった隠遁術により気配を断ち、仏堂から出る。

そこには既に、鹿尊が待機していた。

『彼は？』

「大丈夫、デイダラお兄ちゃんはまだ寝てるよ」

そう言った鵺に満足気に頷く鹿尊。

ここからの行動は慎重を重ねても足らないほど危険なものなのだ。些細なものでも、一先ず状況が予定通りに動くのは喜ばしい。

そう、彼らが目論んでいるのは岩隠れの禁術を盗み出すことだ。

実は鵺とデイダラが拠点にしている仏堂は、既に土の国の領域内にある。さらに彼から教えてもらったが、意外なほど岩隠れの里から離れていないらしい。

一見デイダラに諭されて諦めたかのように見せたが、要は鵺が使わなければ良い話なのだ。寄生口寄せと契約さえしてしまえば、新たな家族に寄生させてから術を与えればいいのだから。

これまで行ったことの無い手順での夢現獣の術だが、恐らく可能だと鵺は感じていた。こと口寄せの術に関しては、彼女の才は飛び抜けているのだ。

本当ならば、地理にも詳しく実力もあるデイダラに手伝ってもらいたかった。

だがあの様子では、恐らく夢現獣の術のことを教えてもデイダラは協力してくれないと鵺は感じた。それどころか、鵺が禁術を狙っていることを知れば彼がどんな行動を起こすか分からなかった。

盗みを止めさせるために監視と拘束を行う位ならば良心的だろう。だが最悪の場合、己の切り札の秘を盗もうとするならば殺すという考えに至る可能性もある。

何だかんだで彼は術の入手方法や正体などを言ったが、詳細は語っていない。チャクラを物質に練り込む術などとは一言も言っていないのである。

彼は芸術家を謳っているが、結局のところ一流の忍者だ。最低限守る線引きはある。そして鵺は彼を信頼しているが、口寄せ獣たちはそうではなかった。だからこそ、秘密裏に動き術を盗み出す計画を立てたのだ。

『では行こうかの。鵺、不確定要素は多分にあるが、手筈通りにな』

手筈と言っても、情報が不足しているのでかなり大雑把なのだが。

だからと言って、彼女がやれることはそう多くないのだから関係ない。情報が増えようが、彼女が年齢を重ねて成長しようが……あの禁術を手に入れなければ何も状況は変わらない。

それはデイダラと過ごした三か月で嫌と言うほど分かった。

鵺には口寄せの術しかない。それを根本的に強化出来なければ頭打ちなど、すぐにでも訪れるだろう。

ならば戦いと言う戦いから全て逃げるか？

力を付けるのを止めて、何処かで静かに暮らすか？

（無理……そんなの絶対無理……！）

鵺はどこまでいっても、恐怖しているのだ。

あの日、彼女の世界が壊された日から。

そして同時に学んだのだ。

力さえあれば幸せに暮らせると。自分を害せる者がいなければ、幸せは壊れないのだと。

そして何よりも――――――

あの蛇男（死の恐怖）を乗り越えなければ、鵺は幸せになれないのだと！

「……口寄せの術」

小瓶から血を三滴ほど垂らし、術を使う。呼び出されたのはドリュウとハクリン、そして幻来だ。

そしてこのメンバーでまずは、地中を掘り進み岩隠れの里への侵入を行う。

その手順を言うと、細かい方向調整や位置確認をハクリンが確認しつつ報告する。そして幻来は彼らが地中から出た際の隙を消すために術の待機をしているのだ。

「ハクリンも幻来もよろしくね。行こう、ドリュウさん」

『了解』
それぞれが了承の意を返し、行動に移る。鵺は幻来を抱えてドリュウに跨った。
『鵺、頑張ろうね』
「うん、頑張ろう」
ハクリンはそう言うと数匹に増え、渡り鳥の様相を呈する。
これまでの失敗を生かし、なるべく不自然でない形をとったのだ。
ドリュウも彼に続き、術を開始する。
彼の土中遊泳の術は有能で、鵺を背負った状態でも十分なスペースを確保して掘り進められるのだ。
地中に潜ると周囲に月光が届かなくなり、鵺には視界が一切利かなくなる。だが彼女に不安はない。最も信頼できる家族たちがそばに居るのだから。
（ハクリンを感じる……）
彼女の口寄せ達は皆、夢現獣の術で創り出された存在だ。言うなれば彼女の内から生み出されたものであり、現実世界に呼び出し距離が離れようとも心で繋がっている。
そのため、鵺が地表を跨いで上空にいるハクリンの気配を感知出来るのと同時に、彼からも鵺を感知出来るのだ。
だからこそハクリンが彼らの舵取りを行えているのだ。
「少し斜め右にずれてるってさ」
『了解』
彼らは闇の中を進む。それが命を賭けるものだとしても。
恐怖を乗り越えるためならば……幸せになるためならば何でも出来る。
例えそれが大罪を犯すことだとしても。
それが鵺と言う少女であり……恐怖に歪んでしまった哀れな孤児なのだった。

罪も厭わない

誰もが寝静まった岩隠れの里。空に三日月はあれど、薄く雲が覆っているため光源は限りなく少ない。街灯もあるにはあるが、主にそれは人通りの多い大道がほとんどであり裏路地にはあまりない。

そんな中、鵺はコッソリと地中から這い上がっていた。ハクリンが上空から人も家もない場所に誘導してくれたが、幻来も万が一に備え蜃気楼の術を展開している。

そしてすかさずドリュウを消し、代わりに鹿尊を呼び出す。これは感知系の術を警戒してのことだ。

『ふむ、火の国の時とは違い感知の術になにも引っかからないのう』

角に反応はない。彼の術は詳細に感知するには適さないが、感知出来る範囲とモノの種類は多い。故にこちら側に対しての感知にも反応出来るのだ。

それがないとなれば、術を介した感知は無いと言える。もちろん耳や鼻、目を使った感覚または物理的なモノは検出出来ないので、警戒は怠れないが。

（ハクリン、見つけた？）

『うん、土影邸は一番大きかったからね。でもやっぱり見通しが良い上に、見張りが多いよ』

幻来の術の中で会話する鵺。彼女はハクリンからの報告を聞き、少し顔を顰めた。

鹿尊が事前に行った想定内ではあるが、苦しい状況と言うのには違いない。だがしかし出直すこともない。

禁術を得なければ彼らに未来は無いのだ。それにきっと、日を改めても状況は変わらないのだから。

（行こう、皆）

気合を入れ直し、歩を進める。幻来の術は本来その場に留まるのが主であり、移動時に使えばその効果は著しく低下する。だがやらないよりマシではある。ある程度近くで見れば違和感に気付く者がほとんどだが、遠目ならまだ誤魔化せるのだ。

ここからの動きも決めている。
警備に穴が無いのは想定内なので、どうにかして穴を開けねばならない。
故に比較的警備が薄い所を狙って、その任に就いている忍者を無力化するのだ。
家の屋根を伝って、土影邸に近づく。深夜とは言えもう二時間ほどで夜明けが来るだろう。だからこそ、気の緩む奴がいる。
デイダラが言うには、里に直接襲撃があったなど戦時中を除いても十年単位で無いのだ。無意識にも警戒が緩むのは仕方のないことだ。
『土影邸の裏側、そこが一番警備が薄いっぽいね。一人しかいないや』
(分かった。ここからは茶鬼丸の出番だね)
闇に紛れて土影邸の裏側へ。かつての鵺にはこの様な俊敏な動きや屋根伝いに移動するなど不可能だったが、デイダラ直伝のチャクラによる肉体活性のおかげでそれを可能としていた。
(ふー……よし、やるよ。……うん)
鹿尊から茶鬼丸へ変更する。口寄せの度に彼女のチャクラは目減りするが、キチンと学んだチャクラコントロールが、今までよりもその消費を抑えていた。
成長している……だがもっと、根本的に翻せる。己の弱さを。死の恐怖を。誰にも害されない暴力を以て!
わざと物陰で小さな音を立てる。不自然過ぎず、また自然過ぎもしない音を。
思わず何かを確認したくなるように。
「ん? 今何か変な音が……」
彼の職務上、異変は確認せねばならない。それがどこか人由来っぽい物音ならば尚更。
だが他の警備忍者に警戒を促す程でもない……もし何事も無ければ、寝不足のストレスをぶつけられるかもしれない。具体的に言えば、飲みを奢らされるような形で。
だが、それこそが鵺の賭けであり……彼の命を道半ばで終わらせる

結果となった。
彼の背後で空気が揺らめく。誰も見ていないその揺らぎは、朧気だが確かに熊の形を取っていた。
様々な要因……完全な予想外、油断、気の緩み、そして睡眠不足が重なり、その急襲を察知すら出来なかった。
茶鬼丸の剛腕が彼の首に振り下ろされる。
肉を抉るどころではない。首の骨をへし折り、動脈ごと気道や筋肉を叩き潰す。振り下ろしきった後は、もはや首は皮膚だけで繋がっている状態であり言うまでもなく即死だった。
そして倒れた音を出さぬように、すかさず鵺が胴体を支えて降ろす。かなり血を被ってしまったが、無音で一人減らすことに成功した。
『鵺、大丈夫か？』
茶鬼丸が問う。
鵺が人の死を見るのはこれで三人目だ。父と母……彼らの死体は今まで楽しく話していた姿とはまるで違う、無機質で、温もりものない、何処か寒く恐ろしいものだった。
だがこの男はどうだ。この男の死は茶鬼丸が手を下したとは言え、鵺の口寄せなのだから彼女が殺したと言っても何も間違いではないだろう。
彼女にとって彼は、ある種の壁だった。目標を達成するまでの障害と言う壁だ。
それを排除するために人を殺すのは……仕方のないことではないか？
そう鵺は思う。
あるいは、幼いが故の罪悪感の薄さか。それとも酷く狭い人間関係しか知らないが故の、他人に対する無意識的な興味の薄さなのか。
それは彼女には自覚できない、倫理観の緩さだった。
確かに人を傷付けたり、人の物を盗ったりすることは悪いことだと両親には教えてもらっていた。だがそれを実感する経験が無かった。知識だけあっても、実感が伴わなければそれは希薄なものになってし

まうだろう。
両親が殺された、それで悲しかった。だから人を殺してはならない……とは鵺の中ではならなかった。
悲しくならないためには奪われる前に奪うしかない……短絡的で直情的にも思えるその思考は、彼女の中で真理になってしまったのである。
幸せの為なら罪を犯すのも厭わない。そんな真理が。
（大丈夫だよ、怪我してないし）
『……そう言う事ではないが、まぁそれなら良い』
茶鬼丸はそう言いながら男の死体を咥えて、物陰に移動させる。血の跡が出来てしまったが、この夜の暗さだ。早々見つかるまい。
『禁書庫、あったよ』
するとハクリンから言葉が届いた。見張りを排除する間に邸内へ侵入していたハクリンは、見事その場所を発見した。だが同時に問題もあったようだ。
『中に見張りはいないけど、書庫には鍵が掛かってたよ』
（鍵か……）
流石は禁書庫、鍵は掛かっているらしい。恐らくその鍵も、普通の場所には保管していないだろう。何せ最近デイダラが盗み出したばかりなのだ。何らかの対策は行われているに違いない。
だが最悪……本当の最悪の時には強行突破する手段もある。
（大丈夫、いける）
そう気持ちを強く持ちながら、ドリュウに穴を開けるよう頼む。幻来の術により景色が固定されているので、周囲からは何も変わったようには見えていない。唯一、穴を開けた衝撃で術が揺らいだり、音で察知されるかもしれないが幻術が時間を稼ぐだろう。
鵺は力強く、決意を以て踏み入れる。
土影邸の中は……とても暗かった。

血と禁をその手に

土影邸は岩隠れの里の中で最も大きな建物である。その内訳は土影の居住区や歴史的書物の保管、任務の管理や象徴である意思の石が奉られている場所など多岐に渡る。

だがその用途の多さ故か、部屋を繋ぐ廊下部分はそこまで広くはない。扉上に標識があるため目的の部屋を探すのは容易だが、誰かに見つかった際に単身で逃げるのは困難だろう。

その代わり一度に動ける人数も少ないのが、せめてもの救いだが。

そして鵺たちは今、ハクリンの案内により禁書庫前まで来ていた。事前の報告通り鍵がかかっている。が、封印術の様な術式は確認されず、念のため一度ドリュウと入れ替わりで呼び出された鹿尊にも見てもらったが特に封印の類はなかった。

彼らの知る由ではないが、岩隠れの封印技術は木ノ葉隠れのソレに比べれば非常に程度が低い。

それは偏に、木ノ葉が昔渦の国との国交で得た封印術が高水準過ぎると言うのが理由だが。

そしてそれは感知の術に関してもまた、同様である。犬塚や日向、山中と言った名門一族が持つ物理チャクラ問わない感知の秘伝は、里の防衛は勿論として巡回や高難度任務にも手広く活躍している。

里を覆う巨大感知結界がその最たるものだろう。

だが岩隠れにその様なシステムは無い。だからこそ幼い上に忍者としてもまだまだ未熟な鵺が、秘伝忍術を使っているとは言え里どころか土影邸に侵入出来ている理由になるのだが。

『ハクリンが探したが鍵は見つからなかった。しかしここまで来た以上、多少強引でもやらねばなるまい』

(そうだね、ここからは急がなきゃ)

ハクリンに代わり茶鬼丸が呼び出される。ここからの作戦は非常に単純だ。

しかし素早さと臨機応変さが求められる、大一番でもある。故に口寄せの準備は常に行っていなければならない。

『行くぞ、覚悟はいいな？』
（うん、やって！）
茶鬼丸が剛腕を揮う。身体強化の術を最大限に使用し、熊の腕力と理性による底上げが行われたその膂力は……禁書庫の扉を一撃で粉砕した。かなり音が鳴ってしまったので、警備がやって来るのはそう遠くないだろう。
書庫は土影邸の奥にあったことを加味しても、だ。
事実、鹿尊の感知角は既にこちらに向かってきている数人の忍者を感知していた。時間はそう残されていない。なのでさっさと禁書庫内に入った。
「口寄せの術」
そして茶鬼丸に代わり巨大蟹であるクリスタが出現し、扉の前を陣取る。さらに外で、開けた穴と死体を隠していた幻来も呼び出し直す。
これで万が一の際は時間稼ぎするのだ。何せクリスタと幻来は、防御型寄りの戦闘口寄せ獣と戦闘支援にも無類の力を発揮する口寄せ獣だ。敵を打倒する力は勿論、足を引っ張る術にも長けている。
クリスタの巨躯と術の難度から、彼女を呼び出すコストは現在鵺の家族の中で最も高い。そして幻来もまた、鵺の両腕で一抱えと言う大きさがコスト削減になっているが、決して安くはない。
だが鵺はここ一番でチャクラを出し惜しみはしない。チャクラコントロールの上達によりコストを抑えられているのもあるが、最悪彼女は気絶していても良いのだ。
寄生口寄せと契約し、禁術の秘さえ盗めるのならば。
『こっちだ鵺。デイダラの寄生口寄せと同じチャクラを感じる』
幻来とクリスタに監視を任せ、鵺は鹿尊の指示により一つの巻物を手に取る。
それはかなり古ぼけた、通常サイズの巻物だった。一度デイダラに盗み使われたことで分かり難い場所――――――禁書庫の本棚の奥底――――――に保管されていたが、広い種類のチャクラを判別できる鹿尊にとってはその辺に置いているのと変わらなかった。

巻物の封を切り、広げる。
そこには口寄せの契約欄があった。そしてさらに巻物を広げると、チャクラを物質に練り込む術の詳細が。
『ふむ、予想通りこの寄生口寄せと禁術はセットで作られた様だな。僥倖なことだが、寄生口寄せの術そのものに関しても記載されているぞ』
正しく、その巻物は鵺にとって宝石箱だった。今知りたいこと、欲しい物、全てがここにある。
「じゃあ契約するよ」
『あぁ、ワシは術の詳細を読み込んでおく』
これ以上ない喜びだが、悦に浸っている暇は無い。契約するまでではなく、ここから逃げ帰るまでが盗みなのだ。
【寄木　鵺】
デイダラという丁度真新しい契約痕の横に名前を書き記す。これで契約は完了だ。
鵺に寄生させても意味は無いが、これから新しく創り出す家族に寄生させた上で禁術を与えればそれで完成である。
口寄せに口寄せを寄生させるなど前代未聞だが、恐らくは可能だと鵺の才能が囁いていた。

しかし幸せの鍵を掴んだのも束の間、遂に警備がやって来た。
タイミングとしては悪くないが、どうせなら立ち去るまで来て欲しくないと言うのが彼女の本心だろう。
「禁書庫が破られているぞ！」
数にして三人の忍者が現れる。一様に手練れだと直感できる佇まいとチャクラだ、と鹿尊は見る。
しかしこちらも奥の手であるクリスタがいるのだ。それも、あえて彼女だけを幻来が隠している。
故に容易く、不意打ちに移行出来た。
『水遁・水障壁の術』
警備の忍びの背後に水の障壁が出現する。水遁の忍術であるが、コ

ストが重い分水の無い場所でも安定した威力が出せるというのが彼女の強みだ。
そしてもう一つ。
「キシ……!?」
空気が揺らぎ、彼女の太く鋭い爪が最も前面に立っていた忍者に突き刺さる。微動だにしなければ無類の隠遁を見せる幻来の術から放たれる、ほぼ不可避の初撃は見事一人の忍者を殺害したのだ。
両側にいた忍者もまともに反応が出来ず、キシと呼ばれた男は胴に大穴を開けて倒れる。接敵してから僅か十秒足らずの出来事であった。
「鹿尊、まだかかりそう？」
『あぁ、もう少しじゃな。巻物ごと持ち去れれば良いのだが、古い封印術により禁書庫から持ち出せない様になっているようだのう』
クリスタと幻来の背後では、鵺と鹿尊が術の詳細を追っている。それが終わるまで、彼女たちは警備を食い止めねばならない。
『鵺、こちらは任せてくださいね』
幻来の術は派手に動くクリスタを朧げにするが、戦闘自体を覆い隠す程の出力は無い。故に、ここからもまだまだ増援は来るだろう。
だが、彼女たちがやることは変わらない。
鵺の為に。家族の為に。
その刃を血で染めるのみだ。
それが彼女たちの、術の根底……存在理由なのだから。

国家S級犯罪者

「援護する！」

鈍い戦闘音の中、そんな声が響いた。既に最初に現れた三人の警備の内二人はクリスタの手によって惨殺されており、残る一名も正体不明の重撃に攻めあぐねていたところだった。

新たに現れたのは外にいた上忍の二人。これ以上人員を外から寄こすと、新手に対する警戒が出来ないので二人が限界だったのだ。非番の上忍や中忍を呼んではいるが、いつ到着するかは分からない。

「土遁・岩石弾の術！」

『水遁・水障壁の術！』

援護である上忍の片割、マキシがモヤに向かって土遁の術を放つ。それをクリスタは左の鋏で砕き、返しに水障壁の術で二人と一人――――元の警備員と上忍、マキシ一人といったように――――分断する。クリスタは多対一でも戦える堅牢さと間合いの広さを持つが、上忍の連携を危惧した故の判断だ。

『鵺、幻来に代わり夜月を』

「分かった。口寄せの術！」

幻来とのコンボは所謂初見殺しの術である。キシを殺し、その動揺の最中に鋏で両断した警備員然り……最も効果を発揮するのは初撃のみ。後は止まっていてもそこに何かがいるのは知られている上、動き始めの揺らぎは来ると分かっていれば対処は十分可能だろう。

正体不明の精神的動揺を誘ったり、動きが分かり難いと言う利点はあるものの……顕現枠を一つ潰す程ではない。故に今度は戦力を増やすという方向へシフトした。

『鵺、お任せあれ』

精悍な男の声が鵺の中に響く。その家族は一番新しい末っ子であり……今現在唯一の役割を持った狼だ。

その役割とは、抹殺。敵を屠る……強い強い意志の産物である。

元より力仕事がメインの茶鬼丸や体躯を駆使した重機的用途のクリスタとは違う、本当の意味での戦闘用口寄せ獣なのだ。

『通牙!!』
大型犬よりも一回りほど大きい体躯を持つ夜月が、クリスタの節足の隙間を駆けて前線に踊り出る。
そしてそのままチャクラを纏って回転し、分断された二人組の方へ突っ込んだ。
「新手か?!」
その突然の高速攻撃に面食らったが、しかし流石は上忍。中忍だった最後の警備員を上手く庇いつつ、転がる様に避けることに成功した。
だが、夜月の通牙はこれで終わりではない。犬塚家の扱う通牙系統の技は、激しい回転の中で視界が利かなくとも……その優れた嗅覚でどこまでも追いかけるという猟犬の様な執拗さが味なのだ。
故に、一度避けた程度では……それも無様に転がり避けた程度では二撃目が避けられない。
「クソッ!」
上忍は咄嗟の瞬身で、飛び上がる様に天井に退避する。これはすぐに二撃目が来ると、経験や直感に囁かれたおかげだろう。しかしここ最近では退屈な警備任務に浸っていた中忍には、その判断が出来なかった。
そしてそのツケは、命で払うことになる。
「ギャッ」
悲鳴は一瞬。回転とチャクラにより破壊力が尋常でなくなった夜月の爪牙が、彼の頭蓋を粉砕した。
もはや頭部の損壊が激しすぎて、元が誰だったか分からない程だろう。そんな哀れな男の、友人でもあった上忍の顔が歪む。
「ふざけやがっ……」
その憤りからまろび出た罵声は、しかし途中で止まる。
「マキシ……?」
今まで彼らを隔てていた水障壁の術が解かれる。それと同時に彼の足元に転がり込んできたのは、援護の相方の上忍であった、マキシの上半身だった。

「嘘……だろ？」
仮にも岩隠れの誇る上忍だ。土影邸の警備を任される程信頼にも厚く、またその実力も土影の息子である黄ツチにも劣らないと言われている男……のはずだった。
彼の敗因は、何をとっても場所が悪かった……これに尽きる。
鵺が意識した事ではないが、土影邸の中……さらには禁書庫を背後に戦うと言うのはマキシにとってかなりやりにくいモノだったのだ。
マキシは土遁と火遁の使い手だった。紙媒体の貴重な資料が多数ある禁書庫前では火遁が使えない……それだけでも戦力半減だ。その上彼の土遁は地殻に影響を与える術を得意としているため、やはり本領は発揮しきれない。
それでも数多の術でテクニカルに戦うことも出来たが、クリスタの外殻は彼の想像以上の硬さと鋭さを持っており押し切られてしまった。
具体的には懐に潜り込み、拳岩の術で左鋏の防御ごと胴の殻を突き破るのに成功したが……その返す刃で右鋏に腰から上をねじ切られたのだ。
クリスタがそのダメージが元で消える。相打ち……確かに相打ちであるが、残った最後の上忍であるドツバの精神的動揺は決して小さくなかった。
『鵺、終わったぞ。撤退だ』
「うん、分かった。口寄せの術！」
巻物を読み進んでいた鹿尊が消え、その代わりにドリュウと幻来が現れる。ここまでスムーズに口寄せの切り替えが出来るようになったのも、修行のおかげかなと鵺はふと思った。
「夜月、幻来。足止めしておいてね」
『了解しました』
『あぁ、任された』
途端に幻来の無色の霧が放出され、禁書庫に満ちる。
ドツバからしたら、獰猛な忍犬と戦っていたら突然侵入者の姿が消えた様に見えた。

それに驚きはしたが、だからと言って夜月から目を離せば現世から消えるのは彼の方だ。故に逃げられたと分かりはしても、下手に動けない。せめてさらに増援が来るまでは。

「チクショウ……！」

歯噛みしても状況は変わらない。幾分か動きに慣れ、次第に夜月を圧倒していくが失われたものは返ってこない。

その数分後、夜月を倒したドツバのもとに増援が到着する。

鵺が『岩隠れ及び土影邸への不法侵入』『禁術の略奪』『上中忍四名の殺害』の罪状を以て、国家S級犯罪者としてビンゴブックに掲載されるのは、そのすぐ後のことだった。

出会いあれば

ドリュウと幻来により極限の隠密脱出を果たした鵺は、デイダラを残して来た仏堂へ向かっていた。
途中夜月が消えたのが分かったのでハクリンを呼び出し、舵取りと追手の確認を任せるという万全の状態だ。
結果として、分身したハクリンの調査により追手が放たれたことは分かった。だがどうやら地中を掘り進んで里を脱したためか、逃げた方向が分からず捜索範囲を無駄に広げざるを得ないらしい。
その上夜明け前かつ人的被害の確認があるため、その追手すらまともな量を確保出来ていないというオマケつきでだ。
しかし油断は出来ないだろう。想定以上に大事になってしまった。
なので岩隠れにほど近い仏堂では、隠れ住むのに適さない。また何処かへ彷徨う旅が始まるのだ。
（また旅に出るけど、その前にデイダラお兄ちゃんのとこに行かなきゃ）
せめて別れの言葉くらいは必要だろうと鵺は思う。これがただの知り合い程度ならそのまま旅に出ていただろうが、デイダラは鵺にとってお兄ちゃんの様な存在で、恩人だ。
目的のために手段を問わない彼女だが、その倫理観と身内への情は両立するのだ。

そうしている内に仏堂に着いた。だが、何処か様子がおかしいと鵺は感じる。
「……口寄せの術」
ドリュウに代わり鹿尊が現れる。彼らの心は繋がっているので、鹿尊は鵺が何も言わなくともやってほしいことは手に取る様に分かった。
『……誰もいないな。だがデイダラのチャクラの他に、三種類のチャクラ残滓を感じるぞ』
夜が明け、眩しい陽光が仏堂を照らしている。そしてその側面には

大きな穴が空いていた。
少なくとも、鵺が出ていった際には無かったものだ。
「デイダラお兄ちゃんが誰かと戦った？」
『いや、確かに戦闘の跡にも見えるが……血痕の類が無いのう』
仏堂の中に入り、検分するもイマイチ状況が見えてこない。ただ分かるのは、ハクリンの捜索範囲にも既にデイダラはいないということだけだった。
そんな唐突な別れ。確かに別れの挨拶をしに来たのだが、ワンクッションあるかないかでその感じる寂しさは違うものだ。
「デイダラお兄ちゃん……」
『何、こうなっては仕方あるまい。それに時間もそうある訳ではないぞ』
そう言って鹿尊は鵺を励ましつつ、移動を促す。
生きているならば、また会う事もあるだろう。縁とはそういうものだと語り掛けながら。
「そうだね……行こっか。……うん」
少しだけ移った口癖を口に、鹿尊に飛び乗る。行き先にアテは無い。
また火の国の時と同じように、土の国に背を向けて歩き出すだけだ。だが今の彼女には禁術がある。
それを扱う家族さえ作ってしまえば、心にゆとりが生まれるだろう。自信も生まれるだろう。
ならばこそ――――――。
「そろそろ、家に行っても大丈夫かなぁ」
恐怖の根源地であるその場所へ、足を踏み入れる勇気が生まれるだろう、と。

◇

「何よこれ……！」
ヒノメは渡された新しい資料を握りしめながら、何処に向けているのか自分でも分からない怒りを口にした。

その資料とは、つい最近各五大里に通告されたある事件とその犯人について。そしてその人相書きには、非常に見覚えがあったのだ。

【寄木　鵺】

あの日保護に失敗し、何処かへ消えてしまった少女の名だ。

容姿の特徴や、数々の口寄せを駆使するところも一致している。まず間違いなくあの少女だとヒノメは確信した。

彼女のことは実は気に掛けていた。同僚にも巡回中に見かけたら保護する様に言っておいたし、三代目火影ヒルゼンにも報告はしている。

だがその結果はこれだ。

元より木ノ葉隠れの里へしようとしていたことに失敗し、その代わりに岩隠れの里が標的になったのかもしれない。

弱き者を装った、生粋の悪人だったのかもしれない。

しかしあの時ちゃんと保護出来ていれば、未来は変わっていたのかもしれない。

そんな思いが過って仕方がなかった。忍者としては甘い思考だろうが、その甘さが木ノ葉の忍びの長所でもあるのだ。

(国家S級犯罪者……その捕縛に生死は問わない、ね)

犯罪者である以上、次遭遇すれば保護ではなく捕縛をせねばならない。

場合によっては殺すことも、あるいは殺されることもある。

「ままならないわね……」

「ワン!」

足元でおすわりしていたモモが、同意する様に一鳴きする。

こうして憤ってばかりはいられない。今日もまた彼女は、任務に出るのだった。

そしてどこぞの顔の殆どを隠した木ノ葉の上忍もまた、同様の資料と共にもうすぐ担当することになる下忍候補についての情報を三代目火影から伝えられていた。

「いやぁ～とんでもないガキもいるもんだねぇ。ま、俺より強いガキ

なんて忍界には十分いるからなぁ」
と、そんな独り言を漏らしながら頬を掻いて。

幼気な犯罪者編

海を渡るは難しい

岩隠れの里に押し入り、禁術の略奪および忍者の殺害を行ってから半年強。鵺は十歳になっていた。

因みにあれから禁術を扱う家族の創造を開始しており、既に完成している。

鵺よりも一回りほどサイズの大きい蚊……名をハートキート。

彼女は鵺たちの想定通り、寄生口寄せを寄生させた状態で禁術を会得するのに成功した。この手順は初めての試みだったので内心ドキドキしながらだったが、これからの生命線とも言える家族が無事生まれたことに鵺は安堵するのだった。

しかし術を扱えるだけではあまり意味はない。

そこから鵺の血を採取し、チャクラを圧縮して練り込む。そしてそれを貯蔵するという工程があるのだ。

その上、その血を使うに値する巨大獣も創らねばならない。切り札とも言えるそれは生み出されつつあるが、完成には程遠い。

その為、いざと言う時の準備はまだまだ時間がかかると言えた。

一応として、現状でも血を使えば事実上口寄せのチャクラ消費は完全に無くせるという使い道はある。

だが貯めているとは言え、一回ごとに鵺から採取できる血液はそう多くない。それは偏に鵺の身体が未成熟かつ、同年代の子よりも小柄だからだ。

血を抜けば、栄養と休息を取って回復せねばならない。毎日血を抜くのも、やはり難しいだろう。

なるべく負担を掛けない様にするには、一週間……あるいは少なくとも四、五日は空けた方がいい。

医療忍術では失われた血液は戻ってこないのだから。

そして鵺は今、水の国へ向かっている途中だった。

しかしその足は止まっていて――――――。
「お金が……無い」
資金不足。
今の今まで根無し草で旅をしており、まとまった金など持っていない。基本的に必要な物資があれば、街で盗んでいたので金を持つ必要も無かったのだ。
しかし遂に金がどうしても必要な場面がきてしまった。
時に水の国へ行くには海を渡る必要がある。そしてそのためには船に乗らなければならない。
一応熟練の忍びならば水面歩行と肉体活性を用いれば、一夜で渡り切れるだろうが鵺には無理だ。
そして鵺の家族に海を渡れるモノはいない。
故にこそ船が必要なのだが、現在水の国へ向かう船は到底こっそり忍び込めるような大型サイズのものはない。ほぼボートだ。
その上、現在地である火の国の端っこから水の国の間にある……波の国にてとある企業が航海事業を止めているらしい。多少袖の下を通せば渡れるようだが、やはりその為の資金が無い。
これでは正規の手段では、海を渡れない。
『どうやらついにお金稼ぎの必要が出てしまいましたね、鵺』
「海月……どうしたらいいと思う？」
自らが国際指名手配されているとは夢にも思っていない鵺であるが、岩や木ノ葉に追われているのは理解している。
なので街中を移動する際はブカブカのフードローブを着用し、背中に海月を張り付かせて体格を誤魔化しているのだ。
そんな鵺が海月に相談する。生まれてこの方山で育ち、両親が殺された途端に放浪を始めたのだ。金稼ぎの手段など知る由もなかった。
そもそも何故水の国に向かっているのかと言うと、その周辺にはどうやら寄木一族の祖が起こった場所があるらしいからだ。
と言うのも、土の国から出てからの半年間で一度、彼女は家に戻っていたのだ。
家は崩れ、有用な術や口寄せ獣などの資料はどの様な理由か失われ

ていたが……唯一床下に収納されていた家系図だけは無事だった。
その今となっては系譜の末である鵺しか残っていない家系図を眺めてみると、かなり遠い祖先まで記されていた。
そこから分かったのは、寄木一族は水の国にある鬼灯一族の分家の末端から分離した……古い一族であること。
そして一時期は中規模勢力にまで成長していたこと。その為か今でも水の国の何処かに遺跡が残っている……かもしれないこと。
そこで鵺は、寄木一族の古い術などが残っているかもしれないと水の国を目指すことにしたのである。
何と言っても、彼女にとって己の武器を強化することと増やすことは最も重要視することなのだから。
「……船を止めてる企業、ガトーカンパニーに乗り込もう」
禁術を手に入れ些か自信が付いた鵺であるが、それでもトラウマのある火の国へはあまり長居したくない。
土の国の忍びだっていつ現れるか分からないのだ、さっさと海を渡ってしまいたいと思うのは不自然なことではなかった。
『また追われることになりかねませんよ』
「でも……」
船には乗りたい。だがこれ以上追手を増やすのは嫌だ。そんな葛藤が鵺の脳内を駆け巡る。
暴力行為の成功経験故か、彼女が思い付く手段はどれも荒っぽく、確実に遺恨を残すものばかりだった。
これでそれら一切合切を跳ね除ける強さがあれば話は違っただろうが、準備が万全ではないという状態が尾を引いている。
と、そこで一筋の光明が海月より示された。
『ではこうしましょう……』
ごにょごにょと囁く様に脳裏に響く海月の声。
それは正しく、鵺にとっては盲点。目から鱗な平和的解決方法だった。
「それでいこう！　うん！」
そうして鵺は、喜色を浮かべて一度街へ戻っていった。

そしてその探しモノを見つけるのはそう難しいことではなかった。
何せ彼女は、ここしばらく情報収集のために裏社会に入り浸っていたのだから……。

簡単なお仕事

裏社会には、まっとうでない仕事がそこら中に転がっている。それは主に後ろ暗い用心棒業であったり、人攫いや盗み……果てには殺しまで暗色過多なものばかりだ。

しかしその代わり、単価が高いのも裏社会での仕事の特徴だ。それもそうだろう。命の危険がある仕事を二束三文で受ける者などいないのだから。

火の国における表の社会では動き辛いと思っているので、自然と裏社会へのコンタクトは知らぬ間に多くなっていた。

特にここ最近、水の国へ行く手段を探していた時がより顕著だ。

そして今、鵺は再び裏社会の縄張りに足を踏み入れていた。ここには忍者もいない――――――逸れ者の弱い忍者はいるかもしれないが、鵺は認識していない――――――ので、彼女も多少安心して踏み込めると言う訳だ。

彼女は最近知ったことだが、案外この世界には忍者が蔓延っているわけではないらしい。

「ッ！　何の用だガキ……」

「ガトーカンパニー関係のお仕事……ある？」

気丈に振る舞っているが、声の震えが収まっていない男に鵺は尋ねる。彼はこの港町周辺を縄張りにしている情報屋兼斡旋者なのだが、その恐怖は隠せていない。

どうやら初めて会った時に彼の用心棒を二、三人茶鬼丸が叩き潰したのがよほど怖かったらしい。

『あれは彼が悪いのです。鵺を侮って、あまつさえ人買いに売り飛ばそうとしたのですから』

別段鵺は最初から乱暴をするつもりはなかった。と言うより、そもそも彼女はそこまで好戦的ではない。

あくまで必要だから……そして自分を守るためにその力が振るわれるわけで。

だからこそ向こうが手を出して来たのだから、こちらも出して構わ

ない。そんな思考が成り立つのである。
それが少々過剰な防衛……具体的には問答無用で三人の命が消えることになっても、間違っているとは鵺は思わないのである。
そしてそれを諌めるモノは、家族の中にはいない。
何故なら彼らは皆、最終的には鵺の判断を是とするのだ。ある意味不幸な境遇だと言えるほどに。
鵺が情報屋の男をジッと見つめていると、彼は黙って一枚の紙を差し出した。
さっさと帰ってほしい感情がそこには滲んでいた。
「ガトーカンパニーの用心棒……ついでに民間人の暗殺……」
確認する様に読み上げるそれは、相場に疎い彼女でも分かるほど好待遇な仕事だった。
これなら水の国へ渡った後でも、十分真っ当に活動できる資金は残るだろう。鵺はこれを受けると即決した。
「これ、受ける」
「……分かった。依頼を達成したら、その報酬金の２０％を仲介料として持って来い。それがルールだ、覚えてるな？」
「うん、分かった」
鵺は男の言葉にしっかりと頷く。彼女は良くも悪くも素直であり、ルールだと言われれば余程自分に損があったり嫌でなければ従うのだ。
そしてそれを情報屋はこの数週間で学んだのである。まぁだからと言って彼女を御せるとは微塵も思わず、なるべく関わりたくないのが本音なのだが。
何せ情報料と引き換えに頼んだとあるマフィアの暗殺において、彼女が持ってきた死体は頭部から下が茶鬼丸に潰されてぐちゃぐちゃだったのだ。
ナチュラルにイカレていると直感した彼は、彼女に深入りするのを止めた。
裏社会で生きるには、そういう勘が大事なのだと、彼は痛い程知っているのだから。

そうして裏路地から出た鵺はその足で港町から船に乗り、波の国へ向かった。
この船と船頭はあの男が用意したモノであり、その運用資金は依頼の前金から出ている。
鵺は知らないことではあるが、彼は常に依頼の前金として報酬の２０％を先に受け取っている。そしてその半分を懐に入れ、もう半分を任務遂行の資金に当てているのだ。
そこからさらに達成後２０％取るのだから、実質的に６０％しか請負人に支払われていないのである。
この仕組みを知っている者には素直に前金を渡しているが、鵺は知らないので渡されていない。
裏社会において、自分を守ってくれるのは自分だけだ。知らない、あるいは弱いことにおいての損害は、全て自分が支払わなければならないのである。
『いい仕事がありましたね、鵺』
「うん。それにとっても簡単だよ」
そんなこともつゆ知らぬ彼女たちは、ゆっくりと進む木製の手漕ぎボードの中で話していた。漕ぎ手などの傍から見れば、全身をフードローブで覆っているため見えぬ誰かと話しているように見えて非常に不気味だ。
「おい、着いたぞ」
「ん、ありがとー」
と、そうこうしている内に波の国へ到着した。目立たぬ場所に船を止めた船頭にお礼を言って、鵺は橋下から這い出る。
そして薄っすらと出ている霧が少々うざったいが、鵺は努めて気にしない様にしてガトーカンパニーへ向かう。
『何だか寂れてますね』
「そうだね」
あまり興味の無さげな、そんな無感情なことを呟き……波の国の街並みを横目に見ながら。

鬼人と白雪

指定されたガトーカンパニーの所有物件は、表の仕事を管理する本館ではなく後ろ暗い事業を扱う事務所だった。

見た目こそ小奇麗で無骨なものだが、その中身は薄汚い裏社会の掃き溜めだ。だがそんな清濁の違いなど、鵺は認識すらしていない。

彼女にとって善も悪も総じて意味が無いのだ。価値基準で重要なのは幸せになれるか、そしてそれを壊されないかどうかのみ。

「このガキが、追加の用心棒か？」

ガトーカンパニーの裏事務所に乗り込み依頼書を突き付けると、明らかに小馬鹿にした様な目線で見下ろされる。

荒事を扱うチンピラばかりが集まるこの事務所において、鵺の明らかに幼女と分かるような小柄さは異質ですらあるので仕方のないことではあるが。

一方で鵺的にはそんな侮りなど割りとどうでもよいのだが、背中に張り付いている海月はそうではなかった。実のところ、彼女の家族の中で一番鵺に対しての無礼を憤るのは海月だったりするのだ。

そしてそんな苛烈さが発揮されたのは、フードを外そうと受付役のチンピラが鵺の頭に手を掛けようとした瞬間だった。

「は？　あぎゃぃぁぁ……」

フードの隙間から海月の触腕が伸び、男の手を刺す。そしてそこから医療忍術が行使され……不自然で過剰な回復を促された彼の手が歪に変形した。

具体的には異様に皮膚が膨れ、過剰に育った骨が所々から突き出ると言った具合に、だ。

相手が忍者であればチャクラコントロールにより過剰回復を抑え込んだり、あるいは完全に影響を無くすことは難しくないのだが……今回は相手がただのチンピラだったが故の悲劇だった。

『あら、ゴメンなさい鵺。ついやってしまいました……』

思わずと言った様子でシュンとした声を出す海月。鵺は気にしていないが、仕事に来て早々に問題を起こすとは、とんでもない輩であ

る。
　だが騒ぎを聞いて現れた男により、意外にも状況が悪くなるわけでもなかった。
「何の騒ぎだ」
　奥の扉から現れたのは、全身に包帯を巻いた大柄な男だった。そして背中には見たことも無い程大きい包丁が佇んでいる。
　その威圧感から明らかに上忍クラスの忍者であることが窺え、場にピリリとした雰囲気が流れた。
「再、再不斬さん……！」
　酷く痛むのだろう、血が止まらない歪んだ右手を抑えつつ受付の男は再不斬に泣きついた。そんな男の様子に彼は何かを察したようで、呆れた様に鼻を鳴らす。
「フン、忍者をナメるからそうなる。お前はいつもそうだ」
　それだけ言い捨てると、再不斬は鵺の方に視線を向ける。そこに侮りは無く、観察している様な隙の無い眼差しだ。
　間違いなく熟練の忍であり、また薄暗い裏で生きて来た独特の剣呑さが醸し出されている。
　あの蛇男以外では、出会ってきた者の中で一番強いと……鵺は直感した。そしてそれは、あながち間違いではない。
「依頼書を出せ」
「……はい」
　高圧的な指示を受け、背中で海月が僅かに蠢くのを感じたが鵺は素直に依頼書を再不斬に手渡した。
　彼はそれを受け取ると、まじまじと内容を確認し始める。
「……なるほどな。お前名前と歳は？」
「寄木鵺だよ。多分十歳になった」
　その名を口にした途端、再不斬の表情が少し変わった。思いもよらぬモノに出会った様な、そんな驚きを僅かに滲ませた。
　そしてククっと可笑しそうに笑う。
「どうしたの？」
「いや、なんでもねぇ……白！」

そんな再不斬の様子を不思議に思い尋ねるが、誤魔化す様に首を振られる。そして彼は自分が出て来た扉に向かって、誰かの名前を呼んだ。
「どうしました？　再不斬さん」
するとそこから出てきたのは、色白の美人だった。美醜に関しての趣向が定まっていない鵺にしても、綺麗なお姉さんだと思う程度には。
その立ち姿から彼女もまた熟練の忍である様に窺えるが、同時に物腰柔らかそうな雰囲気に当てられ、再不斬を前にするよりも幾らか警戒心は薄らいでいく。
「追加の人員だ。あの寄木鵺なら戦力としては問題ねぇが、まだガキだ。お前が面倒を見ろ」
「まぁ、あの。分かりました」
再不斬の口元は包帯に覆われているため、背を向けられると鵺にはその会話は上手く聞き取れない。そんな彼らの様子をぼんやりと眺めていると、白と呼ばれた女が鵺に近づき腰を屈めて頭の高さを合わせた。
「はじめまして鵺ちゃん。お顔見せてもらってもいいかな？」
「はじめまして……いいよ」
自分から相手に距離を詰めるのは無意識に出来るが、逆に詰められることに慣れていない鵺は若干緊張しながらそう答える。
一瞬隠していた顔を晒しても良いものか考えたが、そもそもこれは多少浮いてでも街中でトラブルを避けるためにやっていることだ。仕事仲間に見せるくらいは大丈夫だろうと思い直す。
そしてフードを外すと、そこには幼い少女の顔が。
白は思ったよりも鵺が幼かったからか、少し驚いたような表情を浮かべている。
否、彼女が驚いたのは……そこもあるが最たるものはその眼だった。
（深い……悲しみと絶望を知っている眼。でも僕や再不斬さんと同じじゃない、どこか希望へ向かっている明るさもある）

不思議な目だと白は思った。
この歳で裏社会に入り浸る少女など……ましてや国家指名手配されるほどの人間など、まともじゃない。きっと自分達と同じように地獄で彷徨い歩いたのだろうと思うが、それにしては絶望のみに彩られず光もある。
この子はまだ完全な忍者(道具)でも、希望を失った廃人でもない。ちゃんとした人間のままでいられているのだと、白は鵺の眼を見て感じた。
そしてそこにあるチャクラのうねりも、何となくは。
「ありがとう。これから再不斬さんのアジトに行くから、付いてきてね」
「分かった、白おねぇちゃん」
「ふふ、おにいちゃんだよ」
「えっ」
彼女はどうやら、彼だったらしい。

運命の軋み

再不斬と白に連れられて、辿り着いたそこは林の中にあるアジトだった。ここを再不斬がボスとして取り仕切っているらしく、集められた忍の用心棒とは言えその実態は再不斬の一味らしい。

鵺は中に通されると、特に警戒することもなく素直に案内されたソファに身を沈めた。ここに来るまでに白と仲良くなり、再不斬もそう悪い人間でないと言われた結果だった。

白としてはそんな彼女の無防備さに大丈夫かと思うこともあるが、相手はあの国家S級犯罪者だ。その様な大層なことをやらかす程度には自信があるのだろうと考える。

それに白は、鵺に自分を重ねて見ている節があった。

幼い頃に両親が死に、浮浪児として生きて再不斬に拾われたこと。そして鵺は彼にとっての再不斬がいなかったこと。寄る辺の無かった彼女の孤独は、一体どれほどのものなのだろうかと。

そして同じ特殊な血族という点においても。

寄木一族に関しては鵺は詳しく語ったわけでも、その秘伝を口にしたわけでもない。ただ彼が霧の暗部時代に、消えた水の国周辺の特殊な術を持った一族について調べていた時にその名前を見ただけだ。

だがそこに名前が載っているということは、きっと自らが持つ氷遁の血継限界と同様に特殊な術を受け継いでいると……そしてそれを恐れたりあるいは狙った者に彼女の両親は殺されたのだと。

そう白は鵺の話を聞いて感じたのだ。

そっと鵺の頭を撫でる。彼女は不思議そうな顔をして白を見上げるが、対して彼は崩れぬ微笑を向けていた。

確かに自分は再不斬の道具であり、心を持たぬ冷たい氷。

しかしそれは忍者としての自分であり、どうしても忍者になり切れぬ温い部分が残っている。その部分が、鵺に対しての憐みを誘って仕方がなかった。

ならばこそ。

この依頼の最中だけは、手の届く場所にいる限りは、出来るだけ暖

かく接しようと白は思うのだった。

かくして、アジトに着き一息ついた彼らは今後の計画を話し合うことになった。

元より計画は既に練られていたのだが、突然鵺という増員があったので、そこのすり合わせと修正を行うのだ。

「鵺と言ったな。何が出来る？」

「色んな口寄せが出来るよ！」

詳しくは言わない。それは忍者としての最低ラインである、秘密保持の観念をデイダラに教えられていたからだ。

そして熟練の忍びである再不斬からすれば、それだけの情報で見えてくるものや活用法も思い付く。

（口寄せか……どうやら手配書と情報は一致しているようだな。それに岩の上中忍を殺せるほどの口寄せ……こいつは使えるな）

自身の強さにはかなりの自負があるが、戦力は多い方が良い。そして特段報酬金の山分け等はないのだから、分け前で争う必要もない。

元より戦力は十分と見ていたのでありがたがるような増援ではないが、それでも嬉しい誤算でもあった。

「分かった、襲撃は今から一週間後だ。お前の投入タイミングは追って伝える」

再不斬はそう言うと奥へ引っ込んだ。その場に残されたのは白と鵺、そして鬼兄弟という二人組だけだ。

しかし鬼兄弟は特に鵺に対する興味はないらしく、目線も寄こさず寛いでいる。鵺もまた、彼らに興味はない。

そうして、彼らは一週間の時を経て一度目の襲撃を開始する。

それが酷く運命を狂わせることだと知らずに。

◇

日々の退屈な任務にうんざりしていたナルトは、遂にその鬱憤を爆発させることになる。

即ちそれは、任務を言い渡す三代目火影への駄々という直訴。彼ら

の担当上忍であるはたけカカシはそんなナルトの様子にひやひやするも、何と火影はこれを承諾した。
そうして命ぜられた任務は、とある橋職人を波の国へ送り届けること……という護衛のCランク任務だ。
下忍たちにしたら、それは正しく忍者っぽい任務だがカカシにとっては欠伸しながらでも出来る簡単なものだった。
何せCランク任務というのは、対忍者ではなくあくまで野盗やチンピラから守るという逆立ちしても忍者に勝てぬ者相手なのだから。
（ま、コイツらにも良い経験になるでしょ。中忍試験にも推薦するつもりだし、質の高い経験は早い内にした方が良い）
上司として、教師として、そんな子供思いな思考を巡らし心中で頷いた。
と、そうしている内に、橋職人であるタズナと子供たちの顔合わせが終わる。少し偏屈そうな依頼人だが、そこに文句を言う資格は忍者には無い。ただ完璧に任務を遂行するだけだ。
「んじゃ、諸々の準備をして門前に集合ね」
カカシがそう号令を掛けると第七班は一度解散した。
こうして運命の歯車は、少しずつ少しずつ、動き始める。

想定外は世の常

作戦決行日、鵺は今再不斬と白に連れられて波の国にある街道にいた。

先行していた鬼兄弟が破れ、そのことから手練れが護衛についていると判断した再不斬は波の国で待ち伏せることになったのだ。

そして彼らの標的がその地点に現れたのも、そう時間は掛からなかった。

標的である橋職人の男と顔の殆どを隠した隙の無い男、そして三人の男女混成の子供たちだ。鵺からしたら少し歳上だが、恐怖の対象である忍者としての威圧感はほとんど無い。

「クク……写輪眼のカカシか……確かに鬼兄弟では荷が重いな」

再不斬が現れた彼らを観察し、そう零す。

さらには、引き連れている子供たちは新たに忍者になった見習いの様なモノで、戦力にはならないだろうとも。

「私はどうしたらいい？」

基本的に現場の指揮は再不斬が取ることになっている。別段鵺は彼の部下ではないので、命令に従う必要も無いのだが、この場では素直に言う事を聞こうと彼女は考えているのだ。

というのも、一週間の間で白や自分とのやり取りで彼が悪い人ではないと認識したので、白程ではないが懐いたのだ。

怖い顔をしているが、鵺に酷いことを言ったりしたりしないので多分良い人なのだ、と。

そして白にはこの一週間でかなり面倒を見てもらっていた。

彼は鵺に対する親近感が強く、食事や風呂など彼女が満足に浸れなかった娯楽を堪能させたのだ。

そこまでするのは、白が過去にされたかったこと……あるいは再不斬に貰った温もりを鵺にも与えたかったのかもしれない。

故に非常に懐いた。デイダラとも再不斬とも違う、母親の様な慈愛が鵺の心を満たしたのだ。

そんな鵺だからこそ、勝手には動かず指示を仰いだ。

彼女の素直さは、身内にはことさら強く発揮されるのだ。
「お前たちは待機だ。手を出すなよ」
再不斬はそう言い残し、瞬身の術で消えた。早速襲撃に行くようだ。
白は彼を信頼し、鵺は幸せに関係ない強い忍びとは積極的に戦いたくないので、素直に観戦に留まる。
「再不斬……まずは俺と戦え……!」
数瞬のやり取りの後、相手の上忍が構え、再不斬も完全な臨戦態勢に入った。
戦闘が、始まる。

◇

途中までは圧倒的に再不斬が有利だった。
相手方の上忍はたけカカシを水牢の術で封じ、残るは経験も実力も再不斬に遠く及ばない子供三人と護衛対象のみ。再不斬は水牢から離れられないが、水分身でも十分始末可能な相手だ。
如何様にも料理できる……はずだった。
状況が変わったのは、下忍たちの奮闘により水牢の術が解かれて……いや、解かされてからだ。油断していたとは言え、解放されたことへの焦りと怒り……それをカカシに刺激され冷静な判断力を失った。
そこからは相手の掌の上だ。術を相殺され、次の術を追い越され、彼の切り札である水遁・大瀑布の術が再不斬に直撃した。
そして身動きを封じられた隙に、身体中にクナイが突き刺さる。その鋭い痛みに再不斬が顔を顰める。
「お前には……未来が見えているのか……?!」
「あぁ、お前の未来は死だ」
明らかに勝負は決まり。白と鵺の、ここからの判断は拙速を求められた。
多少強引でも場を収めなければならない。そして撤退し、出直すのだ。

「不味いですね……鵺ちゃん、僕は再不斬さんを仮死状態にして回収を……って鵺ちゃん？」
白は再不斬の敗北を受け、回収と撤退を決めた。その為の抜け忍の仮面もある。
彼が負けるのは想定外だが、ここからどう動けば回収と撤退が出来るかはすぐに思い付き、実行に移そうとした。
無論鵺に一声掛けて……と思っていたのだが、声を掛けた先に鵺がいなかった。
「口寄せの術！」
『水遁・水障壁の術』
白が動くよりも早く、鵺が動いた。茂みから飛び出した彼女はクリスタを呼び出し、他に眼もくれず突貫させる。
一瞬垣間見えたその顔は、どこか恐怖している様な、怒っている様な顔だった。
「何だってばよ！」
オレンジの服を着た少年が叫ぶ。
何せ再不斬をカカシ先生が追い詰めたと思えば、再不斬含めて六人を取り囲む様に水の壁が出現したからだ。
状況に付いて行けていない。
「新手か?!」
一方黒髪の少年も叫ぶ。だがその動揺は子供たちの中では一番少なく、状況に対応するべく周囲に視線を動かしていた。
心構えが違うのだろう、その心の強さが経験の不足を補っている。
そして最初の攻撃は、すぐに繰り出された。
再不斬にトドメを刺そうとしていたカカシに向かって、鋭利で巨大な爪が刺すように水の壁を割って現れたのだ。
「これは?!」
見覚え……いや、聞き覚えのある攻撃手段にカカシは動揺を隠せない。それは正しく、つい最近岩隠れの里で猛威を振るった惨劇の噂だからだ。
しかしそこは数多の上忍の中でもトップクラスの実力と経験を持

つ男、写輪眼の反動でかなり鈍くなった体を無理やり動かし回避した。
「再不斬に加えて、とんでもないのが敵になったね……」
冷や汗を流しつつそこを睨む。彼の優れた頭脳は、援軍が何者かをすぐに思い至らせたのだ。
その思考と同時に爪が割った水がさらに割れて、一人の少女が再不斬を庇う様に前に出た。そして爪の持ち主である巨大蟹は、そのすぐ後ろから追従する様に現れる。
「蟹……？」
口寄せの術を知らぬ子供たちにとっては、理解不能な光景だろう。何せそれほど大きな蟹など見たことも聞いたこともないのだから。
オレンジの少年……ナルトは混乱から立ち直り、新たな敵の登場を遅れながらも悟る。
そしてそんな彼が活躍しようと鼻息を荒くしているが、カカシは逆に焦る心を収めるのが難しかった。
（チャクラも身体も限界だ……どうすればいい……?!）
カカシの持つ情報では、寄木鵺という犯罪者はある意味再不斬よりもヤバイ相手だ。到底子供たちだけでは対処は不可能だと、確信している。
せめて自分が万全な状況なら切り抜けることは出来るだろうが、もはや今の身体は絶不調も絶不調だ。
雷切こそ使っていないものの、写輪眼の能力を使い過ぎた。今にも倒れそうな身体を保つのに精一杯である。
「お前たち……絶対に仕掛けるなよ……」
特に飛び出しそうなナルトを手で制しながら言う。
彼女のその体躯から侮りや戸惑い、油断を子供たちは感じているが、それは今最も危険な状態だ。
何と言っても、相手は国家指名手配犯……国家S級犯罪者、格ではあのうちはイタチと同レベルの相手なのだから。

子供たちの戦い

倒れ伏す再不斬の前に立ち、鵺は考える。
勢いのまま飛び出してしまったが、戦うにしてもまずは再不斬をどうにかしなくてはならない。
いくら頑強な肉体を持つ忍と言えど、手酷い傷を抱えていては巻き込まれて死ぬ可能性があるのだから。
その点、再不斬を回収するには白がいる。彼とて熟達の忍だ、一回りほど自分よりも大柄な男一人抱えられるだろう。
ならば、鵺のやることは一つ。足止めだ。そしてあわよくば再不斬を倒した上忍を殺せればよいが、彼を打倒した男を鵺が殺せると思うほど、彼女には自信が無かった。
「カカシ先生……何なの？　あの子……」
桃色の髪を持つ少女、春野サクラが担当上忍であるカカシに尋ねた。立ち塞がる鵺は、見てくれこそ自分達よりも幼い女の子なのだ……強敵と思われた再不斬を圧倒したカカシがここまで警戒する理由が分からなかったのだ。
「……あの少女は寄木鵺という、最近現れた国家指名手配犯だ」
「国家指名手配犯!?」
三人の子供から、異口同音の驚愕が放たれる。
それもそうだろう。木ノ葉と言う平和な里で生まれ育ち、忍者としての経験も浅く……後ろ暗い世界のことなど何も知らないのだから。
自分よりも明らかに年下であるにも関わらず、国々から追われる程の犯罪を起こすなど想像も出来ない。
「どうするんだ、カカシ……」
サスケが問う。油断なく鵺とその背後の蟹を睨みつけているが、微かに震える手を隠せていない。
再不斬とカカシが戦っていた時の様な、命を握られる感覚に陥るほどの殺気は感じないが……寧ろそれが不気味に思えたのだ。
睨み合いが続く。鵺側が動く様子を見せないので、カカシたちも動くに動けない。

カカシとしては再不斬を始末出来ないのは残念だが、限界も近く鵺も現れた以上撤退してくれるに越したことはない。
「鵺ちゃん、再不斬さんを回収しました。撤退します」
クリスタの背後に紛れて、再不斬を背負った白がこっそりと鵺に伝える。そこには鵺の撤退も含まれていたのだが、鵺は動かなかった。
不思議に思い白がもう一度声を掛けようとした瞬間、鵺は口を開いた。
「白お兄ちゃん先に行ってて、足止めするから」
「……分かりました」
確かに、荷物を抱えた状態で背中を見せるのはやりたくない。クリスタに紛れているとは言え、カカシほどの忍者を相手に無意味に背中を見せるのは襲ってくださいと言っている様なものだ。
霧の追い忍としてなら、多少後で違和感を感じさせてしまっても回収は問題なく出来たが……その手段はもう取れない。
鵺が暴走したが故にだ。
なので白は少々渋りつつも了承し、瞬身の術で去った。
場には臨戦態勢の第七班と、鵺……そしてクリスタのみが残る。
『鵺、少々危険なのではないですか？　せめてもう一体戦闘用の家族を出した方が……』
「大丈夫だよ。再不斬おじさんを倒したあの忍者以外は、怖くない。それに海月と鹿尊がいないといつ撤退したらいいか分かんないし」
第七班からの視点では鵺の口寄せは蟹一匹だが、その実背中には海月が……そして茂みに隠れて鹿尊が範囲探知をしている。
前者は万が一の負傷時のため、後者は白の位置と思わぬ奇襲対策のためだ。
そして続く睨み合いに終止符を打ち、最初に動いたのはナルトだった。
「うおおおおお！」
「おい！　バカ！」
国家指名手配犯だのの話をよく理解出来なかったのか、年下＝自分よりも弱いと無意識に油断しているナルトが鵺に突っ込んでいった。

サスケの制止も虚しく、彼が足を止めることはない。
「影分身の術！」
ナルトの得意忍術である影分身の術で、彼が十人に増える。
数で攪乱と物量押しするのが、不器用でまともな忍術を他に持たぬ彼のスタイルだ。
「サスケ！　サクラ！　援護だ！　俺はチャクラ切れで動けない！」
いよいよ限界が来たようで、カカシが片膝を突きながら叫んだ。本来なら地面に倒れ伏して身動きも取れないのだが、せめて戦闘指示だけでもと思い気合で昏倒を耐えている。
その切羽詰まった状況でサクラは身を固くしつつも懸命な眼差しを鵺に向け、サスケもまたナルトの後詰めとして思考を巡らせる。
「うわぁ！」
本能的に蟹ではなくそれを支配しているであろう鵺に突貫したナルト十人は、ことごとくクリスタの爪に叩き返されその数を減らしていく。
その膂力差は圧倒的だ。
しかし、それを覆すのもまた忍術である。
「火遁・豪火球の術！」
ナルトに気を取られていると見たサスケは、上空から巨大な火の玉を吐き出した。これはとてもではないが下忍に出せる威力の術ではない。
直撃すればいくら堅牢な殻を持っていそうな巨大蟹でも、無事では済まないとサスケは信じていた。
だが、性質変化の忍術には得てして相性というものがある。
『水遁・水障壁の術』
鵺を中心にして、ドーム型に水の壁が吐き出される。その水量は先ほど六人を取り囲んだ時よりも多く、豪火球の術はその壁に阻まれて消えた。
自信があった攻撃が無に還され、サスケは少なからず動揺する。
「サスケェ！」
豪火球の術同様、新たに現れたドーム型の水の壁に阻まれて攻め手

を失っていたナルトが叫ぶ。
クリスタにとって水障壁の術はただの壁ではなく、その見切りやすい大振りな攻撃を隠すベールでもあるのだ。
ドームの天頂を突き破り、大きく開いた鋏が迫る。
刺突攻撃ではないのは水の壁で視界が封じられており、鹿尊の探知で大まかな場所しか把握出来ないが故の範囲攻撃なのだ。
「サスケ君！」
咄嗟にサクラが起爆札の付いたクナイを投げる。基礎忍術しか持たぬ彼女だからこそ、真っ先にその選択が取れたのだ。
そのクナイは寸分違わず、水障壁と鋏腕（きょうわん）の境に当たり起爆される。
そしてその衝撃により、サスケに迫っていた攻撃の狙いが大幅にズレて空を切った。
サスケは冷や汗を流しつつも体勢を整え、味方の傍に寄る。ついでにナルトの首根っこを掴んで回収していた。
「何するの……？　許さないんだから……！」
水の壁が消えたそこには、左腕が関節とは逆に折れて垂れ下がっている蟹。そして憤怒の表情を浮かべた鵺がいた。
先程まで専守防衛に努め、積極的な攻勢に出ようともしていなかったが、今は違う。
家族を傷付けられた怒りで、殺気を撒き散らかしているのだ。
暴力的で刺々しい殺気ではない、寧ろ静かで闇深い……そんな異質なモノをナルトたちは感じた。
『鵺、私は大丈夫です』
『鵺、落ち着いてください』
クリスタと海月がそれぞれ宥めようとするが、鵺の心に入っていない。
暴力には暴力で返さねば……彼女の信じる幸せは壊れ、永遠に辿り着かないのだから。
『鹿尊、まだですか』
『まだじゃ、もう少しかかる』
そして不幸にも白と再不斬の撤退が済んでいない。鵺が足止めに

買って出ているが、やはり警戒しながら気絶した大男を背負っての逃走は手間が掛かるらしい。
「私の幸せを……壊すな！」
鵺の叫びと共に、クリスタの攻撃が始まる。命令があれば問答無用で従うのが彼ら口寄せ獣だ。
そしてその攻撃の苛烈さは、彼女の精神に引っ張られる。
防衛から攻勢へ、戦いのステージが一つ変わった。

その慟哭は

サクラがタズナを、サスケがカカシを庇いながらクリスタの攻撃を躱す。

その攻撃自体は鋭く、重いが片腕の破損により手数は多くない。また挙動も読みやすく速さもないので、大の大人を抱えながらも十分回避は可能だ。

しかし当たった際のダメージはカカシの話によると岩隠れの上忍が死ぬレベルなので、油断は出来ない。

だがクリスタ側も前に出過ぎると鵺を庇えないので、よりその攻撃は中途半端になっていると言える。それが第七班にとっての僥倖となった。

しかし問題もある。今の状態は気をつけてさえいれば負けはしないが、勝てもしないのだ。

鵺としては本来ならそれが正しい膠着状態であり、撤退まで時間を稼げば良かった。が、舐めていた相手にクリスタを傷付けられ頭に血が上ってしまっている。

故に何とかして、目の前の忍者を殺そうとしているのだ。その割りには戦闘役がクリスタしかいないのは、家族の制止による最低限の成果と言える。

第七班はそのことを正しく認識している訳ではないが、鵺が怒りによって視野狭窄に陥っていることは察している。故に彼女が痺れを切らして、守りが甘くなるのを待っているのだ。

そしてその機会を窺うのは、クリスタの攻撃に紛れて姿を隠している身軽なナルトだ。

クリスタの広い攻撃範囲を掻い潜り、第七班は見に回る。既にカカシにより鵺は口寄せの術に攻撃を任せるタイプだと看破されており、仲間内に周知している。

そしてその時が来るのに、攻防の開始からそう時間は掛からなかった。

「クリスタ！」

サクラが疲労により体勢を僅かに崩した……様に見せた。依頼人であるタズナを抱えている状態なので非常にリスキーと言えるが、彼には元より依頼の難易度を偽っていた負い目がある。好きにやってくれとの言は出ているので問題はない。

その隙に誘われ、クリスタに号令を掛ける。さらに言えば、サクラはクリスタの腕をへし折った女だ。自然とその攻撃コールも力強くなる。

が、それは第七班の作戦通りだ。

「させねぇってばよぉ！」

クリスタが前に出るのに合わせて、鵺の背後に回ったナルトが五人に増えて彼女に飛びかかった。

ただでさえ身体能力に差があるのに加え、ステゴロではなくクナイがその手に握られている。そのためまともに戦えば、負けるのは確実に鵺の方だ。

寧ろ負けるで済めばよいが、場合によっては大怪我を負い死ぬ可能性すらある。

海月が背中に備えているが、彼女が活躍できるのはあくまで鵺が傷を負ってからなので、取り押さえられれば抵抗が出来ない。

『鵺!!』

ナルトの声と鹿尊の感知により攻撃を察したが、何せ数が多く範囲も広い。最終的な攻撃の終着点が鵺なので、守りに行くことは可能だが完全に後手に回ってしまう。

水障壁の術もタメがいるため間に合わない。右鋏腕と身体で守るしかない。

二人目、三人目のナルトを弾き鵺を守ったところで、四人目のナルトがクリスタの背殻に起爆札を張り付けた。

そして――――――。

『グッ……!!』

強い炸裂音と共にクリスタの体勢が大きく崩れる。起爆札の衝撃をゼロ距離で受けた背殻は決して小さくない損傷を受け、彼女はダ

メージ超過により口寄せが解除されてしまった。
最後の力を振り絞って迫り来ていたナルトの分身を全て消し、本体は離れた場所に弾くことは出来たが、それが限界だった。
「クリスタ――ッ！」
鵺の甲高く悲痛な叫びが響き、彼女はクリスタが消えた場所に縋りつく様に蹲った。とてもではないが、これ以上の戦闘行為は不可能なほどの取り乱し様だ。
『いけない！　夜月！』
鵺のローブの背中の部分が膨らみ、そこから夜月が現れた。
彼女が口寄せを使っていないのにも関わらずに、だ。
これは鵺が寄生口寄せの術から得た発想の一つである。夢現獣の術をある種彼女の夢と言う精神世界にて、相互契約を結んでいる寄生口寄せと解釈したのだ。これにより、彼ら家族たちは彼女の内側から自主的に口寄せされることを可能とした。
しかし勿論欠点やデメリットはある。
四体以上の顕現が出来ないという元来の欠点もありつつ、その最たるものはチャクラの消費量と鵺への負担だ。
チャクラ消費量は出て来る口寄せ獣の元のコストのおよそ五倍ほどであり、クリスタや海月を始めとした高コスト獣はハートキートが貯蔵している血を使わないと自主口寄せは不可能だ。
そして精神世界からの勝手な脱出は、鵺の心身への負担がデカい。
何せ寄生口寄せの術の応用や、相互契約を結んでいるとは言えその原理は術の暴走と変わらない。
チャクラを勝手に使われるのと精神への干渉は、思った以上にキツイのだ。
それ故に、手段としては有用だがおいそれと使えるものではない。同様に口寄せ獣たちからしても、あまり取りたい手段でもなかった。
だが使用後の負担を差し置いてでもやらなければならない場面とあらば、しない訳にはいかないのだ。
「あっ……」
ごっそりとチャクラが抜ける感覚に鵺が呻く。この襲撃に合わせ

てクリスタと海月、鹿尊といった家族の中でもコストが重い面々を出していたためにチャクラはあまり余っていなかったので、強い倦怠感に襲われたのだ。

『夜月、撤退じゃ』

丁度いいと言っても良いのか、白と再不斬の撤退も済んだらしい。

鹿尊の報告に夜月は返事もする間も惜しんで、鵺を咥えて駆け出した。

森に紛れる様に入ったので、第七班の姿はすぐに見えなくなった。彼らもこれ以上戦う意思は無いので、鵺のあの取り乱し様に困惑を覚えながらも見送ることになる。

「撤退……したか」

サスケが零す。徐々に臨戦態勢を解きつつ、ようやく一息入れることが出来た。

思えば再不斬からの鵺という強敵の連戦だ。下忍には些か重かっただろう。

だが戦闘は終わったが、仕事はまだ残っている。

ここからタズナを家へ……そして動けぬカカシを抱えていかなければならないのだ。

さらにタズナの橋作り達成までに、取り逃した再不斬と鵺と言う敵……それらとの戦いは、もう一度ある。

それに対し、恐怖とも武者震いとも思える震えを、サスケは感じるのだった。

感情の制御

夜月により連れ帰られた鵺の心は、些か平穏とは言い難かった。
家族を傷付けられたこと、それは今まで案外その眼で見たことはなかった。
というのも、毎回口寄せが解除される程のダメージを負うのは足止め役の口寄せ獣ばかりで、目の前で消えたと言うことはほとんど無い。
唯一あったのは岩の上忍と戦った時にクリスタが倒された時だが、彼女は相打ちに終わっていたので怒りの矛先が死んでいた。だからこそ、溜飲が下がる結果になっていたのだが……。
しかし今回ばかりは違う。
目の前でクリスタが重大なダメージを得て、かつその仕立て人が死んでいない。
本来なら鹿尊や海月を消してでも、夜月とドリュウ、茶鬼丸に殺させたかったが発狂している間に撤退させられた。
故に鵺の内側には未だグツグツと怒りと憤りが湧き立っており、再不斬のアジトに着いても自らの服の裾を掴むその握り拳が、ずっと力強く握られていた。
だが誰よりも負傷し、床に伏せている再不斬がいるから。
たったそれだけの理由が、彼女の暴走を食い止めていた。今現在彼女は、このアジトの中では白に最も懐いているが、再不斬にもそれなりに懐いている。
一度懐に入れてしまえば、口寄せ獣程ではないがまるで家族の様に思えてしまうからか、この場においては勝手なマネはしない。
怨敵が目の前にいないだけで、彼女の荒れる心に少しばかりの冷静さをもたらしていたのだ。
『鵺、よーしよしよし、大丈夫ですよ』
夜月と鹿尊は夢に帰り、海月だけが残って鵺をあやしている。
背中に張り付いたまま、精一杯触腕を使って抱き締めたり絡まったり、頭を撫でているが未だ落ち着く様子は無い。

そのため周りから見れば、鵺のローブのあちらこちらから内から押す様に蠢いたり裾から触腕が生えているという奇怪な絵になっているが、当の本人にそれを気にする余裕は無かった。
時に口寄せ維持のチャクラや時間は夢現獣の術においてほぼ無にも等しいが、同時顕現数によってチャクラの回復が阻害されるという欠点がある。
チャクラを練り込んだ血はあるにはあるがまだ十分な量を確保出来ていないため、気軽に使えるものでは無い。
故に本来ならば海月だけでなく他の家族にも鵺をあやすのを手伝ってほしいのだが、夜月の口寄せに使ったチャクラがあまりにも多かったので、泣く泣く海月だけ残っているのだ。
勿論イヤイヤやっているわけではないが、鵺の心が海月にも伝播して落ち着かないのだ。それに、鵺の心の平穏は家族全員の願いでもある。どうしても彼女の心を癒したかった。
海月の目算ではしばらくこのまま刺激が無ければ、その内元に戻るとも思えた。が、不幸はあちらから足音を鳴らしてやって来る。
最初にその男の来訪に気付いたのは白だった。
「あんたまでやられて帰ってくるとは……霧の忍者はよほどのヘボと見える！」
ガトーが刀を持った二人のボディーガードと共にやって来る。
その雰囲気は随分と嫌味気だ。
「部下の尻拭いも出来んで、何が鬼人じゃ……笑わせるな……」
カカシに打ち取られた鬼兄弟のことを出し、そう言いながら歩を進める。ガトーには白も鵺も眼中に入っていない様だった。
途中でボディーガードの二人が前に出て刀に手をやったが、それをまぁ待てと止め、ガトーが再不斬の枕元まで来た。
誰も、鵺の静かな激情の波を知覚していない。
「なぁ、黙ってることないだろ……何とか……」
しかしその言葉は続かない。白が再不斬に伸びるガトーの腕を万力の力を込めて握ったからだ。
「汚い手で再不斬さんに触るな……！」

「ぐっ！　お前……！」
忍者と一般人の力の強さは、大人と子供以上に違う。
そのあまりの力強さにガトーの腕の骨が鈍い音を立て、その痛みに彼は呻いた。
その瞬間、ボディーガードが反応して刀を抜くが……遅い。
一瞬で移動した白が、両方の抜身の刀を奪い二人の首に添える。その余りの速さにボディーガードの二人からしたら、白は一瞬で刀を奪って生殺与奪の権を手中にしたと見える。
「やめたほうがいいよ……僕は怒っているんだ」
白が心底怒りを込めた声で二人を諌める。彼の氷遁のチャクラが荒立って、薄ら寒い気すら二人は感じた。
それに対し化け物かよと、ボディーガードが戦慄する中。彼らの背後では不幸がもう一つ、全速力で迫っていた。
「口寄せの……」
『鵺！　やめなさい！』
その手がギリギリで止まる。だが興奮しきって瞳孔の開いた眼は真っ直ぐに、ガトーを含めた三人の無礼な来訪者に突き刺さっている。
止めた理由は単純だ。人殺しを止める……のではない。それに使うチャクラがそもそも足りておらず、戦闘が出来て一番コストの軽いドリュウですら呼び出すのが危険だからだ。
術こそ行使されなかったが、その異様な雰囲気を感じ取った三人はすっかり腰が引けてしまった。
「次だ！　次失敗を繰り返せば、ここにお前らの居場所はないと思え！」
ガトーはそう捨て台詞を吐くと、足早に出ていった。その背中にはありありと、この場にいたくないと書かれているようだった。
「白、鵺……余計なことを……」
布団に沈む再不斬がそうぼやいた。事実、ナメた態度を取っていたガトーが自分に触れようものなら、掛け布団の下に仕込んでいるクナイで刺してやろうと思っていたのだ。

だがそれを察していた白に止められた。
白とてガトーは殺してやりたいほど怒りを抱いていたが、実利を考えるとそれはやめた方が良い。
「分かっています。ただ今ガトーを殺すのは尚早です。ここで騒ぎを起こせば、また奴らに追われることになります。今は我慢です」
それに……とニッコリ笑った白は続ける。
「鵺ちゃん、止まったのは偉いですが……そう正当性無く人を殺すものではありませんよ。殺害と言う手段は私たちにとって簡単で強いものですが、同時に多くの敵を作ってしまいますので」
「……分かっ、た。うん……」
今まで立ち塞がる敵は殺すか殺せないかだった。チャクラコントロールを覚え、クリスタを始めとする強い口寄せ獣を比較的楽に出せる様になってからは殺すことの方が多かった。
何せ鵺にとって他人は家族かそれ以外でしかない。そのどうでもいい人間をどれだけ殺そうとも死のうとも、どうでもいいことだったのだ。
口寄せ獣たちが誰も鵺を止めなかったのも、その思考を強める一端となっていた。
だが今この場で、初めて鵺はその所業を咎められた。別段倫理教育というものでは到底ないが、特に懐いている白から言われれば、その認識は少しは改める。
結果鵺は激情に荒れる心を押さえつけて、渋々ながらも彼の言葉に頷いた。
彼女は叱られた子供の様な顔をしながらも、一旦怒りを横に置くことが出来た。そんな彼女の様子に海月もホッと一息つく。
「もう、寝る……」
「はい、おやすみなさい。鵺ちゃん」
言うならばそれは不貞寝のようなものだ。だが鵺の眠りは他の者とは違う。
「夢現に……家族の輪……家族寄り沿う木は……夢の中……」
最近思い出した、遠い昔に母から教えてもらったおまじないの言葉

を呟いて寝床に沈む。
意味は知らないが、何となくそれを唱えれば心が落ち着くような気がするのだ。
『鵺、おやすみなさい。また夢で……』
そうしてグルグルと渦巻く鬱屈とした気分を心の中に感じながら、鵺は夢の中に帰っていった。

橋の上の戦い

一度目の襲撃から一週間が経った。
彼らの任務は変わらず、タズナを殺し橋作りを頓挫させること。
だが再不斬や鵺の心中には、それ以上にやらねばならないことがある。
それ即ち、散々コケにされたあの木ノ葉の忍を殺すこと。一度目こそ再不斬はカカシに翻弄され、鵺も第七班の下忍達の思わぬ善戦でクリスタを落とされたが、二度目はそうもいかない。
再不斬は白に写輪眼の対策法を練らせ、鵺はいつも以上に夢の中に篭ることで強力な末っ子の創作に励んだ。
結果カカシに対する戦法も新たな家族も完成し、準備は万端と言える状態になった。
そして何よりも、今回は一切の慢心も油断も無い。
初めから三人全員で戦闘に入り、そして勝利する。あのカカシでも、再不斬一人に子供たちを守りながら戦うのは苦戦した。
それなのにも関わらず、今度は三人同時に相手をせねばならないのだ。到底下忍程度には白と鵺の相手にならないと考えているので、必然的に数的不利に陥らせられることになる。
計画では再不斬がカカシを、白がサスケを、鵺がナルトの相手をすることになる。サクラと暗殺対象であるタズナは、大した戦力ではないので考慮しなくていい。ことが終わった後で、じっくり料理してやればいい話だ。
「クク……たった一週間。どれだけ修行したところで、無駄だ。俺の白には勝てまいよ……」
「鵺もいるよ！」
「フッ……そうだな……」
油断は無いが、確かな自信を持って、三人はアジトを去った。
最後の戦いの場、あの橋の上を目指して。

◇

そこには一人足りないが木ノ葉の忍と暗殺対象がいた。
どうやら向こうも鵺たちの登場を予期していたらしく、慌てた様子も無い。寧ろ、闘気に満ち溢れているようだった。
まずは再不斬の霧隠れの術と水分身がカカシ達を取り囲む。十分の一程度の力しかないが、それでも十分威圧になるだろう。特に、再不斬の力量と恐ろしさを叩きこまれた下忍共には。
そしてその予想は正しいように再不斬は見た。黒髪の下忍が手を震わせているのだ。
「ククク……またそんなガキを連れて……また震えているじゃないか、可哀想に」
嘲笑交じりに再不斬が言う。だが次の瞬間にはその笑いは驚きに変わることになった。
「武者震いだよ」
「やれ、サスケ」
瞬間、サスケと再不斬の水分身がぶつかる。そしてその戦いが終わったのは一瞬だった。
この一週間で高いレベルでチャクラコントロールを学び、一段も二段も成長したサスケの前に水分身では物の数にならなかったのだ。
「ホ――、水分身を見切ったか。あのガキかなり成長したな」
「そうですね、再不斬さん」
と、そこに再不斬と白が姿を現す。鵺は霧に乗じて潜伏中だ。
彼女は心の中であの金髪のヤツがいないことにムッとしているが、それならばそれでやることはある。
クリスタの腕を破壊した、あの女を始末するのだ。
白には正当性無く殺すのは良くないことだと教えられたが、これは仕事の邪魔を排除しているだけなのである。十分正当性はあると考える。
なので彼女が止まることは、無い。
「だが、先手は打った。行け！」
再不斬のコールに合わせて、白がサスケに肉薄する。
それと同時に鵺はクリスタを呼び出し、サクラに攻撃を開始させ

た。
「クリスタ！」
「これは、あの蟹?!」
唐突に正面の霧が割れて、非常に見覚えのある鋭い爪がサクラを襲う。それに第七班は驚愕の声を上げた。
それも鵺の姿が無かったからかカカシも警戒していたが、まさか一度倒した口寄せがこんなにも早くに再び現れると思っていなかったからだ。
「どーも普通の口寄せとは違うみたいだね」
瞬時にサクラとタズナを庇い、迫り来る爪を防いだカカシは霧の中を睨みつけた。
サスケと白の戦いも気になるが、アレが来るまで気は一切抜けない。何せ再不斬と同時に相手取らなければならない鵺は、国家指名手配犯なのだから。
「邪魔しないで！」
何処からか幼い少女の声が響く。そしてそれと同時に、前回とは比べ物にならない程の手数で攻めが始まった。
無論写輪眼無しでも見切れるが、視界の利き辛い霧の中で守りながらという枷が足を引く。
（まだか……！）
カカシは心中で呻く。そしてその猛攻が一瞬止み、狙いをサクラに集中させた。どうやら弱い方を先にやろうという魂胆だとカカシは見抜く。
だが位置が悪い。巻き込まない様に少しずつ、サクラ達との距離を離さざるを得なかったのが効いている。
「おっと、カカシ。俺を無視するなよ」
と、そこで再不斬が参戦してきた。実に嫌なタイミングだ。サクラを庇いに行けない。
「サクラ！」
「やって！　クリスタ！」
重い身体とは言え、甲殻類の機動力は案外侮れない。

そしてその硬い殻を最大限に活用した、重撃もまた同様に。
「ッ！」
上忍や中忍……もしくはナルトやサスケなら見切れた。だがその身体能力は下忍の域を出ないサクラに、タズナを守りながらの防衛戦は荷が重い。
そして何よりもクナイ程度では、クリスタの爪と対峙するにはあまりにも得物差が開き過ぎている。
万事休す。
と、その時だった。
「牙通牙!!」
霧の中からさらに何者かが現れ、激しい回転を以てクリスタの爪を弾き返した。
損傷まではしていないものの、大きく体勢を崩したクリスタは新手が現れたと見て一度霧の中に潜る。
無論、鵺の保護に回る為だ。
だがこの霧の中でも、透視と鋭い嗅覚から逃れる術はない。
「間一髪だったな、紅」
「ええ、待たせちゃったわね。カカシ」
新手。そう、新手だ。
鵺と言う国家指名手配犯に対するカウンター。再不斬や白だけなら第七班でも対処が出来るとカカシは想定しているが、もう一人強敵が加わると話が変わって来る。
故にカカシはこの一週間の間で、里に援軍を要請したのだ。
その際Cランクと偽ったBランク任務だと言う旨は報告されたが、忍者は金だけではなく仁義で動くものだ。
勿論タズナの所業は褒められたものではないが、事情を聞けば情状酌量の余地ありと三代目火影は見た。
だが中忍上忍を持て余しているわけでもなく、また既に上忍の中でも一等優秀なカカシ率いる第七班がいるのだ。
ならば同期の忍者を送った方が、連携もとりやすいだろうと考えた。

そこで派遣されたのが――――――。
「この子は私たちに任せて」
紅率いる第八班の面々である。

故に開錠血

各地で戦闘が始まる。
白がサスケを、再不斬がカカシを……そして鵺が木ノ葉第八班を。
それぞれ相手取るに十分な力量であり、また同時に互いを援護できない程度には余裕がない。
唯一白だけがその力量差から他にも目を向けられていたが、いつの間にかナルトが参戦してからその余裕も無くなる。
鵺は再不斬が残した霧の中で隠れながら、クリスタに攻撃指令を出す。
だがそれは何故か事前に察知され、霧の中ですらまともに捉えられない。霧の隠蔽力が足りないのかと幻来を出しても、やはりその結果は変わらなかった。
『鵺、奴らどうやら見えているようです』
普段は寡黙な幻来が鵺に言う。彼女の術は対象が動くほど効果が薄れるが、それでもこの蔓延する霧の中であれば十分すぎる程効果を発揮するはずだ。
それなのにも関わらず、こうも攻撃を避けられるのは何らかのカラクリがあるに違いなかった。
そしてそれは間違いではなく、寧ろほぼ正解だ。
「キバ、ヒナタ。常に相手の位置を共有するのよ」
その言葉通り犬塚家のキバがその嗅覚で、そして日向の血を受け継ぐヒナタが白眼で霧の中にあるチャクラを監視している。
実は鵺の情報は、その殆どが目視困難な攻撃を操る口寄せ獣を操る……と言うものばかりだ。彼女の必勝パターンはその実、有用であるばかりに情報が出回りやすいと言う欠点がある。
それを加味した三代目火影は、感知能力に優れた第八班を寄こしたのだ。
「行け、奇壊蟲」
そして感知で位置を探り当てれば、次は油女シノの操る蟲の出番だ。

未だ未熟で大層な秘術は扱えないが、奇壊蟲の持つチャクラの吸収能力は馬鹿にならない。纏わり付かれれば、相当なチャクラの消費を強いられるのだ。
忍者はチャクラを失えば、行動が不可能になる程の疲労を覚える。故にチャクラを奪う能力は無力化に適していると言える。
「チャクラを失えば奴の戦闘行為は不可能になる。何故なら口寄せの術の維持にはそれなりのチャクラ消費が伴うからだ」
口寄せさえ封じてしまえば、後はヒナタの柔拳なりキバの人獣忍法でどうにでもなる。
そして鵺には口寄せ以外の術を使う情報も、今現在その素振りも見せない。
どの様な忍者が相手でも、備えと確かな戦術を用意すれば勝てる……と紅は考えており、またそれを下忍たちに教えているのだ。

一方で鵺は、新手の情報など何も知らない。
精々が感知能力があるっぽいことと、夜月に与えた術と同系統の技を操る男と犬がいることくらいだ。
『鵺……』
「分かってる」
だが鵺のやることに変わりはない。仕事の邪魔をする奴は……幸せの邪魔をする奴は、全部殺す。それだけだ。
決意を新たに、攻めに回っていたクリスタを自分の傍に寄せて待機させる。ここからの攻撃役は別のモノがやるのだ。
「口寄せの術」
ボンッと煙と共に夜月が現れる。彼ならばこの濃い霧の中でも正しく相手の位置を把握できるだろう。さらにその戦闘能力は、相手の攪乱や翻弄にも十分力を発揮する。
そして――――――。
「開錠血……」
鵺は懐から血の入った小瓶を取り出す。
それこそずっと温めていた、禁術によって作られたチャクラを練り

込んだ鵺の血液。
本来ならば鵺のチャクラ量では呼び出せない様な、そんな強力な口寄せ獣を顕現させるための扉を開く鍵――
故に開錠血。
「口寄せの術！　来て！　シーツー！」
「オォォォォアアァォアァァアアア!!!!!」
その虫の様な三対の翼が周囲の霧を吹き飛ばし、太く硬い四対の節足が地面を踏みしめる。
長い尾は先端が槍の様に鋭く付け根に向けて丸太の様な太さを帯び、その顔は虫と竜を混ぜた様な異質な造形をしていた。
「なん……だよこりゃ……」
キバが慄く声を上げる。ヒナタやシノは、最早声も出せない程驚いていた。
紅はその経験値故か酷く驚くことこそないが、報告にあった蟹よりもよほど強力そうな口寄せが現れたことで、作戦の修正を脳内で巡らせていた。
「シノ、あれが何か分かる？」
「……分からない。何故ならあの様な蟲は見たことも聞いたことも無いからだ」
蟲に精通しているはずの油女一族の者すら聞いたことも無いとなると、全くその性質は不明と言える。
それもそのはずだ。シーツーと呼ばれる蟲竜は、鵺がデイダラの『C２ドラゴン』から着想を得て、一から生み出された架空の生物である。
まさにこの世に一体しかいない、鵺の暴力装置だ。
「くっ……ヒナタ！　本体はどう?!」
「無理です！　さっきの蟹があの女の子を守ってます！」
明らかに強そうな口寄せが相手でも術者を倒せば消えるはずだと考えた紅だが、それはクリスタが許さない。
そして……
「何だこの忍犬は?!」

キバが呻く。
この班の下忍の中では最も優れた戦闘能力を持つ彼は今、夜月に絡まれて行動が出来ない。
夜月も夜月で自らの源流となったモノと分かるのか、自分と同じような高い個人戦闘力を危惧して真っ先に潰しにかかったのだ。
「紅先生！　俺はコイツをやる！」
キバの相棒忍犬である赤丸より、二回りどころか三回りほどデカい狼を相手に彼は宣言した。
餅は餅屋、犬は犬塚家だと考えたのだろう。そしてそれは実際に正しく、この場で一番忍犬に詳しい彼が夜月を相手にするのが最適解だった。
「分かったわ。なら……私たちはあの怪物を倒すわよ！」
これ以上何を口寄せしてくるかは分からないが、間違いなくあれは彼女の切り札だろうと紅は考える。
ならばあれさえ倒してしまえば、鵺の戦力は大幅に削られることになる。それが第八班の唯一の勝ち目だ。
『鵺、シーツーに術はまだ与えられていません……そう油断はしないでくださいね』
クリスタの言葉に鵺は頷き、第八班の面々を睨みつける。
「さぁ行って！　シーツー！」
鵺の猛攻が、始まる。

幸せの手掛かり

竜の重撃と蟲の多彩さが組み合わさったシーツーの攻撃は、まさしく嵐にも等しい激しさだ。

通常の爬虫類では再現できない関節の切り替えしや、慣性を打ち消す虫翅による立体軌道は日向一族の優れた眼が無ければあっという間に戦線は崩壊していただろう。

無論、そのままではジリ貧であり第八班が崩れるのは時間の問題なのだが。

『シーツーは十分戦えていますね、鵺』

「うん、期待以上だよ。術も与えてない純粋な肉体性能でも圧倒出来てるね」

クリスタが周囲を飛ぶシノの蟲を落としながら、戦いの推移を見守る。そして夜月の方へ眼を向けても、優勢なのは変わらなかった。

どうやらキバも巨躯の狼である夜月の通牙に翻弄されており、紅たちへの援護は不可能と見える。

『鵺、これなら奴らを始末するのも時間の問題ですね』

「んー、さっさとやっちゃって、再不斬おじさん達のお手伝いしたいんだけどなぁ」

圧倒はしている。だが木ノ葉の忍はそう甘くない。

それは特に未熟な下忍ではなく……それらを率いている上忍は！

「幻術・薄幸酔夢！」

『鵺!!』

シーツーの野太い声と同時に紅のチャクラが揺らぎ、シーツーが霧を晴らしたが故に鵺に射線が通り術式が発動する。瞬間、ビクンと鵺の身体が揺らぎ目が虚ろに霞む。明らかに意識が混濁しているのが見て取れる。

あくまでクリスタは物理攻撃は身を盾にしてでも防げるが、幻術などのチャクラに働きかける術は防げないのだ。

そしてそんな術者の異常に、一瞬口寄せ獣たちの動きが止まった。

鵺が見ている光景は――――――

「父さん……？　母さん……？」

夢の中の様な慣れ親しんだ浮遊感の中、既に死んだはずの両親が鵺を抱きしめる。

その懐かしい温もりに、鵺は涙を我慢出来なかった。

「私ね……ッずっと怖くて……ッ！　頑張って幸せになろうって……ッ」

「あぁ……分かってるよ鵺。すまなかっ――――――」

『鵺！　大丈夫ですか?!』

幻術が内から破られる。全員が今知ったことだが、どうやら鵺と同質のチャクラを持つ夢現獣の術の口寄せ獣は鵺のチャクラの乱れを整えられるらしい。

それは正しく、絆を結んだ尾獣と人柱力に見られる現象と同様であった。

「嘘でしょ?!　こんなに早く破られるなんて！」

一方で紅は木ノ葉の忍でも、随一の幻術の腕を持つ忍である。

それなのにも関わらず、掛かってから解除されるまで攻撃の一手すら与えられなかった。これには流石に驚愕を隠せない。

だが紅視点では、鵺に与えた幻術のダメージはそれなりに高いと見えた。

何せ解除されてからの彼女はどこかぼんやりとしており、心なしか口寄せ獣たちの動きも鈍いように感じるのだから。

「チャンスよ！」

紅のコールにより、ヒナタとシノが駆け鵺の捕縛に動く。

得てして口寄せ獣と言うのは、術者のコンディションに性能を引っ張られることが多く、多大なダメージを負った術者が耐えられずに口寄せ解除をしてしまうのはよくあることだ。

そしてそれを想起した紅は、またとないチャンスだと見た。

だが、その判断は誤りだったと言う他ない。

「……て」

『鵺……？』
「あの女を捕まえて!!」
涙を流しながら、虚ろげだった目をギラつかせて鵺が絶叫する。しかしその指示は殺してではなく捕まえて、だった。
『他は殺さなくてもいいのですか？』
「そんなのどうでもいいから！」
『……分かりました。シーツー、夜月……敵の無力化をお願いします』
実際キバとヒナタとシノには大した興味も無い。それ以上にあの光景を生み出したモノに強い興味があったのだ。
そして口寄せ獣たちは彼女の家族であると同時に手足である。その指示に従う他は無い。彼らにとっても、鵺を傷付けた者以外はどうでも良い存在なのだから。
故にクリスタは夜月とシーツーに、無駄な諍いを生まない為に無力化を指示したのだ。
そして突然に鈍っていたシーツーの動きが加速し、攻撃を仕掛けていたヒナタとシノを逆に叩き伏せる。
苦し紛れの起爆札を付けたクナイでも、彼の甲殻の前には効果が薄かった。
そしてそのまま足を掛けて乗り、その重量に二人は呻くことしか出来ず、身動きを完全に封じられてしまった。
「ヒナタ！　シノ！　キバ！」
そして夜月もまた、遂にキバの動きを捉え通牙を直撃させることに成功。
本来なら人体をバラバラにすることも可能だったが、家族の中でも発言力の強いクリスタからの指示で無力化に抑える。それでも、かなりの負傷を強いることになるのだが。
「コイツら殺されたくなかったら、大人しくして」
「……ッ！」
鵺が少々危うい光を湛えた眼で紅を射抜く。
忍者としては時に仲間を、部下を切り捨てて任務に当たらねばならぬ時があるが、取り分け木ノ葉は甘いことで有名だ。

そしてそれが、まだ忍者になったばかりの子供を抱える身であれば尚更である。
「……何が目的かしら」
「さっき私に何をし――――――『鵺』何？」
術の仕組みを聞き出してしまえば、それを探るのは容易だと思い尋ねようとしたところクリスタに横やりを入れられた。
疑問に思った鵺はクリスタの見つめる方向を見ると、そこには……
雷切を構えたカカシが、猛然と再不斬に迫っているところだった。

素直だからこそ

「再不斬おじさん!!」

片や満身創痍の再不斬、そしてそれに迫り止めを刺そうとしているカカシ。

その雷遁のチャクラが迸る手刀は、見るからに人を貫くに余りある威力を醸し出していた。

そんな極限状態の中、白がそれを庇おうと走る姿も朧気に見える。

あぁ、また幸せが壊れてしまう。

鵺の心の中はそれでいっぱいになった。もしこの場に紅班以外の誰もがいなければ、迷わず下忍たちを盾にして術の開示を迫っていただろう。

だがそれ以上に再不斬や白という、鵺にとって家族にも等しくなってしまった者がいなくなる方が、よっぽど重大なことだった。

「夜月!」

呼びかけはそれだけでいい。

キバを倒し、押さえつけるなりして捕縛しようとしていた夜月は、その声だけで白とカカシの間に飛びついた。

無論これを可能にしたのは運が良かったからに他ならない。

夜月が庇える距離で、庇える速度を持ち、またクリスタの呼びかけに鵺がちゃんと反応を示した故の。

「何?!」

結果としてカカシの雷切は夜月に妨害されて威力を落とし、白に重傷を与えるには至ったが致命傷にはならなかった。

それを成した夜月は雷切に胴を削られており、口寄せが解除される。が、十分に仕事を果たしたと言っていいだろう。

鵺も夜月が傷付いたことは腹立たしいが、自分がやらせたことであるためその怒りの程度はまだ低い。

それよりも早く白に治療を施したかった。もはや彼は戦闘行為など不可能なほど傷付いているのだから。

「白おにいちゃん……」

「ゴフッ……ぬ、えちゃん……」
クリスタの庇護下にいなければならないことも忘れて、鵺は一目散に白に寄り添った。無論クリスタは無言で着いてきており、カカシが下手に動くのを牽制している。
と言っても、長時間に渡る写輪眼の使用と雷切を使ったことによる疲労で、早々S級犯罪者に対して行動も起こせないのだが。
一方で白の方はそれなりに重傷だ。威力が減衰し狙いもズレた雷切は、それでも彼の脇腹を抉り決して少なくない出血を強いているのだから。
再不斬も戦闘が出来ない程ではないがかなりの傷を負っており、特に忍犬に潰された右腕では満足に首切り包丁を扱えないだろう。
場に静寂が訪れる。
クリスタに睨まれ、下手に動けないカカシ。重傷を負った白とそれに寄り添う鵺。まだ戦えるが満身創痍かつ、白の重傷と鵺の乱入に少なからず衝撃を受けている再不斬。
そして……。
「どういう状況だってばよ、これ」
倒れ伏した八班と動けぬ紅、そこに現れたナルトだ。
そしてさらに、その場に現れた者たちもいた。
「おーおー、こりゃまた派手にやられて」
ガトー率いるチンピラ集団だ。
そしてガトーは手品のタネを披露するかのように、とある計画を話し始める。
最初から金など払うつもりはなかったこと、そしていい感じに消耗しあった忍共をタズナ諸共ここで始末することを。
「だ、めです。鵺ちゃん……」
海月を出して白を治療していた鵺は、ガトーに意識を向けていたカカシやナルトにクリスタをけしかけようとするが、それは止められてしまった。
信じられないモノを見る様な目で白を見ると、彼は嗜める様にこう言った。

もう戦う理由は無い、と。
確かに先程まで戦っていたのは、多分に私情を挟むもののあくまで仕事の邪魔を排除するという『正当性』があった。
以前の鵺ならばそれでもお構いなしに、カカシやナルトをこの隙に殺そうとしていただろうが、他ならぬ白の言葉には従わざるを得なかった。
「じゃあ、あれも……？」
シーツーが抑えている八班の方を指差し、震える声で伺う。
白はその指に従い視線をやり、鵺がちゃんと仕事を全うしたことに微笑みながら頷いた。
彼は元々忍者が持つ、感情を捨てなければならないという業に悩んでいた青年だ。奪わなくていい命は奪いたくなかった。
「……どうしても？」
「……ええ」
そこまで言われれば、鵺は引かざるを得ないではないか。
最早大人たちのやり取りなど微塵も聞こえない。何故なら鵺の心の内は今、いっぱいいっぱいなのだから。
クリスタを破壊した金髪のヤツも、木ノ葉の怖い奴も殺せず。あげくあんな幸せな光景を見せられても、それを探ることすら許されず。知らぬ間にその正当性すら無くなった。
そして当初の目的であった金稼ぎすら、白紙になった。
もう、我慢の限界だ。
確かに鵺は、両親がいた頃は素直で良い子だった。そしてその素直さは今も無くなっていない。
だが明確に、旅の中でいつしか我慢というものを失った。一時は白のおかげでそれも取り戻していたが、それももう……。
「行こ……シーツー」
言わばそれは癇癪だ。
だが今、鵺にとってガトーの言い分など、そして大人たちの都合など一切合切どうでも良かった。
彼女は治療を終えた白の傍を離れて、第八班の拘束を止めたシー

ツーに飛び乗った。白の制止も無視して。
クリスタは口寄せを解除し、海月はいつもながらにローブの中で背中に張り付かせた。
そしてシーツーが飛び立つ。彼らが目指す場所は……。

◇

阿鼻叫喚が、その建物内を支配する。
そこには血と死の臭いが蔓延していた。
そんな嵐に見舞われたガトーカンパニー職員は、最早怯えることしか出来ない。
「始めから、こうすればよかった」
破壊された金庫の前で鵺は呟く。
そのすぐ後ろでクリスタが職員を真っ二つにし、シーツーが強引に入り込んだ玄関で逃亡者を食い荒らす。
原点回帰だ。幸せが壊される前に相手を壊せばいい。どうでも良いモノがいくら壊れても、全く無関心でいればいい。それが己の心の平穏を外敵から守る唯一の手段なのだから。
金庫の鉄板に映る鵺の表情は、心なしか明るかった。

血を巡る少女編
過激な情報収集

水の国には、大きな街は少ないがその代わりに小さく纏まった村が数多く点在する。
彼らは寒さと物資が厳しい中、こじんまりと生活を送っている者が多く、その実態は元忍者の末裔や農民が殆どだ。
そして今、とある一つの村が未曽有の窮地に追いやられていた。
「バ、バケモノ……ギャッ！」
ぷつりぷつりと、蟲と爬虫類を混ぜた様な奇怪な怪物が村人を喰らう。
彼は最近訪れた旅人の少女に、出て行けと罵声を浴びせた老人だった。
そして次の瞬間にはもう一人、丸々と育った大熊が腕の一振りで頭蓋を砕く。
この男は閉鎖的な村の慣習に従い、旅人の少女を追いだそうと動いた一人だった。
彼らの平穏な生活は、たった一人の旅人により破壊され、今やその少女の前で震えるばかりである。
逃げ出そうにも、途端に蟲竜が猛スピードで動き、捕らえられるのだから逃げるに逃げられない。
「ねぇもう一度聞くけど、この辺りに古い忍者の一族の遺跡とか……無い？」
「し、知らない！　そんなの聞いたことも無い！」
「んー、そっかぁ……」
尻餅をついた状態で、目の前に立つ少女を見る男はこの村の村長である。
だが村長と言ってもただの村の纏め役に過ぎず、一介の農民である彼にはこの暴風に抗うことは不可能だ。
そんな男の返答に、残念そうな声を出す少女……鵺は途端に興味が

失せた様に男から視線を外した。
実際に、彼にはもう興味など微塵もなかったのだが。
「またハズレかぁ」
『仕方ないのう。ただでさえ寄木が栄えていたのは随分と古い話の様だからな』
周囲の警戒と遺物のチャクラを探れるかと期待していた鹿尊が、鵺に答える。
後ろではシーツーと茶鬼丸が逃げ出そうとしている者を殺し、捕らえ集めている者達に睨みを利かせているが、それには大した関心を向けていない。
もう三つ目だ。
鵺が水の国に来てから、寄木一族の遺跡を探して襲撃した村は。
彼女の持つ情報は、寄木一族は水の国を源流とした一族であることしか無い。そのため閉鎖的なお国柄の中で情報を得るには、これが最も手っ取り早いと考えたのだ。
往々にして、こう言った古い村には古い情報も残っていると鹿尊が言うのだから。
だがその期待も中々実ることはない。
二つ目の村では古い忍の一族の情報を得ることが出来たが、その遺跡に行ってみれば寄木一族のモノではなかった。
確かに忘れ去られた秘伝忍術の様なモノは見つけ、鹿尊の解析の結果シーツーに相応しい術を与えることに成功はした。だが本当に欲しいモノは寄木一族の秘伝なのだから、残念と言えば残念だった。
そしてシーツーに秘伝忍術を与えられたことは良かったが、やはりと言うか予想以上にコストが増えてしまったのは明確なデメリットと言えるだろう。
具体的に言えば、開錠血の小瓶を二本消費しなくてはならない程に。
『ではさっさと――――――ん？』
「どうしたの？　鹿尊」
下手に騒がれても厄介なため、残る村人を始末してから次の村へ行

こうと促しかけた鹿尊が止まった。
淡く角が光っている辺り、何かを感知した様だった。
『いや、どうやら一人見逃していたらしい。弱いがチャクラを感知した、あの家だ』
鹿尊の見る先には、他の家から離れた場所に建つ古い家があった。どうやらあそこに、鵺の魔の手から逃れた者がいるらしい。
そこで彼女はもう見逃しはないだろうと鹿尊を口寄せ解除し、新たに夜月を口寄せする。
「あそこに一人いるらしい、行こ？」
『確かに匂いを感じる。承知した』
鵺はシーツーと茶鬼丸にこの場を任せ、夜月に跨る。別段乗る必要はないのだが、小柄とは言え鵺の身長よりも体高の高い夜月の背に乗ると、グンと視線が高くなり楽しいと最近彼女は気付いたのだ。
そしてそんな彼女の様子に、恐怖に支配された村人とは逆に嬉しさを覚えるのが彼ら鵺の家族だった。
体長がある分、一歩一歩も大きい。その逃れ者がいる家にはすぐに着いた。
そこで鵺は夜月から下りて、コンコンと木の扉をノックする。中に人がいることは分かっているので、返事が無ければ蹴破ろうとでも思っていたのだが、意外にも返答がすぐにやって来た。
「はぁい」
その声はしわがれた老婆のモノだった。
鵺が有無を言わさずに開けてと言うと、少し経った後にカラカラと軽い音を立てて扉が開いた。
「あらぁ、幼い旅人さん？　今日は寒いでしょうに、中に入りなぁ」
老婆はほけほけと緩い笑みを浮かべながら、腰が悪いのかそこに手をやって中に戻っていった。どうやら外の惨劇に気付いていないらしく、純粋にも歓待を申し出たのだ。
そんな緩くも暖かい、害意が一切感じられない接し方をされたからか、鵺の無意識の過激さが鳴りを潜める。
そして一度夜月の方を見て何かを考え、その場に待機を命じると彼

女は老婆に続く様に中に入って行ってしまった。
『鵺！　何と不用心な！』
夜月が素っ頓狂な声を上げるが、鵺は大丈夫と言い黙殺する。彼女はこの旅の中でいつしか、悪感情にも……そして逆に自分に対する好意にも敏感になったのだ。
それ故に前者であればすぐに手が出て、後者であればすぐに無意識に距離感を詰めてしまう様にもなった。
それが良いことなのか悪いことなのか、家族たちには判断が付かないが、傷付けられそうなら殺せばいいと結論を出したためさほど問題ではない。
「はい、温かいお茶よ。ちょっと苦いけど身体が温まるのよぉ」
鵺が中に入ると、囲炉裏の傍にある座布団に案内され、問答無用で座らされた。
どうやら緩そうな老婆だが、強引なところもあるようだった。
そうして差し出された濃い緑のお茶は、確かに子供の鵺には些かキツイ苦さだった。だが元より良い子ちゃんだった彼女は、出されたモノを残したりはしない。
「苦い……」
けれど温かい。鵺は気付いていなかったが、随分と身体が冷えていたらしく何らかの生薬の効果か内から熱が湧き上がる。
だがそれは決して悪いモノではなく、寧ろ心地良いモノだった。
「それで、どうしてこんな何も無い村に？」
老婆が尋ねる。それに鵺は、穏やかな気持ちの中で答えた。
「あのね、おばあちゃん」

古き血の跡

「古い話だけどねぇ、鵺ちゃん。私のお爺様の盟友様が、色んな獣を操ってこの村を助けてくれたんさ」
そうして老婆が語った話は、鵺にとっても衝撃的かつ興味深いモノだった。
彼女、シミエの祖父は忍者の隠れ里が生まれる前から忍者として生きていた人物であり、その晩年は盟友である『口寄せを扱う一族』の長と手を取り合ってこの村を作ったらしい。
だがいつしか激化する戦国の中で、その一族は壊滅……そして散り散りになってしまった。
しかし長と少数の老人だけは、ここを最後の寄り木として残ったそうだ。もうその者らが亡くなって大分と久しいが、彼らが残した旧屋敷は村のはずれの山奥に眠っているらしい。

「夢現に家族の輪、家族寄り沿う木は夢の中……。しかして我ら血の先に微睡わん、獣と共に微睡わん」
「それって……？」
前半部分を鵺は知っている。最近思い出した、母から教えてもらったおまじないだ。
だがシミエはその先を歌った。寄木に伝わるおまじないの、その元の形を。そしてそれには、確かな意味合いが込められていると、そう思わずにはいられなかった。
「あぁ、お爺様から教えてもらった言葉でね。いつか寄り木に訪れた子に、伝えてあげなさいって」
ぼんやりとした目が鵺を収める。シミエは遠い昔を思い出す様に、そしてまるで夢に揺蕩っているかの様なボケ具合で語った。
「それにしても、不思議な縁があるのねぇ……まさか盟友様の子孫が帰って来るなんて」
「私も、ココがそんな場所だったなんて思わなかった」
そうしてずっとニコニコと笑みを湛えている彼女に別れを告げて、

鵺はシミエの家を後にした。
昔話自体には大した関心は向かなかったが、この近くに遺跡があることを知れたのは僥倖だった。
もし鹿尊がシミエに気付かなければ、確実にこの情報を見落としていた。そして最悪、寄木の遺跡には二度と辿り着かないこともありえただろう。
「ありがとね、シミエおばあちゃん」
老婆の身体を温める様に、身長はまるで足らないがギュッと抱き締めてから鵺は村の中央へ戻った。
そこには先ほどまでとは少し人数が減った、村の人間たちが固まっており、戻って来た鵺と夜月に悲鳴を漏らす人もいる。
だがそれらには一切目を向けず、シーツーの足元で報告を始めた。
まるで生殺与奪の権を奪っている村人など、微塵も興味が無いかのように。
「お待たせ、寄木の遺跡の情報あったよ！」
『それは良かった。だがあまりに遅いのだから、待ちくたびれて幾人か食ってしまってぞ』
「えへへ、ごめんね」
そう言って鵺は宥める様にシーツーの六本ある足の内一本を撫でる。甲虫の様な造形の足は、角ばっていてかつ装甲は滑らかだ。そしてとても力強さを感じられる。
そんな愛撫を受けたシーツーは、満足気に呼気を漏らした。
勿論シーツーは待たされたことに本気で怒ってなど、それどころか微塵も悪感情を抱いてはいない。これはただのスキンシップであった。
ただ近くで見ている村人からしたら、かなり恐ろしい光景であることには間違いないだろうが。
あと人を食ったのも本当だ。
「じゃ、行こっか」
相変わらず自らが虐げた村人たちには一瞥もくれず、シーツーに飛び乗る。

遺跡がこの近くにあるのは分かったが、詳しい位置までは分からないので上空から探すことにしたのだ。
そして夜月とクリスタは共にシーツーには乗れないので、ここで一度夢へ帰ることになる。
そうして鵺を乗せたシーツーは、鈍く高い翅音を出して飛び上がる。
その口や足、そして槍の穂先の様な尻尾から血が垂れ、宙を舞ったそれを村人たちは呆然と見送るしかない。
嵐は去った。決して消えぬ傷を、これでもかと刻みつけて。
鵺たちが完全に見えなくなってからも、生活の続きを行おうと心身ともに動ける者は、誰一人いなかった……。

◇

ソコは、意外なほど容易に見つかった。
だが話通り余程古いのか、人が住んでいたであろう屋敷は朽ちて崩壊してしまっていた。ここから何かを見つけ出すのならば、本腰を入れて瓦礫撤去から始めねばならないだろう。
まぁ土に埋まっているでも無く、瓦礫自体は木造素材ばかりなので、煉瓦や石材等に比べれば幾段もマシだが。
「よーし、口寄せの術！」
本当なら口寄せ時の消費が多いため、シーツーは出しっぱなしである方がいい。だがしかし、それよりも秘伝を発掘する方を優先する。
鵺がシーツーを解除して呼び出したのは、茶鬼丸とクリスタ、そしてドリュウだ。
この三体は今まで鵺の旅において、その肉体を駆使して戦闘や緊急離脱に従事していたが、実はそれは本来の用途ではないのだ。
寧ろ両親が殺される以前に創られた彼らは、もっぱら人間では難しい重労働を代行するために存在していたのだ。
言うなれば、今から行う作業こそ彼らの本来の役割ということだ。
「じゃあみんな、よろしくね」
鵺のお願いに合わせて、三体は動き始めた。

クリスタは林業重機よろしく柱の残骸や大きな瓦礫を中心に撤去し、茶鬼丸は崩れた屋根で出来た屑山を押しのける。
そしてドリュウは茶鬼丸を手伝いつつ、埋もれた遺物の掘り出しを担当していた。
何せ瓦礫やホコリと土の混合物が多いのだ。彼の活躍場所は多分にある。
無論鵺も、家族に任せっぱなしではない。彼らの様にマンパワーは無いが、チャクラコントロールを学んでから拙いながらもチャクラの身体力強化は可能としている。
故に危ないですよとクリスタから苦言を呈されても、小さな体でちょこちょこと遺物の発掘に協力しているのだ。
そして、誰も知らぬことだが奇しくも、以前はこの屋敷……寄木邸の当主の間だった場所を鵺が掘り当てた。
「これは……？」
鵺は発見したそれを手に取る。随分と古ぼけて朽ちかけているが、昔ならば相当上質だったと窺える桐箱だ。
念のため茶鬼丸の代わりに鹿尊を呼び出し、感知をしてもらうが特に封印術や防衛術は仕込まれていなかった。
なので安心して、その桐箱を開封する。
中には一本の巻物が封じられていた。
「『寄木当主秘伝』……」
鵺は書かれていた題名を、無意識に読み上げた。
それは間違いなく、祖先が残した大事な……幸せの道標だった。

最後の寄木

寄木一族最後の当主は、鵺の祖父のそのまた祖父……の、兄である寄木奴良（ぬら）であった。

彼は水の国にて、干柿一族や枇杷一族などの中規模勢力と鎬を削って戦っていた頃の……寄木一族の最盛期にて産まれた。

そして元本家である鬼灯一族から独立した寄木一族本家の嫡男として、当然の如く幼い頃から戦場に出ていた。

彼らの用いた戦力は、勿論『夢現獣の術』で創られた口寄せ獣たちだ。

その開祖から続く一子相伝の秘伝忍術は、戦国の世にて特異性を以て戦場を駆ける者達の翼となった。

それが上手くいっていたのは、偏に彼らの一族としての人数が要因の全てだった。

一人につき少なくとも五種の口寄せがいたため、取れる戦略の幅が広かったのだ。それを気に入った時の水の大名が、彼らを火の国へ送り込んだこともあるほどに。

しかしある時その有用性が崩れた。

彼らの開祖は元々鬼灯一族の秘伝である『水化の術』が扱えない、そして忍者としての才能も低いと半ば切り捨てられていた者だった。

そしてその様に虐げられていたからこそ、持ち前の口寄せの術への適性と環境に由来する自閉性を以て『夢現獣の術』を完成させられたのだ。

となると当然彼から派生した一族は、たまに鬼灯一族の術を扱える者が現れることはあるが……その殆どが口寄せの術にのみ傾倒したのだ。否、せざるを得なかった。それしか才能が無いのだから。

だが時に口寄せ獣に術を与えると言うのも、一見戦略性の幅を広げているように見えるが、基本的に一種類しか与えられない。そうなると多様な術を扱う忍者の方が、余程戦略兵器としての価値はあるだろう。

そんな欠点は、悲しくも当時大きな勢力だった鬼灯一族によって突

かれ、彼らは壊滅の末路を辿ることとなった。
そして大半の一族の者を犠牲に、当時まだ元服すらしていなかった奴良は少ない仲間と弟と共に辺境の小さな村へ逃げた。
一族にとって命より重い『寄木当主秘伝』を持って。
そしてそこで彼は、自らを寄木の当主だと名乗った。
元より父から譲り受けるモノであったが、彼は犠牲になっていった一族の者たちへの弔いとして、あえて大きく宣言したのだ。
むろんそれを聞き届けたのは村人たちと仲間たちだけであったが、それだけでも少年だった奴良には慰めになった。
それからは村に来る野盗を撃退したり、口寄せ獣を用いて生活の手助けなどを行った。
最初はこちらを警戒していた村人たちも、徐々に心を通わせ打ち解けていった。その頃、晩年まで親友とも呼べるようになる友人も出来た。これがシミエの祖父だった。
生活が安定するに従い、奴良は結婚し、新たな寄木の枝が生まれた。
そんな新たな命を前に、彼はここでもう一度一族を立て直し再起してみせると決意した。
他の仲間たちも同じことを思っていたのかそうでないのかは分からないが、当主に続く様に子供に恵まれた。
しかし、彼らの想いは息子たちに届くことはなかった。
奴良の息子である魎(リョウ)はある日突然、同世代の寄木を連れて村を出て行ってしまったのだ。
無論、戦争に行くため……ではなく、移住するためだった。それは奇しくも、次代当主としての座を与える前日のことだった。
さらに彼は何処で知ったのか『寄木当主秘伝』の巻物の、もう一本を持ち出したのだ。
このとき彼が何を思ってその様な行動に走ったのかは、終ぞ父親世代が知ることはなかった。何せ全員が出て行ってしまったのだ。訳を聞くまでもなく。
この時共に魎と旅に出た寄木の女性と結ばれて生まれるのが、鵺の祖父に当たるのだがそれは彼らの知る由は無い。

と、そんな苦悩が……秘伝の巻物と共に瓦礫から出て来た日記巻物に書かれていた。
鵺は自分のルーツにはさして興味は無いが、この様に遠い家族の生々しい心を垣間見れるのは、不思議と温かな気持ちになった。
それは偏に彼女の持つ『家族』への偏愛故だろうか。それは彼女自身にも、詳しくは分からない。
「それにしても……」
一度読んだが、もう一度『寄木当主秘伝』を開く。
そこには間違いなく、彼女の知らない『寄木の秘伝忍術』が記されていた。
そしてもう一つ……何故か血の字で当主の名前が書かれた欄が。
鵺は考える。
今まで彼女は自らの家族……両親を含めた三人を『一族として』は見たことはなかった。それも当然だ。三人しか知らない一家を、果たして一族単位で考えることなどあるだろうか。
だが同時に彼女はこの日記を見たことで、少し考えを変える。
鵺は、きっと彼らは無念だったのだろうと思った。
家族を殺され、それに復讐する力も無く、だからこそ家族が増えるのを待ったのだ。
きっとそれが彼にとっての『幸せ』だったのだ。自分と同じ、家族こそが寄り辺だったのだと。鵺はそう解釈した。
故に鵺は……。
「私が、継ぐよ」
開錠血ではなく、普通に口寄せを行う時用の血を取り出す。そしてそれを指に付けて、欄の空きに名前を示した。
最後の寄木として、奇しくも本家筋の血を以て、正式にそれを継ぐ。
名前の欄には既に六人の名前があった。
つまり――――――
寄木一族七代目当主　寄木　鵺の誕生だ。

汝ら鵺の背に集え

秘伝の巻物をローブの内側にある細長いポケットへ仕舞う。
中に記載されていた術も、やはり寄木の秘伝だからか鵺本人が使用することも可能だという確信も得た。
鵺はいつぶりか分からぬ、満足感を覚える。
思えば火の国周辺にいた頃は上手くいかない事ばかりで、何処か苛立ちや我慢ばかりしていた気がすると鵺は思う。
だがそれも水の国に来てからは、嫌な思いをすることは少なくなった。そしてその嫌なことも、相手を殺してしまえば気にならなくなったのだから、波の国の様に我慢を重ねる必要すらなかったと言える。
そして何よりも、力が増えたことが喜ばしい。
その感覚は実に明確で、禁術を得た時と同じだけの高揚感をもたらしたのだ。
次、あの蛇男や木ノ葉の連中などの許せない相手に出会えば、必ず自分は幸せになれると、鵺は信じて疑わなかった。
口寄せ獣たちも彼女のそんな高揚感が直に伝わり、彼らも一様に喜ばしかった。
鵺の幸せは彼らの幸せ、鵺の喜びは彼らの喜びなのだから。
彼らは鵺の一部なのだから……。
「いたぞ！」
と、そこで水を差すような野太い声が空気を割いた。
何だと思い鵺が下山方面へ目を向ける。するとそこには何処かで見たことのある面を被った、八人の忍者とクリスタ程大きさを持つ蛸がいた。
彼らからは一様に怒気や敵意を感じ、明らかに鵺を敵として認識していると見える。
『敵……ですね。恐らく私たちが村を襲っていたのを追ってきたのでしょう』
冷静にクリスタが状況を判断する。どうやら彼らの耳は早いらしく、最初の村を襲ってから三日程度で鵺を補足したらしい。

『どうします？』
鹿尊と茶鬼丸は一度既に送還していた。
用事も終わったので、シーツーを出して飛ぼうかと思っていた矢先の襲撃だったのだ。
だが、実に丁度いい状況とも言えた。
「試してみよっか」
『フフ……確かに丁度いいですねぇ』
クリスタが鵺の前に出て、霧の忍八人を牽制する。
その間に、鵺は新たに手に入れた術を試そうとしているのだ。
「開錠血……は一本じゃ足りなさそうだなぁ……と言うか、どれだけ使うか分かんないから……」
鵺は懐の開錠血を詰めた小瓶を眺めて、そう呟く。
しばらくハートキートを出して補充していないので、もう手持ちが少ないのだ。何せシーツーを呼び出すコストが非常に重いので。
しかし、ならばこうだ。
「ゴフッ……！　ゲェ……」
「な、なんだ?!」
クリスタの足の隙間から見える鵺が、突然大量の血を吐き出した。
その異常事態に、霧の忍は驚く。一見チャンスの様にも見えるが、情報が無さ過ぎて動くに動けないのだ。
そして鵺から溢れ出た血は、明らかに重傷レベルに達し彼女の足元に流れる。まるで血の水溜まりに、鵺が立っているようだった。
そしてこれは全て、鵺のチャクラをふんだんに練り込んだ『開錠血』だ。
彼女の開錠血は、デイダラの粘土の様に作り分けはしていない。ただその量のみでコストを変動させるのである。
さらに言えば寄生口寄せの同期……ハートキートに寄生する口寄せ獣は鵺の契約によるものだ。そのため、彼女自身にもまた寄生させることも出来る。
故に禁術の出口と入り口のみ、自己の夢領域と言う内側から外側へ繋げることに成功したのだ。

そしてこの血の取り出し方は、身体やチャクラへの負担は大きいものの一度に大量の開錠血を貯蔵から引っ張り出すことを可能にしている！

「口寄せ……」

血に手をついて、術式を起動する。

それと同時に……九つの口寄せ印が地を走った！

「秘術・百鬼夜行の術！」

ボンッと一際大きな、口寄せの術特有の煙が爆発する。そして――

――

『『オオォォアアアアア!!!!!』』

鵺の家族、全員の雄叫びが大気に走る！

「馬鹿な！　これだけの口寄せの数を?!」

総勢十体。

これが寄木の当主にのみ許された、四つある秘術内の一つ。

己が夢に内包する魑魅魍魎を背負う『口寄せ秘術・百鬼夜行の術』だ。

今までの同時顕現は三体までという枷は弾け飛び、人数差が一気に引っくり返る。

「皆！　あいつら全員やっちゃって!!」

鵺の号令と共に、霧の忍の視界から鵺を含め口寄せ獣たちが全員消える。

と同時に、彼らを取り囲む様に水障壁が立ち昇った。

言うまでもなく、幻来の蜃気楼の術とクリスタの水障壁の術だ。

そしてこれだけに終わらない。

「く、来るぞ!!」

八人がそれぞれ別方向を警戒する。だがこの状況で、下方面への警戒を行う者はいなかった。

「足が！」

一人の忍の足首が、地中から飛び出したナニカに切り裂かれる。

そのせいで大きく姿勢を崩し、膝をついた瞬間に彼の首に太いナニカが突き刺さった。

そして彼は、次の瞬間には致死量の血を抜かれて死んだ。あっという間の出来事だった。

『鵺以外の血は吸いたくないのだがな』

幻来の術で朧げになった人間大の蚊である、ハートキートが呟く。

そうして彼女は吸った血を死んだ男の上に撒き散らかした。まるで不味くて食えたモノではないと言わんばかりに。

そしてそのすぐ横では、水障壁を突き破る様にして突貫してきた朧げなナニカに、一人また一人と五体を粉砕された。

それと同時に現れた巨大な切先に貫かれる者もいた。

正に阿鼻叫喚。

正規の訓練と熟達した経験を持つ、霧の治安維持部隊があっという間にその半数を失うに至った。

まだ五代目水影が就任したばかりで、改革のどさくさで部隊編成がキチンと整っていないとは言え、これはあまりにも手痛い損害だ。

既に四人の死者を出したこの隊の隊長は、面の下で顔を青くしつつも負けるわけにはいかないと奮起する。

これから霧隠れの里は、新水影の治世によって生まれ変わるのだ。

そのためにも、この様な村々を破壊する凶悪犯は放置するわけにはいかないのだ！

「卍の陣だ！」

隊長の号令に合わせて、生き残った彼らは全員で互いに背を預ける形を取った。

これは視界の利かない状況の為に考案された、全方位を警戒しつつ弱い背中を全員で守ると言う陣だ。

この時どこかで瓶が割れる音がしたが、誰もそれに気付いてはいない。

「羅蛸（ラショウ）よ！　範囲攻撃を！」

自分達は守りを固めつつ、隊長の口寄せである大型の蛸に指示を飛ばした。

だが……

「……？　羅蛸……？」

蛸は動かない。まるで命令が聞こえていないかのように。
否、聞く必要が無いかの様に。
「ちょうだいね、それ」
何処かから少女の声が響く。
それはこの状況だからか、酷く不気味で捉えどころのない、妖怪の声の様だった。
「寄木式　口寄せ契約術式」
パリンと瓶が割れる音が再びする。
それと同時に羅蛸と呼ばれた蛸は……隊長含む四人の生き残りに、牙を剥いた。

飼い犬に手を噛ませる

時はほんの少しだけ遡り、場面は鵺の百鬼夜行が総攻撃を開始した時点に着地する。

「あれちょっと欲しいなぁ……」

鵺は水障壁に囲まれた彼らを、シーツーに乗って上から観察していた。

彼女が興味を持って見ているのは、彼らが連れて来た大きな蛸だ。その他の人間……特に敵対した者になど微塵も関心は無いが、あの動物には強く惹かれた。

そして寄木の勘からか、あの蛸は口寄せ契約をしてはいるが、忠誠心などは感じない。どころか大した意思も無いよう感じる。

そこで鵺には本当に、よく言えば対等。あるいはチャクラだけの関係と見えた。

となると、もしあれを鵺が手に入れれば……家族ほど濃い関係を結ぶでも、使用感も違うだろうが手札の一つになるんじゃないかと考えた。

そして何よりも、手に入れた術を使ってみたいと言う欲もあったのだ。

「シーツー、あの蛸に近づいて？」

『あぁ、分かった』

クリスタと夜月が敵を惨殺したのを尻目に、蛸のすぐそばに降り立つ。

彼は随分と鈍感な様で、幻来の術でぼやけた彼らに対した反応は示さなかった。

あるいは分隊の混乱により、明確な指示が通っていないからか。まぁどちらにせよ、彼女にとっては好都合と言える。

「よいしょ」

残り少ない開錠血の瓶の一つを叩き割る。派手に飛び散った血は、鵺と蛸に多く降りかかった。

「んー、どっちの言う事聞いたらいいか分かんなくなるから……こっ

ちが先かな？」
印を組み、術式を発動……そして鵺は蛸の身体に手を押し付けた。
それに蛸が攻撃かと反応し、反撃体勢を取るが……それはもう遅い。
「寄木式　口寄せ解約術式」
そして間髪を容れずに、契約術式も組み込む。たったこれだけで、契約が締結された。
そうして蛸が振り上げた触腕が、ゆっくりと地に落ちる。そこにはもう、鵺に対しての敵意は無かった。
これが寄木の秘伝の一つ。当主専用の秘術ではないが、秘伝の巻物に同時に記載されていたのだ。
チャクラにモノを言わせて、強制的に解約と契約を操るという一族秘伝の術式が。
そうして蛸……羅蛸と呼ばれた口寄せ獣は、あっさりと鵺に墜ちた。
むろん夢現獣の術による口寄せではないので、心の中で会話することや感情の伝播は不可能だが戦力にはなるだろう。
「えっと……羅蛸だっけ？　みんなと一緒にあいつらやっちゃって」
再びシーツーに飛び乗った鵺が、ピッと残る四人の忍者に指を差す。
それと同時に、羅蛸は丸太の様な触腕をたわませた。
「馬鹿な?!　口寄せ獣が反逆するなど?!」
あまりにも有り得ない状況に、隊長は面の下で目を白黒させて絶叫する。
だが仮にも部隊を預かる隊長か、しっかりと回避行動とコールを同時に行い四人ともが羅蛸の攻撃を躱すことに成功した。
だが攻撃はそれだけではない。何せ他に十体もの口寄せ獣が、彼らの隙に目を光らせているのだから。
「また来るぞ!!」
敵の姿も見え辛くその上水障壁による強制的な搾挟により、極端に回避が難しくなった夜月の通牙が彼らに襲い掛かる。

それと同時に、鵺を守らなくてよいクリスタの自由な重撃が挟撃を仕掛ける。
隊長は、まるで世界がゆっくりと見える感覚に陥った。
正面からは羅蛸の触腕が、右からは謎の回転撃が、左からは巨大な鋏の切先が、そして下からも何らかのチャクラを感じるあたり攻撃が仕込まれていると見える。
正に四方八方。
何処にも逃げ場のない致命の檻が狭まるのを、彼らは見ているしかない。
そして鵺しか知らぬことだが、その他にも家族の中でもトップクラスの膂力を持つ茶鬼丸が……そして上空からはとある秘伝忍術を構えたシーツーも彼らを狙っている。
そしてそれらを、ハクリンと鹿尊が術と物理両方の探知で監視しているのだ。
正真正銘、逃げ場無しだ。
「クソがぁぁぁぁぁぁ!!!」
もはや絶叫するしか、やれることがない。
そしてその二秒後、生き残っていた四人の命は……儚くもこの世から消えた。
たった一人の犯罪者の手によって。
「……んー、ふぅ――ー。皆、ありがとね～」
しっかりと敵が死んだのを確認した鵺は、シーツーに地面に降ろしてもらった。
そしてかなり強い疲労感を覚えつつも、皆を労う。今回はしっかりと憂いなく戦闘が終わったので、鵺も家族も満足げだ。
しかし秘術の対価はしっかりと払わなければならない。
口寄せ秘術・百鬼夜行の術は確かに強力だが、チャクラの使用量と術者への負担がかなり重い術なのだ。
開錠血でチャクラ問題を解決していても、術者への負担は無くならない。
何せ自分の中から……言わば己を切り分けた存在が全て外に出る

のだ。肉体ではなく精神に重い負担が掛かる。使用後は夢現獣の術を一体分しか維持出来ぬほどに。
海月と羅蛸を残して全員が消える。
海月が残ったのは鵺のサポートの為だが、羅蛸まで残ったのは単に括りが違うのだ。
彼は夢現獣の術ではないので、秘術の効果範囲外らしい。
それは今知ったことだが、どうやら百鬼夜行の術後のケアを契約術式で補うのが正しい形の様だ。
しかし羅蛸も羅蛸で長いこと彼らが顕現させていたらしく、口寄せ継続時間が限界だった。
それに気付いた鵺は、いいよと一撫でして術を解除する。
これも彼は他の口寄せ獣と違い、夢に還る訳ではないのでどこぞの住処に帰ったのだろう。
『彼は使えそうですか？』
「うん、皆みたいに心は分からないけど……力はあるし素直だから大丈夫そう。きっと家族にもなれるよ」
その枠はペットだろうか。
鵺の脳内で、無意識に彼の立ち位置が決まった。
『そうですか。それなら良いですね』
海月が鵺の言葉を肯定する。
鵺が良いならそれで良いのだ。あらゆるものが。
そうして鵺は疲れた身体を休ませるために、寄木邸の比較的崩れていない部分に腰を落ち付かせた。
何せ一日中活動した上に、秘術まで行使したのだ。気分的にはもう歩けないと言ったところか。
以前ならば追われる恐怖で同じ場所に居続けることを嫌っていたが、秘術を手に入れたことで心に多少なりとも余裕が生まれた。故にこの場所で休むと決断できたのだ。
『おやすみなさい、鵺』
「うん、また夢でね」
夢現に家族の輪、家族寄り沿う木は夢の中。しかして我ら血の先に

微睡わん、獣と共に微睡わん。
口の中で転がす様に唱えて、鵺は眠り夢の中へ潜る。
手に入れた秘術……その最後の術を携えて。

幼い月との邂逅

朝日が昇る。
海月を枕にして眠っていた鵺は、小さな足音と気配に気が付き目を覚ました。
それには海月も気が付いていたようで、起き上がった鵺の背中に張り付いて触腕を蠢かす。
『おや……？』
昨日始末した忍者の仲間が来たのかと思えば、どうやら違うらしい。
海月は鵺の目線の先にあるモノをみて、思わず呆けた声を出してしまった。
「だぁれ？」
鵺がその者に語り掛ける。その声色は、酷く落ち着いていて穏やかだ。
いくら鵺でも、自分より小さな女の子に対し最初から敵意を見せる程、冷たくはない。
寧ろ、大人たちに最初から威圧的な人間が多いのがいけないのだと、鵺は無意識下で思っている。
「え、えと……月……麻呂です……」
そうか細い声で答えたのは、何処かから逃げて来たのか随分と身形がボロボロな少女……否、幼女と言える女の子だった。
近くに親がいる様な雰囲気も無く、仲間がいるようにも見えない。そんな様子に鵺は警戒心を薄めた。
と、そこでふと、鵺は彼女……月麻呂と目が合った。
そこに映し出される瞳の色は……鵺と同じ色をしていた。
『鵺……？』
無言で鵺は彼女に近づいた。有無を言わずにズンズンと迫る鵺に、月麻呂は少し怯えた声を漏らすが彼女はお構いなしに歩み寄る。
そして――――
「よしよし、怖かったねぇ」

鵺は月麻呂が薄汚れているのも気にせず、遠慮なしにその自分よりも小さな体を自らで包んだ。
そして彼女の腰まである長い黒髪を、頭から下へ梳く様に撫でる。
同じだったのだ。彼女の目が自分と。
家族を全部失った、昏い悲しみと絶望の色だったのだ。
しかし何処かにあるはずの、幸せに追い縋る辛うじて残ったような一筋の光をも。
鵺は彼女に、強い親近感を覚えた。
故に抱擁を選んだ。かつて自分がして欲しかったことを、この自分よりも小さな女の子にしてあげたいと、心の底から思ったのだ。
そしてそれは彼女にとっても、感じたことのない初めての感情であり、不思議と温かなモノで溢れる。
「私は鵺。寄木鵺だよ」
「ふぇ……かぐや……月麻呂ですぅ……！」
正式に名乗った月麻呂は、温かさに耐えられず涙が溢れ始めた。
彼女は正しく逃げて来たのだ。その一族の特異性と精神性を恐れられ、家族が殺されたあの日からずっと。
その期間自体は二か月と、そこまで長くはないが彼女にとっては途轍もない地獄の日々だったのだ。
人が怖くてずっと逃げた。お腹が空けば野草を喰らった。眠くなれば泥にまみれて眠った。
村に行けば偏屈な村人に石を投げられた。街に行けばチンピラに襲われかけた。忍者に見つかれば殺されるかと思って、近づきもしなかった。
けれど、けれど突発的に出会った鵺は違った。
自分が欲しかった温もりを、彼女が与えてくれたのだ。涙するのも仕方はない。
そしてその心を溶かすのも、また然りだ。
「うえぇぇん……」
「よーしよしよし」
本格的に泣き出した月麻呂を鵺はもう一度力を込めて抱き締め、頭

を撫でる。それと同時に海月へ、彼女の怪我の治療をお願いした。
大きな怪我自体は無いが、擦り傷などが身体のいたる所にあるのだ。これではいつ重篤な病を引き起こすのか分かったものでは無い。

そうして幾らか時間が経った後、月麻呂は落ち着いたのか少し恥ずかしそうに頬を染めて鵺から離れた。
だがそれと同時に、やはり人肌がクセになってしまったのかもじもじと鵺の方に視線をやっている。
鵺はそんな月麻呂の様子を……眺めるがその意図までは分からなかった。
何せ鵺はどちらかと言うと、遠慮なしに甘えるタイプなのだ。そう言った羞恥心の機微は、彼女には分からない。
そして何よりも、鵺は人の気持ちにこそ最も疎いのだ。
文字通り、自分と同じモノしか分からないのである。
と、そこで何をするでもない間が流れて、次の瞬間には二人の腹の虫が鳴き始めた。
片や敵を殺戮した後に疲れて眠って、片や逃亡生活でボロボロの身だ。一息付けば腹が減っていたことにも、気が付くと言うものである。
『食料が必要ですね』
「うん……あ、じゃあ山降りて街に行こっか」
水の国に来て二週間ほどは一族の遺跡探しを優先して、村を見つけては襲うだけの生活だったが、その用事はもう終わってしまった。
なのでもう水の国にいる必要も大して無いのだが、どうするにせよ衰弱している月麻呂をこのままにはしておけないだろう。
彼女と行動を共にするにせよしないにせよ、鵺の中では月麻呂をそこそこ気に入っており面倒を見ることは決定していた。
今までの庇護されるだけの立場から、自分より小さなモノとの出会いにより彼女は少しだけお姉さんになった。ちょっぴり、少しだけ。
「ま、街……」

月麻呂の顔がすっと青くなる。どうやら彼女は以前の鵺の様に、街が苦手なようだ。
そんな様子を見た鵺は、大丈夫だよと手を握って先導する様に引いた。
軽くて力の弱い彼女は、そんな鵺の手引きに抗えずその足並みを揃える。
「お金ならあるからね！　好きなの食べられるよ！」
実際ガトーカンパニーから強奪した金は、それなりの額だ。金庫を丸ごと抜いた訳ではないが、持ち歩くには十分すぎる量であり、文字通り好きなモノを買えるだろう。
そうして鵺は、鼻息荒く月麻呂にしたり顔を見せるのだった。

もう怖くないよ

水の国は、昔から大名の座を巡った戦いが多かった。
故に治世が定まらず、国が荒れることなど日常茶飯事だ。その煽りは国内の村や街も当然の如く受け、治安に悩まされている者も決して少なくない。
そしてその動きは水の国と密接な関係にある霧隠れの里にも当てはまると言えよう。国が荒れれば里が荒れ、里が荒れれば国が荒れる。それは霧隠れの里が水の国にとって最も便利な暴力装置であり、また生命線でもあるからだ。
だがそうして長く盛衰を繰り返してきた水の国は、最近新たな水影の就任をきっかけに変化の兆しが訪れた。
元より閉鎖的だった初代。
解放的ではあったが時代の所為か本人の人柄か、争いの中心であることが絶えなかった二代目。
初代の意思を継いで、より閉鎖的に、そして悪辣な治世を行った三代目。
何者かに操られ、先代の血霧政治を増長させた四代目。
そのどれとも違い、新たな影……五代目水影は里自体の暗い雰囲気を一掃したのだ。
解放的で、それでいてなるべく平和に寄せた……そんな政治を。
それが彼女が、数多の同士を引き連れクーデターを望んだ先にあった、明るい未来だった。
無論、先代が残した負の遺産……と言うより借金と言った方が正しいであろう負債はまだまだ残っている。
三代目から四代目の終わりまでという、期間が長すぎたのだ。あまりに暗い時代でいたのが。
しかしそれもまた徐々にではあるが、より良い方向へ向かっていると水影は思う。
そしてその働きかけは、里のみならず水の国自体へも行っているのだ。

その成果か、未だ手の届いておらぬ場所はあるが治世は整いつつあると言えるだろう。

だがそんな水の国にて鵺が月麻呂を連れて訪れたのは、その未だ手の届いておらぬ……暗い目をした者が多い街だった。

往々にして、国の中央は栄えるが末端に位置する街や村には手が届かないのは、よくある話だ。

そしてそんなよくある話だったからこそ、月麻呂は街と言う存在を恐ろしい場所だと認識しているのだが。

だが鵺は違う。

確かに逃亡の旅を始めた頃は人が怖く、そんな人が沢山いる街など恐ろしくて仕方なかった。しかし力を手にして、その強さや自信を実感してからは一般人など恐れる必要が無くなったのだ。

初めてそう認識した時は、幸せに一歩近づいたと笑顔が溢れた。そして同時に、力こそが幸せをもたらすとも。

「いい？　月麻呂。食べたい物はこうやって買うんだよ」

少しだけお姉さんぶって、鵺は得意顔で月麻呂に買い物の仕方を教えた。

これは鵺自身が、白や再不斬に教えてもらったことだった。

盗むのは良くないことで、ちゃんとお金を払わなければならないことを白が。

盗みは無駄に目を付けられたり、最悪追われる可能性があって面倒なことになるから、あまりしない方が良いと再不斬が。

正直なことを言えば『良いこと』と、『悪いこと』や『良くないこと』の差など鵺にはよく分からない。

だがダメだと言われればそれに従うのが、鵺の素直なところだった。無論、必要だと思ったことや自分に害の無いことに限るが。

そうして彼女たちの身体には、少し多いくらいのパンと焼き魚を買った。

得意になった鵺が少々買い過ぎた、と言う形だ。

「ここで食べよ」

人通りの少ない大通りを避けて、二人は細い路地に入った。
これは、あまり自覚は無いが今まで聞いた会話や言葉から、自分のことをかなりの人数に知られていると海月が推測し、顔を隠すのをなるべく意識させているからだ。
少し面倒だが、鵺は家族の言葉には聞き分けが良く……特に夢現獣の術の家族の言葉には絶対に従うのだ。
が、今回ばかりは少しこの行動は、不幸な人間を一人増やすに至る。
「おぉいガキどもぉ……なぁに食ってんだぁ～？　俺にも分けてくれよぉ」
彼女たちの背後から、随分と酒臭い体臭を撒き散らかした中年が現れた。
彼はガタイが良く、実に鵺の１．５倍ほどの身長だ。月麻呂に至っては二倍近く差がある。
「ヒッ……！」
月麻呂はそんな男の乱入に、体を強張らせてしまう。手に持っていたパンは虚しく落ち、その眼には涙さえ浮かんでいる。
よほど男が怖いらしい。あと数秒ほどすれば、怯えて腰を抜かしてしまうかもしれない。
そして一方で鵺は……深く被ったフードの奥で、力強く男を睨みつけていた。その眼は激しい憤怒を滾らせており、普段他者に無感情な眼がギラリと光っている。
「……海月」
『分かりました』
言葉はそれだけでいい。
「ん？　なんだぁ？」
鵺はそれ以上言葉を発さず、男に近づいた。
時にこの忍界では、チャクラを操れるか否かと言うのは……とても大きな差として現れる。
例えそれが男と女でも……中年男性と幼い少女であっても。
「ぐぇ」
ヌルリと粗雑に鵺の手が男の腹辺りの服に伸び、チャクラを込めて

力強く引っ張る。するとチャクラも使えぬ一般人である相手は抗える訳もなく、呻き声を上げて自然と膝を折り、顔の位置が鵺と同じ高さに来た。

そして――――

「あ、ぇ……」

服を手放した右手が彼の頭を掴む。するとローブの緩い袖から、無数の触腕が溢れ出た。

それらは次の瞬間には彼の頭部にある穴から内部に入り込み……

無情に、苛烈に、無差別に。命の要所を破壊した。

当然の如く男は僅かに声を漏らした後に、倒れ伏す。そして数度痙攣すれば、もう動くことはない。

無論口を開くことも、彼女たちを脅かそうとするあの目も、開かない。

「大丈夫だよ。もう怖くないよ」

鵺はその結果に満足し、もう興味も無いと言わんばかりに男から目を離した。

そして傍で震えているしか出来なかった可哀想な妹に、手を差し伸べる。

「あ……あぁ……」

彼女から返答ではなく吐息が漏れた。

そしてその眼は……

どうしようもなく、輝いていた。

月は一人じゃ輝けない

かぐや月麻呂の人生は、その半分が逃亡と共にあった。
その始まりは彼女が四歳の頃だ。
当時戦乱の緊張がピークに達していた霧隠れの里と水の国は、いつ弾けてもおかしくない水風船の様なものだった。
そんな状況の中、彼女の両親は一族の集落から抜け出す決断をする。
それは偏に、彼らの一族の性質を憂いたからだった。
彼らかぐや一族は、かなり古い血統とそこに宿る血継限界を守ってきた者達である。
そしてそんな彼らは、何と言ってもその術の特異性がもたらす高い戦闘力を持っていた。
故にこそ、恐れられたのだ。
かつての水の国では、特殊な術や特徴を持つ一族は尽く迫害対象だったから。
そして何よりも、かぐや一族の持つその戦闘に対する精神性も恐怖の対象だった。
彼らは戦闘を好む一族だ。
故にこそ戦国の世でも優位性を以て駆け抜けられた。他の地域よりよっぽど戦争が激しかった水の国にて。
しかし今の世ではそれは、ただただ恐怖を向けられる的でしかない。
そして実際に、膨れ上がった恐怖心は彼らを四面楚歌にし、最終的には滅ぼされた。
ここまではいい。
これを分かっていたからこそ、月麻呂の両親は幼い彼女を連れて逃げ出したのだから。
きっと、かぐや一族は戦うことを選ぶのだろうと。
負けると分かっていても、戦うのが我々なのだからと。
寧ろ、荒ぶる血を抑えつけて逃げた彼らの方こそ、異端なのだと。

しばらくは平穏な日々が続いた。
往々にして、一度大きな戦乱があれば暫くは静かになるものだ。
その上、一つの一族が消えたとなればそれはなおさらである。
だがそんな平和な時期も、蓋を開けてみればそう続かなかった。
最初の逃亡先では、ある時月麻呂の血が目覚めてしまった。
と言っても、骨が一本掌から突き出ただけなのだが……。
しかしそれがいけなかった。許されなかった。
かぐや一族は水の国にて、悪名高く有名である。
戦に狂った異端者たち。骨を操る血継限界。ついぞその鬼どもは滅ぼされた……はずだった。
だがここにいた。生き残りが。
去年の冬頃にこの村にやって来た、よそ者が生き残りだったのだ。
そうして彼らは当然の如く異常なほど恐れられ、追い出された。
いや、迫害され、殺される前に逃げたと言った方が正しい。
娘をきっかけに、また彼らは居場所を失ったのである。
しかし彼らは月麻呂を責めはしなかった。
一族にとって、その血の目覚めは喜ばしいことだ。まさに成長の証なのだと言える。
本来なら……集落にいた頃ならば、皆から祝福される吉事のはずだった。ただ少し、タイミングが悪かっただけで。
それから彼らは自衛のためにも、月麻呂に力の使い方を教えた。だが彼女の肉体はともかく、精神性はまだかぐやに目覚めていなかった。
寧ろ力を使うことこそを恐れた。それが目覚めの際の事件が端を発しているのは、両親からは一目瞭然だった。
結果としてちゃんと修められたとも言い難いが、基本的なことと秘伝の型を一つ教えて修行は終わる。
そもそも月麻呂の精神は戦いには向かないのだ。心根は真っ直ぐだが、臆病だったが故に。

それからまたしばらく、各地を転々とした。
情勢が悪い頃に、よそ者を受け入れてくれる場所など殆どないから。逃げる様に旅をするしかなかったのだ。
そして運命の日が訪れたのは、月麻呂が今の年齢である七歳になる直前だった。
その日は珍しく、とある村にてお世話になることが出来た。両親はまともな寝床で身体を休められることに感謝し、家族三人で寝床に就いた。
そうして何事も無く朝日を迎える……はずだった。
その要因の最たるものは……どこまでいっても彼らの不運としか言いようがない。
この事件に限って、彼らの血も……その精神性も何も関係なかった。
ただその村が、よそ者を文字通り食いモノにする類の村であっただけだ。
確かに新たな水影の就任を機に、水の国は良い方向へ向かい始めただろう。
未来に待つのは、暗い歴史を払拭した皆が平和に暮らせる国という光だろう。
だが今ではない。
それは今ではないのだ。
ここは水の国の末端部分。
いわゆる、最初期に腐り始めた……最も戦乱の影響を受けた不幸な患部。
ここまで国の手が及ぶのは……未だ遠い未来の話なのだ。
結果、月麻呂の両親は殺された。
彼女を逃がすために、その時間を稼ぐために戦ったのだ。
相手がただの人であれば問題なかったが、村人たちは昔敗走した忍一族の末裔だった。
そして国にも霧隠れの里にも血を隠し続け、ひっそりと技術と秘伝を継承し続けた……そんな人々だったのだ。

なお、そんな人々もつい最近滅びたのだが。
奇しくもどこぞのS級犯罪者の手によって。
そうしてついに独りになってしまったのが、かぐや月麻呂という少女だった。
それから二か月間、鵺と出会うまで泥と恐怖に苛まれる日々を送ることになる。
だが、これからは違う。
「大丈夫だよ。もう怖くないよ」
太陽だ、と彼女を見上げる月麻呂は思った。
圧倒的で、それでいて優しく暖かい。月が太陽の光を受けて輝く様に、私は今この人に照らされているのだと。
そう理解した。
そして同時にもう一つの真理をも。
「月麻呂、幸せはね……壊される前に敵を壊せば良いんだよ」
一筋の光を湛えた、濁った瞳が月麻呂を射抜く。
その何とも言えぬ美しさに……彼女は幼いながらに強く魅了された。
父様も母様も、もういない。だけれども――――
「鵺……姉様……」
頬を真っ赤に染めて、彼女はそう呟くのだった。

幸せにする才能

「鵺姉様っ」
「うん、偉い偉い」
街への恐怖を克服した日から数日。月麻呂と鵺は旧寄木邸の敷地を少し整えて、未だ水の国に滞在していた。
鵺は霧の忍が自分達……否、自分を追っていることは分かっているが、すぐには動けない理由があったのだ。
それは偏に月麻呂の存在である。
彼女は鵺から見ても、随分と幼い少女だ。七歳と少しという鵺よりも三つ年下で、かつ争いごとの経験も無い。
無論、鵺が彼女を守るのは当然と考えているのだが、だとしても目を離せない程弱いと……彼女が幸せになれない。
もし自分が、家族が誰一人いない上であの惨劇を迎えていたと思うとゾッとする。それだけ鵺の中で暴力と言う存在は、大きくなっていたのだ。
幸せを脅かされない様に、恐怖に打ち勝つために。
暴力は何よりの近道なのだと、鵺の思想に刻みつけられていた。
それさえあれば、安心して家族に囲まれ、幸せを享受出来ると心の底から信じているのだ。
だからこそ、せめて月麻呂が自分の力をある程度揮えるようになるまで、移動よりも訓練を優先したのだ。
幸い、彼女にも自分と同じように特別な力があるのだから。
彼女自身を幸せにする才能があるのだから。
そんなことを考えながら、鵺は明るい笑顔をこちらへ向けている月麻呂の頭を撫でた。
今は訓練中であり、月麻呂とクリスタの試合が終わったところだった。
鵺自身はデイダラとの訓練以来、自らが戦ったことは指で数える程度すらないレベルだが、教えられたことを月麻呂に教えている最中なのだ。

そうして無事、クリスタとの戦いを経験した月麻呂は疲労を感じながらも鵺に褒められてご満悦である。
『月麻呂はまだ力を使うことに恐怖心は感じますが、本能と言うか……身体の動かし方は何となく分かってきているようです。きっと、才能があるんでしょうね』
クリスタが月麻呂の後を追う様に、鵺に近づいてそう言った。彼女を褒めているようで、この言葉は鵺にしか聞こえないのだが。
「月麻呂、戦うのは怖い？」
「んー、うん。戦いと言うより、術を使うのがまだちょっと怖いです……。でも鵺姉様の為にも強くなりたい……」
最後の方はぽしょぽしょと小声になり、よく聞こえなかったがやる気はあるようだ。
この分なら水の国から移動するのにも、そう時間はいらなそうだと鵺と背中にいる海月は思う。
『と言っても、月麻呂もそうですが鵺もまだ動けませんからね』
と、成り行きを見守っていたクリスタがそう諌める様な声で言った。
そしてこれは、鵺が本調子でないことを差していた。
と言うのも、鵺は百鬼夜行の術を使用して以来……未だにその負債を払い終えていないのである。
その症状は二つあって、まず一つが夢現獣の術の同時顕現数だ。
現在鵺はクリスタと海月を出しているが、これ以上は出せない。つまり通常なら三体まで出せるところ、二体までしか出せない状態なのだ。
もちろん、百鬼夜行の術による総顕現も使用不可能である。
一応、その括りではない口寄せ……大型の蛸である羅蛸は三体目として呼び出せはする。だが実力信頼……その両方を鑑みれば、少し心許ないと言わざるを得ないだろう。
そして二つ目が開錠血の貯蔵量だ。
禁術を得てハートキートを創造して以来、地道に鵺から血を抜いて開錠血を作製していたが、いよいよ残りが少なくなってしまった。残

量は手元にある小瓶三本分だけである。
特に百鬼夜行の術の際に消費した量が、かなり響いたのだ。ただでさえ襲った村から奪った秘術をシーツーに付与したせいで、コストが跳ね上がっていたので。
さらに言えば、吐き出した血は内部貯蔵の全てだったのだ。どれだけ消費するのか分からなかったが故の大盤振る舞いだったのだが、正直言えばあそこまでは必要なかったので次回からは改善されるだろう。
故に現在ゆっくりと新しく開錠血を増産中なのだ。
鵺から一度に採れる血の量も、大して無いのだから。
「じゃあ月麻呂、クリスタ。行ってくるね」
鵺は月麻呂の訓練が終わったのを見届け、本日の用事に向かうことにした。
その用事とは簡単なモノで、水の国から火の国方面にでる船を手配するのだ。なんでも近頃、火の国へ向かう船が数船確保されているらしく、人に紛れて移動できると考えたのである。
本来なら留守を任せることはあまりしたくないのだが、疲労している彼女を連れて行くのもしのびない。
だが手配日を遅らせるのも、また時期が悪くなる可能性があると今までの旅で学んだのでやりたくなかった。
だからこそ、出来るだけ手早く船の手配を済ませて戻る。それが最善策だと鵺は考えたのだ。
それに、クリスタもいるから大丈夫だとも。
月麻呂は鵺と離れるのを少々……いやかなり寂しがっているが、留守を任されたとあれば我儘は言えなかった。案外、彼女はそう言う分別のある少女だった。それは偏に、逃亡の経験と両親の教育の賜物なのだが。
そうして月麻呂はクリスタと共に、街へ向かう鵺を見送った。
彼らが訪れたのは……そのすぐ後のことだった。

鬼の居ぬ間に

それを最初に気が付いたのは、クリスタだった。
ゆらりと大気が動き、幾人かの人間の気配がこちらに向かってくるのを。
クリスタは鹿尊の様な感知能力は無いが、他の家族よりも戦闘を重ねた数が多いからか……そういった感覚が鍛えられていたのだ。
だがそれももちろん、精度はそこまで高くなく曖昧なのだが。
『何か……』
念のためすぐに月麻呂を庇える位置に移動する。こういった動きは鵺との行動で慣れていた。
そうして彼らは、そのすぐ後に姿を現す。
「デカい蟹、黒髪、女、ガキ……特徴はあっているな」
現れたのは四人の忍だった。皆一様に仮面を被っており、その人相も何も分からない。
ただ明確に敵意を持っていること以外は。
「こんなガキにウチの忍がやられたのか？　ったく……使えねぇ……」
四人の中でも先頭に立つ者が嘆かわしそうに、それでいて苛立っている様な声で溜息を吐いた。
だがその様に一見隙だらけに見えるが、その実一切の油断も滲ませていない。場にピリピリとした緊張感が流れる。
月麻呂は恐怖で震えそうになるが、男が次に吐いた言葉でその震えは収まることになる。寧ろ、恐怖から怒りへと震えが移行するほど。
「テメェらはあの蟹をやれ。鵺とか言うあのガキは俺が殺る」
「ッ……！」
鵺の名前が出た途端、クリスタと月麻呂の身体が強張った。クリスタの内心は語るに及ばず、月麻呂の心は恐怖よりも怒りで支配される。
彼らの目的が『寄木鵺』の殺害と分かれば、どうして退くことが出来るだろう。家族を殺そうとしている者を前に、どうして逃げること

が出来るだろう。
（コイツら……鵺姉様を……?!）
その戦闘の始まりに、合図は無い。これは忍者同士の殺し合い……決してお行儀の良い試合なのではないのだ。
まず初めに、クリスタの討伐を命じられた部下の三人が動いた。
その初動はよく訓練された忍者らしく、月麻呂の目では追い切れないほど速い。
「硬い！」
だがクリスタの反応速度も、経験を通して上がっている。そしてその硬い甲羅を用いた防御にて、初撃を見事にいなした。
しかし、攻撃はその初撃では終わらない。
「キャッ！」
咄嗟にクリスタが月麻呂を掬い上げる様に投げ、自分との距離を取らせた。明確に部下の内の一人が、クリスタの下にいる月麻呂を狙ったからである。
まさに手一杯。今のクリスタに月麻呂を守る余裕は無い。
「ふん、新しい口寄せを呼ぶ気配は無し……か。アイツが言ってたこととはちょいとちげーが、まぁどうでもいい」
ついに、場を静観していた隊長が動き始める。まるでもう観察は終えたとでも言わんばかりに。
そして彼から放たれる殺気は、月麻呂が今まで受けて来たどれとも桁違いだ。
一般人の温い殺意とも、両親が殺された時の獲物へ向ける殺意でもない。本物の、殺意。
そしてそれを受けた瞬間、月麻呂の脳裏に鵺の言葉が過った。
『月麻呂、幸せはね……壊される前に敵を壊せば良いんだよ』
あの輝きに魅了された。あの暴力に震えた。
だからこそ逆に言えば、敵を壊せなければ幸せが壊されるということ。
つまり……やらなければ、やられる。
「薄衣（うすらい）・羽衣の舞」

彼女の母親は、一族の集落一番の踊り子だった。そんな母から教えてもらった、秘伝の型の一つを使用する。
薄衣（うすらい）・羽衣の舞。
それはかぐや一族の中でも、特に華奢な女性が好んで使う型だ。
人体の五つの首の部分から骨膜を伸ばし、まるで天女が羽織る天衣をはためかせるかの如く舞う型。
しかしは見た目の薄さを見て侮るなかれ。彼らの骨は鋼鉄よりも固く、また柔軟性に優れている。そしてそれは、骨膜もまた然りである。
寧ろその薄さと硬さ、そして柔軟性が生み出す刃の如き鋭さは……通常の舞よりもさらに切断力を増しているのだ！
隊長の男が攻撃に転じるよりも早く、興奮により研ぎ澄まされた感覚が月麻呂を彼の懐に運ぶ。
そして――――――
「唐松の舞！」
薄い刃の如き骨膜で相手の四肢を裂きつつ、同時に『唐松の舞』という胸から肋骨を飛び出させる基本の型で胴を狙う。
これこそかぐや一族の真骨頂。変幻自在の攻撃と防御、それらを可能にする柔軟性を持った最強クラスの血継限界……『屍骨脈』の力である！
当然、隊長の男はそんな予期せぬ攻撃をモロに喰らうことになった。
油断はなかったとは言え、子供を前に多少の侮りがあったか。もしくは月麻呂の才能が成した結果か。
あるいは……
「ほぉー、かぐやの血継限界……その生き残りか。口寄せを使うって聞いてたんだがなぁ……」
「なん……で……?!」
もっと単純に……
「確かに変幻自在で面白れぇ……だがな……」
攻撃を喰らうことに……

「俺の『水化の術』も、随分と変幻自在だろ？　なぁ？」
全く頓着していない、か。
「侮って悪かったな。面白れぇモン見せてもらった礼に、名乗ってやろう」
ぽたりぽたりと、攻撃を受けて崩れた水の肉体をあっという間に引き戻しつつ、男は面を外す。
それをするのも名を名乗るのも、本来暗部としてはあるまじき行為だがその男は気にしない。
何故ならば彼にとって、強者と礼儀を以て戦うことこそ正義なのだから。たった今より犯罪者の狩りから、決闘へと闘いの様相が変わるのだから。
そんな威圧感の変化に、思わず跳んで離れた月麻呂を男は追わない。
まるで仕切り直しだと言わんばかりに。
「俺は二代目水影、鬼灯幻月が孫――――――――鬼灯残月だ」
と……男は名乗りを上げた。

鬼と月、あるいは流々

その攻防はまさに一進一退を極めた。
闘いが決闘の様相に変わったとはいえ、残月と月麻呂の経験や技術は桁違いである。それは残月自身がよく分かっており、正直なことを言うとここまで食い下がられるとは想像だにしていなかった。
それは偏に、お互いの持つ防御力が要因だ。
片や鋼鉄の如き骨の盾と、それらを満足に出し入れする皮膚や筋肉の修復力。
片やチャクラの限り肉体を液状化し、あらゆる物理的な致命傷を無に帰すという鬼灯一族が名門たる所以の術。
それらのぶつかり合いは、いっそ不毛とも呼べるほどの泥仕合を展開したのだ。
だが勿論、いくら修復力が優れているかぐやの肉体でも……ダメージを負えば負担は蓄積され、流して失った血液は戻らない。
それをチャクラに置き換えれば残月とて消耗していない訳ではないが、こちらは長年鍛錬を積んできた熟達の忍だ。月麻呂とは土台が違う。

しかしそれらの差を埋めるのは、往々にして『才能』だと相場は決まっているものだ。
月麻呂のそれは、間違いなく本能的な『屍骨脈』の使い方だった。
まず第一に残月との差は、その体躯の差である。
大の成人男性と齢七歳を超えた程度の女児では、明らかに体格が違う。身長差にして、凡そ二倍ほどの差があるのだ。つまりそれは圧倒的なリーチの違いを生み、月麻呂にあまりに不利な踏み込みを強制させる状況を生むことになる。
そこで月麻呂は全身の骨を伸ばすことを選択した。
そしてそれに伴い破壊された皮膚や筋肉の修復が追い付かない為、残月を超えることは出来ないが少なくとも鵺よりは高い……十五歳程度の身長を得ることに成功する。

無論この方法は、チャクラ消費のみならず身体への負担も尋常ではない。何せ一時的とは言え全身に大怪我を負うのと、同義なのだ。修復力を高める為にさらにチャクラを使えば、戦闘継続可能時間が狭まるのは当然である。

だが月麻呂は持久戦など想定していない。

ここで敵を殺す。そして姉である鵺を守る。ただそれだけを考えていた。

だが同時に……

「何だよ、随分と楽しそうじゃねぇか!!」

「アハ！　アハハハ!!」

何処かで女の子が笑っているのを、月麻呂は朧げに認識していた。

いや、それは他の誰かではなく……自分が笑っているのだと。

そう、殺意と怒りの中で確かに……月麻呂は喜びの感情を覚えていた。それは小さな萌芽から始まり、やがて心の内を支配するような熱い激情が。

殺し合いに対する……悦びが。

体力など早々に尽きた。

気力などもう無い。

だが動ける。不思議なほど足が動く。寧ろ、軽い。

「このガキ……ッ」

闘いを楽しんでいた残月の背筋に、ゾッとしたモノが過る。

明らかにこのガキは異常だと。その精神性ではなく、見る見るうちに上がっていく身体捌きと直感の鋭さが。

「死んじゃえ！」

月麻呂が強く踏み込む。

闘いの最中にどんどん数が増えた、身体の至る所から生える羽衣の舞の骨膜が残月を食い破る……

前に。

「ッ！」

強い殺気を感じた月麻呂は、朧げな意識の中それ以上踏み込まずに後退した。

そしてその次の瞬間、残月から放たれた小さな水弾が彼女の顔の横を通り過ぎる。
「……何のつもりですか、隊長」
「テメェらは手ぇ出すな。このガキは俺がやるっつったろ」
月麻呂の背後に迫っていた部下の男が、残月に牽制されて下がった。どうやら先ほどの殺気は、この男から放たれたモノらしい。そして残月の攻撃はこの男を狙ったモノ。
ちらりと月麻呂が背後を窺うと、そこには既にクリスタはおらず三人の部下がこちらを見つめていた。
「ガキ、そいつらは気にすんな。俺らは闘いを楽しもうや……てめぇが死ぬまでな」
自分は負けないという絶対の自信。
そしていっそゾクゾクするほどの威圧感と殺気を、月麻呂は彼から受け取った。
片やまだ余裕のある水流。
片や自らの全てを絞り出す様な舞。
その戦いはまだ、終わらない。
「水遁・水龍弾の術!!」
残月が目にも止まらぬ速さで印を結び、術を起動する。本来ならばこの術はトドメの一撃になり得る大技なのだが、すでに彼は月麻呂には通じないことを知っている。故にこれは目眩ましと牽制を兼ねたモノだ。
そして予想通り、月麻呂は龍の頭を、水面歩行の術と足裏の骨を利用して滑る様にいなして突き進む。術の根元にいるはずの残月に向かって。
だが……
「あめぇ！　やっと捕まえたぜ！」
自身を水化し、水龍弾と同化していた残月が頭上通ったタイミングで月麻呂の足首を掴む。
激しい水の流れと速度の中では相手の動きを見切るのも困難だが、長年の経験と直感が残月に成功をもたらしたのだ。

すぐさま足首から生える骨膜を利用して、掴んだ手を切り裂こうとするも足場が不安定で上手く舞えない。
あくまでかぐや一族の骨は独立起動する訳ではないのだ。それをするには、それ用の舞を使用しなければならない。
「あぐっ！」
足首を掴んだまま、肥大した残月の右腕により地面へ叩きつけられる。月麻呂の術は打撃には強いが、内を侵す衝撃には弱いのだ。
そのあまりの衝撃に、彼女の息が詰まった。
そしてそれを見逃す残月ではない。
「骨が硬くて貫けなかったが、零距離なら関係ねぇだろ？」
その銃口が、月麻呂の腹に食い込む。

親愛なる天秤

クリスタが消された。
心の会話は距離が離れていれば出来ないが、この世に顕現しているかどうかはすぐに分かる。
だからこそ、鵺がそれを察知したのと舟券屋を飛び出したのは同時だった。
『鵺！』
「分かってる！」
月麻呂の護衛として留守を任せていたクリスタが消えたという事は、何かしらの攻撃を受けたことに他ならない。
夢現獣の術による口寄せ獣には継続時間の制限が無いので、自主的な解除かダメージによる強制解除しかありえないからだ。
そして月麻呂も、率先して鵺の家族を傷付ける様な子ではない。会話が出来ない為かまだ打ち解けてはいないだろうが、それでも暴力を振るうことはないだろう。
つまりあらゆるパターンを想定しても、最終的には外敵の襲来に結論は収束するのだ。
早く、早く月麻呂の元へ戻らなくては。
そんな思いが鵺の心中を支配する。
彼女から見れば妹は弱く小さな存在だ。だからこそ姉として、家族として守らなければならない。
クリスタをも倒せる敵を前にしていると思えば、それはなおさらである。
「口寄せの……ッキャ！」
周囲の建物や街人など毛ほども気にせずシーツーを呼び出そうとした瞬間、強い衝撃が鵺の背を襲い吹き飛ばされる。
どうやらその一撃は斬撃だったようで、偶然にも背中にいた海月が盾となった。しかし当然ながらダメージ超過により海月は消える。
そんな状況になり、焦りと怒りで目を赤くした鵺は攻撃が来た方向を睨む。

そこには……
「よぉ、久しぶりだな。鵺」
巨大な包丁を携えた、男――――――桃地再不斬。
そして……
「お久しぶりですね……鵺ちゃん」
雪を想起させるような風貌の麗人――――――白。
鵺が家族と認識した、二人の男が立っていた。
そしてその刃は、鵺に向けられている。
「どうして……？」
鵺が震えた声で問う。彼女には、今の状況が何一つ理解出来ないのだ。
月麻呂が何者かに襲われていることも、この二人が自らの前に立ち塞がっていることも。
「どうしたもこうしたもねぇよ。鵺、てめぇは暴れ過ぎたんだよ」
「僕と再不斬さんは、今や霧隠れの治安維持部隊。水の国での鵺ちゃんの所業を見過ごす訳にはいきません」
曰くこの二人は、あの橋上での戦いの後……鵺が離脱した後に霧隠れの追い忍に捕まったそうだ。
しかし再不斬は先代水影の際に、霧隠れの里で最初にクーデターを起こした者。そのことから今では英雄としても見られているらしく、捕まったのを機に霧隠れの里へ戻ったのだ。
そしてクーデター以前は旧友だった五代目水影、照美メイの要請により霧隠れ治安維持部隊へと白と共に編入された。
となれば当然、水の国にて村を三つ滅ぼした鵺は粛清対象である。その上、彼女は国家指名手配犯なのだから、水の国に足を踏み入れられたなら討滅部隊が組まれるのは普通だ。
だからこそ、鵺をよく知る二人が派遣されたのである。
そして今。
元より残月の部隊との共同作戦だったのだが、片方は先の治安維持部隊がロストした場所へ、片方は目撃情報のあった街へ向かったという形になっているのだ。

「何の為にお前が水の国に来たのかは知らねぇが、悪く思うなよ。これも仕事だ」
首切り包丁の切先が、真っ直ぐ鵺を捉える。
相手は国家S級犯罪者……いわゆる、その捕獲に生死は問わない者だ。故に逃す気は無い。無力化する気も無い。
何なら最初の一撃で、再不斬は鵺を殺すつもりだったのだ。
厄介な口寄せの術を使われる前に。

「……どうしても？」
「ええ、僕たちは今や敵同士。鵺ちゃんも常々言っていたでしょう？
敵は殺さなければならない、と」
世話をした幼い女の子を斬らなければならない葛藤からか、白は鵺に諭す様に言った。
まるで敵対することを促す様に。彼女に覚悟を決めさせる様に。
そして、自分に言い聞かせる様に。
敵、そう……敵だ。
幸せを邪魔する敵は全て殺さなければならないと、鵺は心底信じているし、口にも出して来た。
だがもし、その敵が家族ならば？　そんなことを鵺は、考えたことも無かった。
だがここで戦わなければ。二人を目の前から排除して、月麻呂の元へ行かなければ。そうしなければ、今度は妹が死ぬことになる。
寧ろすでに……
と、嫌な考えが脳裏を過ったのを、頭を振って払い除ける。
どちらにせよ、今取れる選択は二つに一つなのだ。
再不斬と白（家族）を殺していくか、月麻呂（家族）が死ぬか。
「……ごめんなさい」
もし、あの時我儘を言わずに大人しくしていれば。我慢して白と再不斬の傍にいれば。
一緒に霧隠れの里で暮らすという未来はあったのか。一つの幸せに辿り着いていたのか。

そんなことを想いながら、鵺は開錠血の小瓶を三本分地面に落として割った。
これが残りの血の全て。頭の中がグルグルと落ち付かない中で、唯一選んだことだ。
それは鵺らしからぬ思考であったが、この極限の中で彼女は……ここで終わっても良いとすら考えていた。
ある種の自暴自棄。
家族を斬らなければ家族を救えないと、そんな結論に着地してしまった故の。
だからこそだろうか、無意識に守らなければならない者の方へ気持ちが寄ったのは。
白の瞬身が間に合わぬほどの速さで印を結び、その術……　寄木一族当主にのみ許された、二つ目の秘術が起動する。
「口寄せ秘術・明晰夢・夢現獣の術」
夢の門が、大口を開けて開門する――――――。

肉噛みの竜

白にとって鵺は、他人とは思えない境遇の幼子だった。
再不斬に拾われた自分とは違い、誰にも頼れずにただ独りで生きてきた……そんな女の子である。
可哀想だとは思う。何て不憫な子なのだと思う。
だがそれ以上に、白にはやらなければならないことがあった。
そもそも再不斬がクーデターを起こしたのは、地獄の様な霧隠れの里を変えるためだ。
一度はそれに失敗したが、後続がそれを成し遂げ今や安寧を維持する側に変わったのだ。
つまり、再不斬の信念は過去も現在も変わらない。水の国の安寧を維持することだ。
そして再不斬の信念は、白の信念でもある。
ナルトたちと橋の上で戦い、死闘の末再不斬が見せた感情の発露。
彼の道具として生きていた白の心に、確かな熱いモノが彼から贈られたのだ。
だからこそ今は、道具ではなく彼を心から慕う仲間として……ここにいる。
水の国にとって、恐ろしい外敵である寄木鵺の前に。
「口寄せ秘術・明晰夢・夢現獣の術」
それを止めなかったのは、最後の情けだろうか。あるいは、せめてものの正当さか。
と言っても、そもそも犯罪者を討つのに正当性も何もないのだが……これはただの言い訳だ。これこそが彼の甘さなのだ。
濃密なチャクラの上で術式が広がる。
それをその眼で見るのは初めてだった。何せかつて鵺と戦線を共にした時は、それぞれが離れた場所で戦っていたのだから。
だがその『竜』は知っている。この様な醜悪な造形は、他にないだろう。

「シーツー、飛んで」
「オォォアアアアアォアアアア!!!」
建物や街人など微塵も気にせず、その巨体で周りに破壊をもたらしながら門から這い出る。そして大音量の咆哮を上げて、醜い蟲の様な竜が飛んだ。
しかしこれは……
「前見た時よりデカいな……」
一回りほど、以前見た蟲竜より明らかにデカい。当然ながらそれ相応に、膂力も上がっているだろうことが窺える。
そして白には、鵺がこれで離脱を図っている様に見えた。
「逃がしませんよ!」
氷遁で生み出された千本と、本物の千本が入り混じる乱撃が炸裂する。
そして今まさに羽ばたこうとしたシーツーの翅の動きが、大きく阻害されて完全な離陸を許さない。
周囲もいつの間にか、誰もいなくなっていた。どうやら戦いの始まりを察知した一般市民たちは、我先にと逃げ出したようだ。
故に、再不斬と白には周りを気遣う必要が無くなった。
「白お兄ちゃん……」
地に降りざるを得なくなったシーツーの上にて、鵺と白の目が合う。
彼女の目は、初めて出会った時よりもさらに不安定に揺れていた。それはまさに今現在の動揺を表しており、今にも破裂しそうな程の鬱屈と同時に……霧の様に儚く消えてしまいそうな危うさを白は感じる。
きっと、どうすれば良いか分からないのだと思った。
鵺は今まで出会った敵は、全てただの肉塊であり……排除してしまうことに何の感情も湧かなかった。
だが現在、彼女が幸せに必要だと信じる家族が敵なのだ。排除してしまうなんて、平時では絶対に考えない相手が……敵なのだ。
選択なんて出来る訳がない。どちらかを選べば、彼女の信念が崩れ

てしまうのだから。
心の底から信じて、幼い彼女が泣きながら縋っている柱が……壊れてしまうのだから。
そして、往々にして人は……その様に選べない場面に直面した際、やってしまうことがある。
それは、流れに身を任せること。選べないから、状況の動きに流されてしまうことだ。
それは即ち、戦うこと。
鵺が自ら動く訳ではないからこそ、彼女の手足である彼らは指示無しに動く。
彼らにとっての最上である鵺を守るために、鵺の代わりに敵を排除するために。
結局、口寄せ獣にとって他者とはどこまでいっても敵か否かでしかないのだ。
どれだけ鵺が慕っていようと、家族だと認識していようと……それはあくまで彼女の中で、でしかない。
口寄せ獣にとっての家族とは、鵺だけなのだ。
だから戦う。誰であろうと敵は敵だ。鵺が悩む必要はない。
……我々が排除すれば良い話なのだから。

「秘術・魔鏡氷晶!」

幾枚もの氷で造られた鏡が、シーツーと鵺を囲む。
そこには絶対に逃がさないという意思が感じられ、また殺気も相応に込められているとシーツーは見た。
もう白は覚悟を決めているのだ。甘い性格故か再不斬よりも覚悟を決めるのに遅れたが、術を発動したということは……そういうことなのだ。
『鵺、安心しろ』
『あの男は俺にお任せを』
鵺の精神状態を重く見てか、夜月が彼女の中から自主的に現れる。

強制口寄せは彼女の心身に重い負担を強いることになるが、彼にとって戦いの中で守れないという事の方が重要なのだ。
故に再不斬を自由に動かさないために、夜月は彼の相手をかって出た。
そもそも極論を言えば、再不斬などどうでも良いのだ。白を始末さえすれば、シーツーはすぐにでも飛び立てるのだから。
そして鵺は、見ているだけでいい。心身への負担により、シーツーの背に伏したとしても……そのまま暴れることは容易だ。
これが、夢現獣の術の忠誠心だ。
「オォォオオオアア!!!」
明晰夢・夢現獣の術により再調整されたシーツーの巨躯が、縦横無尽に鏡を叩き割る。
白の術は木ノ葉の下忍達を止められても、この幾多の人間を葬り去った竜を止めるには分不相応だ。
そして――――――
「白!!」
『秘術・肉噛(にくば)みの術』
逃がさない。シーツーの節足的な首の動きは白の速度を容易に上回り……彼の脇腹を大きく抉り抜いた。
それは奇しくも、雷切によって一度貫かれ……鵺が治療した場所だった。

もういい、もういいよ

白が崩れ落ちる。
有無も言わさぬ速攻により、瞬時に叩き割られた魔鏡氷晶からはじき出された白は……その脇腹をシーツーにより抉り食われたのだ。
防御など叶うはずもない。何せ身動きの出来ぬ空中にて繰り出された攻撃だ。
そして白はそもそも耐久力に秀でている訳ではなく、速度による回避を得意とする忍者なのだ。その万力の様な噛撃を耐えられるはずもなかった。
『ハハハ！　とても良いチャクラだ！　もう少し欲しいぞ！』
蟲の様な口に、べったりと血を付けたシーツーが鵺にしか聞こえない歓喜を上げる。
そして脇腹を押さえて、青ざめた表情と吐血した血の二色に染まる顔をした白にもう一度迫ろうとする。
が……
「止めてシーツー！」
ぐちゃぐちゃの心境の中、辛うじて戻った正気を頼りに鵺は叫んだ。
シーツーがもう少し白を喰らいたい理由も分かっているが、どうしてもそれを許す気にはならなかったのだ。
と言うのは、秘術・肉噛みの術は鵺が襲った村の一つから奪った秘術だ。それは彼女の家族の中で唯一人を喰らうシーツーに相応しい術で、肉を喰らうと同時にチャクラをも奪うことが出来る。
そしてそのチャクラは溜め込める為、元来は他の術に流用したりしていた。尤も、夢現獣の術は通常ならば一つの術しか扱えないので、彼の莫大なコストを肩代わりさせる程度しか使えないのだが。
しかし……明晰夢・夢現獣の術には口寄せ獣の再調整の他にもう一つ特徴がある。
それは、術の再付与だ。これにより明晰夢体のシーツーは奪った秘術をもう一つ扱えるようになったのだ。

その術の為に、少しでも質の良いチャクラをシーツーは欲しているのだ。
だがそれよりも優先されるのは鵺の指示である。
シーツーは鵺の声に即座に反応し、口を閉じて下がった。
「もういい、もういいよシーツー。飛んで？」
本来ならば敵の排除までが、彼らの役目である。しかし鵺はどうしても、彼らを殺せとまでは言えなかった。
敵のはずなのだ。敵は殺さなくてはならないはずなのだ。だがどうしてもそれは出来ない。
だって家族だもの。幸せのためには家族が必要で、でもその家族が敵ならば……？　もう鵺には分からない。
分からないから、この場から逃げることを選択したのだ。
全てから目を逸らして。ただ妹の元に急ぎたくて。
「白!!　てめぇ……鵺！　クソッ」
再不斬の怒号が聴こえる。だが追い縋らせない。夜月が彼を寄せ付けない。
最早彼は、鵺の背中を見送るしか出来ることは無いのだ。
そうして彼女は飛び立った。波の国の時よりも、よほど重い鬱屈……もはやどういう感情なのかも分からないソレを抱えて。

◇

殿を夜月に任せて、鵺たちは拠点にしていた旧寄木邸へ急ぐ。
そこから街は、それなりに離れているがシーツーの飛行能力は蟲がベースなのでそう遅れることはない。
「ん？　あー、何だよ。可笑しいとは思ったんだよなぁ」
そこにいたのは、見知らぬ男四人。
そして……
「鵺……姉様……」
今朝見た時よりも、何故か身長の伸びた月麻呂。それが大量の血溜まりの中で、苦しそうに転がっていた。
「月麻呂……？」

脳髄がいっそ燃えているのではないかと思うほど、熱い。先ほどまで凍える様に寒かった心の内は、血に沈む妹を前にしてあっという間に燃えあがったのだ。
「シーツー……」
心が、軋む。この様な気持ちになったのは、鵺の人生の中で初めてだった。
白に敵を殺すのを止めさせられた波の国、両親が目の前で殺されたあの時……どちらも辛かった。前者は怒りで、後者は悲しさで。
それが今、同時に心にのしかかったのだ。
決して多くない鵺のチャクラが、揺らぐ。非常に不安定になった精神エネルギーが、彼女の内からチャクラを引き摺り出しているのだ。
そして時に……感知タイプの忍は、相手のチャクラに感情を見出すことがあるらしい。
この時、残月の部下である霧の忍の内の一人……まさに感知タイプだった彼は、いっそ逃げ出したい程の薄ら寒さに襲われた。
別に鵺自体の強さは、その辺の下忍とそう変わらない。威圧感だってそうだ。蟲の如き竜がそばに居なければ、とても国家S級犯罪者とは思わないだろう。
だが、今だけは違う。
大凡、血霧の時代でも感じなかったモノ。殺しを楽しむ者も血に歓喜を見出す者も多数いた、あの頃でも感じなかった異質なモノ。
それを鵺から感じた。
「う、うぉぉぉぉぉ！」
「どうしたッ?!」
気付けば、その男の足は動いていた。残月の指示も無く、鵺に突っ込む。早くこの人間を、目の前から消したかった。そうしないと、頭がどうにかなってしまいそうだったから。
「取った！　……？」
実際に、鵺の首にその刃が届いた。届いたように、見えた。
「これは?!」
何が起きたのか分かったのは、この現象に心当たりのある残月だけ

だった。しかし彼も、これがありえない光景だった為にらしからぬ驚愕の声を上げてしまったのだ。
何故ならそれは、彼の祖父が好んでいた戦法だったのだから。
「全部殺して」
あまりに無機質な少女の声が、聞こえる。
聞こえた方向は鵺の像がある場所だが、実際には違う場所にいることを残月はよく知っていた。
そして……一人突っ込んだ男が死んだのは、その指示と同時だった。

その鎖は

残月は惨劇を前に、一体何が起こっているのか一つも理解出来なかった。

見えないナニカに抉られ貫かれ……部下が一人一人嬲る様に殺されていくのを、彼は呆然と眺めているしかない。それは偏に、水化の術があっても今動けば次の瞬間には死んでいるのではないかと、そんな悪寒が彼を支配していたのだ。

(何なんだ……何なんだよコレは……?!)

残月は今の霧隠れの里において、上から数えた方が早い強者だ。

それは幼少期から才能に支えられ、そして血霧の環境においても腐らず……寧ろ楽しんで経験と鍛錬を積んできた結果でもあった。

その為か彼は自分の腕には強い自信を持っていたし、強者と戦うことも恐れない精神力を持っていた。

実際、月麻呂と戦うのは楽しかったのだ。確かに彼女は経験も技術も、自分には遠く及ばなかっただろう。

しかし彼女の才能が、闘争本能が、極限の中で加速度的に研ぎ澄まされていくのを肌で感じるのは……まさに死闘だと、追い求めた決闘だと、心の底から言えた。

だからこそ国家S級犯罪者だと認識していた月麻呂を前に、彼は部下の介入を許さなかったし、一分でも一秒でも長く闘いたかったのだ。

終ぞ月麻呂の刃が残月を裂くことは無かったが、彼女がもう少し強く……持久力もあれば勝負はまだ分からなかっただろう。あるいは、彼と月麻呂が同程度の使い手であれば、間違いなく水化の術を維持出来なくなるまで闘いは続いたであろう。そしてその結末は、残月の敗北だ。

しかし、たった今状況が変わった。

鵺と言う犯罪者だと思っていた少女は、人違いだった。まぁそれは良いのだ。犯罪者の一味であったことは間違いはないのだから。殺してしまっても問題はない。

だが残月の水鉄砲の術が月麻呂を貫き、勝負はあったと確信したすぐ後。本当の『寄木鵺』が現れたのだ。
蟲の様な竜に乗る彼女は、確かに彼が再不斬から聞いていた特徴と一致していた。
だが話と違った月麻呂とは違い、彼女が本当に寄木鵺であれば口寄せ使いに間違いはないはずだ。故に口寄せ獣さえどうにかしてしまえば……何なら先に術者を撃ち抜けばどうにでもなるはずだったのだ。
クリスタとかいう蟹型の防御用口寄せ獣は……既に始末しているのだから。
しかしこれは、違う。悪夢ならば醒めて欲しいとすら思った。
目の前にいる竜と少女は、じっとこちらを見つめて動きやしない。だが部下は絶賛血祭り中だ。まるでお前は最後だと言わんばかりに、見せつける様に嬲っている。
月麻呂を人質にしようにも知らぬ間に回収された様で、そこにあるのはただの幻影だった。
彼の悪夢は、まだ終わらない。終わらせてあげない。

鵺は今、夜月の口寄せ解除と共に呼び出した明晰夢体の幻来の術により隠れ潜んでいた。
彼の術はかの二代目水影……の頃までは鬼灯一族に伝わっていた大蛤の口寄せによる幻術『魔幻・気蒸の楼閣』である。これは寄木の遺跡で知り得たモノだ。
そこで鵺は、シーツーの蹂躙に紛れて回収した月麻呂に寄り添っていた。
海月は再不斬に消されたのでいない。故に忍術による治療は出来ない。彼女に出来ることは何も無いが、抱き締めずにはいられないのだ。
「月麻呂ッ……月麻呂……！」
必死に妹の名前を呼ぶ。腹から血が溢れ、どんどん身体が冷たくなっていくのを彼女は涙ながらに感じることしか出来ない。誰も、助

けてくれる人などいないのだから。
「ぬ、え……ね、さま……」
「ダメッ死なないで！　ねぇ月麻呂……私を……」
置いて行かないで。
皆、皆……鵺を置いて行った。両親は二度と会えぬ場所へ、デイダラは知らぬ何処かへ、再不斬と白は……敵側へ。
もう別れなど、うんざりだった。二度と失わぬ様に力を求めたのに、結果はこれである。
まだ駄目なのかと、まだ力が足りないのかと、また失うのかと。
そう思わずにはいられない。あるいは、この世界に幸せなど無いのではないかとすら思う。
いつか口に出した様に、ずっと夢の中で揺蕩っていられればそれが幸せなのかと。寄木にとって夢は幻ではなく、確かにそこにある世界なのだから。
だがそんな時、最初はデイダラが……そして出会った家族たちが、鵺と現実を繋げてくれたのだ。
その鎖が無くなればどうなるのか、鵺には分からなかった。考えたくも無かった。
ただただ寂しくて辛い。そんな未来が待つ現実など。
だからこそ、祈りは届いた。
神にではなく、月麻呂に。その家族への親愛が、まごうことなき強い想いが！
「だい……じょうぶですよ。ぬえねぇさま……わたしは……ねぇさ、まを……ひとりぼっちになんて、しませんから……」
月麻呂だって、独りの辛さを知っている。その悲しさを知っている。
どこまでも寒い、二度と幸せになれないのだと信じて疑わざるを得ない、そんな日々を知っている。
月麻呂はたった一人の姉を……自分にもう一度幸せを教えてくれた姉を地獄に墜としたくは無かった。それこそが己の役割なのだと、自分は彼女の心と身体を守る剣なのだと信じているから。

ソレが成功したのは、きっと残月との戦いで『屍骨脈』が大きく成長したおかげだろう。
本来無い場所に骨を生成するのは、中々に難しいことだった。主要な臓器が多数ある腹部など特に。
だが、月麻呂はそれを成し遂げた。
まず初めに完全な生成は間に合わなかったが、水鉄砲の術を体内の薄い骨で受けて初撃を軽減した。
そしてたった今。鵺の抱擁に興奮した月麻呂は内からチャクラを生成し、傷付いて出血が止まらない臓器を骨で覆って強引に止血したのだ。無論危ない状況ではあるが、これですぐさま死ぬことは無くなった。
何なら傷付いた皮膚や筋肉は体質上勝手に治るので、気にしなくてよい。となればこのまま海月の復活まで耐えるのは、容易だろう。
「月麻呂！」
「ねねね、ねぇさま?!」
すっかり鵺の腕には収まりきらなくなった月麻呂を、彼女は力いっぱい抱き締めた。もう離さないよう。消えてしまわない様に。
そしてそれと同時に、シーツーによる部下の処刑が終了した。もはや無事な部分を探す方が難しいほど損壊した遺体の山に、かの竜は座していた。それももちろん、幻来による幻術でその姿は見えないのだが。
「さ、初めよっか」
月麻呂を労わる様に横にし、立ち上がった鵺の瞳が妖しく煌く。
それはまさに……魑魅魍魎の瞳だった。蜃気楼の鵺も、同様に。

悦楽を覚えた日

誰かを傷付けることに、悦を覚えたことは無い。
「や、やめろ……ッ」
誰かを殺すことを、楽しんだことは無い。
「く、くるな……」
死体を前にして覚えるのは、ただただ安堵だった。
「なんなんだ、なんなんだお前ぇ……ッ?!」
家族の死を前にして覚えるのは、ただただ悲しみだった。
「ねぇシーツー」
だけど、今は違う。
「それ美味しい?」
『あぁ、良質なチャクラだ。素晴らしい』
シーツーによって、憎き男の水の身体がどんどん削られていくのは……
「でもやっぱり、元に戻っちゃうねぇ」
楽しくて仕方がなかった。

残月は今、見えないナニカが己を身体を喰らっているのを、ただ眺めることしか出来なかった。
水化の術のおかげか、致命傷を負うことはなくチャクラの消耗のみに被害を抑えられているのだが……
それこそが彼の惨殺処刑を長引かせている要因になってしまっていたのだ。
本来ならば負傷のリスクを全て無視して逃げることも、あるいは幻術のタネは分かっているので抗戦に打って出ることも出来たはずだ。
だがそうしない……いや、それが出来ない理由があった。
それは偏に、彼の下半身がまるまる凍っているからだ。
彼は水化の術に誇りがあった。一族の秘伝に誇りを抱いていた。
確かに土遁や雷遁には弱い側面があるが、よほど高いレベルの使い手でない限り術を破られることは無いと思っていた。

しかしそこにはもう一つの弱点があるのを、彼は知らなかったのだ。
とある一族がまだ栄えていた頃は、鬼灯一族でもその存在は脅威だと知らされていた。だがその一族は既に滅亡して久しい……現代の鬼灯である残月がそれを知る由は無かったのだ。
『秘術・腐肉霊息(ふにくれいそく)の術』
それは秘術・肉噛みの術で取り込んだ肉片からチャクラを抽出し、溜め込むのではなく吐き出すという工程から生まれた術だった。
かつてその一族は、秘術に特化したが故に性質変化を満足に扱える者が少なかった。故に他者から奪ったチャクラ性質を吐き出して、無理やり忍術の性質相性勝負をしていたのだ。
つまり今シーツーは、白の肉片から抽出した氷遁チャクラを吐息に混ぜて、彼の水化した肉体を凍らせて捕らえているのだ。
もちろんその抽出チャクラには限りがあるため、永続的に使えるわけではない。しかしなまじ白のチャクラの質が良かったためか、残月が死ぬまで逃がさないなど……実に容易いことだった。
「ガッ……チクショウ……ッ！」
逃げられない中で、修復される度に上半身が抉られる。
敢えて凍った場所を狙っていない。そこを狙えば、彼が壊れてしまうから。
「寄木のね、初代様はホントに鬼灯一族が嫌いだったんだって」
苦々しい表情を浮かべて何とか抗おうとしている残月を、鵺は楽し気に眺めながらそんなことを呟いた。
彼は何をと言いたげな顔をしているが、別に会話など求めていない。これはただの余興だ。
普段ならば殺す相手になど毛ほども興味関心を持たないが、何故だか彼だけは違ったのだ。
それは大事な大事な月麻呂を傷めつけた男だからか、あるいは……寄木の血がざわめくからか。
「だからね。使えもしない水化の術のことを、これでもかと秘伝の書に書いてあったの」

使い方……だけではなくその仕組み。そして術が内包する弱点を特に。
それを書いた寄木一族の初代当主、寄木晴明の気持ちはよく分かる。
きっと、この術が使えずに虐げられたからこそ、執着した。それでもなお使えないから、壊したかったのだと鵺は思った。
どうしてそう思うのか。それは、鵺も同じだからだ。
幸せな世界を壊されて、だからそれに執着して、それでもまだ幸せになれていないから……妬ましくて他者の幸せを壊した。
水の国に来た時、ずっと鬱屈を溜め込んでいたのだ。
ガトーカンパニー本部を破壊しても満足せず、最初の村はみんな幸せそうで……だから全部殺した。
結局、殺しても何も思わなかったのだけれど。ただただ空虚だったのだけれど。
「そろそろだね」
詳しく書いていたからこそ、その終わりもよく分かる。
チャクラが枯渇し、明らかに水化の術による修復が遅くなったのだ。
じわりじわりと、まるで毒に蝕まれているかのように、残月の命の終わりが近付いてゆく。
「楽には殺してあげないから」
あれだけ妹を痛めつけたのだから、そうすぐには殺さない。
水化の術が完全に切れたところで、鵺はわざわざ姿を現した。
既に両腕はシーツーが食い千切っているため、無駄な反撃も無い。鵺の油断を突く様な忍術も使えないのだ。
「テメェ……碌な死に方しねぇぜ……」
チャクラだけでなく、大量の血液を失って青ざめた残月が漏らす。
もはや喋る気力もないのか、掠れて低く、怨嗟の様な声だ。
「……私が怖がってるのは、死に方なんかじゃないよ」
それはきっと、死に方よりも生き方に。
生きている間に、どれだけ不幸になるのか。どれだけ奪われるの

か。
勿論死ぬのは怖いが、それはそのものであって死に方ではない。己の死は何よりも恐れるべきものなのだから。
だからこそ、鵺は歩き続けるしかない。
初めから破綻してしまっているのだから、崩壊に追い付かれて足元が崩れ落ちてしまわない様に歩き続けるしかないのだ。
「アハッ」
鵺の小さな手が、残月の首に伸びる。
それと同時に、鵺の口から悦が漏れた。
思えば初めてなのだ。自らの手で敵を殺すのは。
まさしく、他の誰にも感じなかった命を刈り取る悦楽。それを鵺は初めて感じたのだ。
そしてゆっくり、ゆっくり。
全ての鬱屈を叩き付ける様に、残月の首を絞める。
その決まり切った結末まで、そう時間は掛からなかった。